

拂ひを食つて外に行くところはない、松藏何の譯か分りませんが、件の武士に尾いて参りま
 すと、可なりの屋敷、十三歳位の男の子と十一歳位の女の子とが出迎へ。○阿父様お歸りな
 さいまし」武「オ、只今戻つたぞ、松藏汝は此横を廻ると勝手口がある、其處で足を洗つて上
 る様に」松「へエ」松藏が臺所へ廻つて來ると女中が、最う主人から吩咐られたものと見え其
 處へ立出。女「松藏さんと云ふのはお前かい」松「へエ手前が百姓松藏で」女「サア、此盥へ水
 を入れて足をお洗ひ、手拭は此處にある、是れで拭いてね」松「へエ有難うございます」足を
 洗ひ水を拭ひ取ると、女中が案内して奥の間に連れて來る、先刻の武士は床の間の前に端然
 と坐つて居ります。武「松藏前へ進め」松「へエ」武「拙者は御領主太膳太夫殿近臣で太田市之丞
 と申す者だ、最前石原の門前で出會した節、直に話さうと存じたが、途中では話しも出來
 んから連れ參つたが、只今拙者下城の節主君信虎公、庭前において孕み女の腹を立割つて巢
 籠りを見たとき云ふ噂があつた、尤もこれは石原刑部のやつたことで、信虎公の思召から出
 た譯ではないと云ふものは、刑部が主君の御機嫌を取結ぶために、主君には明さず突如に女
 の腹を割いて胎つたものを引出して御覽に入れたのだ、石原の家來に汝の妻を取られたとあ
 れば、只今殺されのは夫に相違ない」松「えッ、手前の嫌アのお腹を割いて懐胎を出す、何と
 云ふ情ないことをしたものでせう、斯うしては居られぬ、代官役所へ訴へて白い黒いを分け

て貰はにやア」松藏血相變えて立たんと致
 します。市「コレ松藏騒ぐな、幾ら代官役所
 へ訴へたところで、相手の石原刑部は御領
 主の威光を笠に着て居る、代官とても御領
 主の代官だ、理を非に落して汝を取捕へや
 うとも刑部を取つて押える筈がない、無理
 が通れば道理引込む是迄の因縁と諦念ろ、
 心を静にして考へを致し直せ」松「へエ」松
 藏驚きやら悲しみやらで胸がドンチャン：
 俯向いた儘、兩眼から涙を瀧の如く流し
 泣いて居ります。市之丞は氣の毒と心得、
 市「是れ松藏、まことに汝は氣の毒な身の
 上だ、妻の仇敵は石原刑部だが、百姓の身
 の上では如何することもなるまい、斯様致
 せ、便りにして居た妻を失ひ、迎も百姓業



も手に付くまいに依つて、拙者の屋敷に參つて奉公致せ、身を安樂にして妻の菩提を弔ひ、心静かに時節を待て、女中のおとくと云ふ是れも汝と同じことで鰥寡孤獨、如何にも不憫のものであるによつて長年召使ひ、今では家内のもと同様に心得て居る、汝も是より奉公致せ伴彌四郎娘おてるの外人なき我屋敷、格別骨折りこともない、今迄見も知りも致しませぬ太田市の丞、最と親切に説き聞かせましたから、松藏は世に頼母しく、松「旦那様有難う存じます、夫では女房は石原刑部のために腹を割かれて殺されたでございませう、幾ら歎いても死んだ女房が戻つて来るでなし、手前も汗水垂らして百姓をするも厭でございませう、御親切に甘えては濟みませんが、どうかお世話なすつて下さいまし」市「ホウ拙者の意見に慕ひて奉公する氣になつたか」松「何分お願ひ致します」市「此儘當家に居る譯にもなるまいから、一度酒折へ歸つて取片付けをして来るが好い」松「畏りました」市「就いては心得のため申置くが、石原刑部は我君のお氣に入り、汝を我屋敷へ引取つたとすると、或は汝の身のためにならぬ様な手段を取るやも斗られぬ、根が佞奸邪智の曲者、少しも油断がならぬに依つて村へ歸り家を片付けるにしても、必らず拙者方へ引取られると申すなよ」市之丞は深慮のある人物、松「心得ましてございます」松藏泣々故郷の酒折へ歸つて来た、村の者には、松「女房は御領主様に取られて殺され、世の中に望みがないに依つて諸國の神社佛閣を廻つて、女房の菩提

を弔ふ」と申し觸らし、家財道具を悉く賣拂ひました、身は六十六部の姿と相成り、一同へ暇乞ひをして酒折を立出でました、市之丞の屋敷へ来て委細の話をする、市「松藏よくぞ左様に取斗つた、却々考へのある男だ」と賞美し、是から大小のさし做しを教へ、武家の言葉使ひを習はせ、袴を穿かせて若黨として召使ひます、松藏は情ある主人を得て最と忠實忠實しく立働らき、仕事に陰日向と云ふことがございませぬ、如何にも誠義實直なものだから評判が好い、○「太田の家では女中と云ひ若黨と云ひ、好いものばかりだが、あゝ云ふ奉公人を置當たのは仕合せだ」と近處でも羨しがる位、市之丞は苗字が無くては不可ぬと松藏に太田の姓を呉れ、太田松藏と呼びし、暇ある毎に劍術を教へ、夜は學問素讀を始めさせました、人の熱心は豪いもので、目に一丁字のない松藏、木刀の持様も知らぬ松藏も、主人の吩咐は大事と心得て勵みまするところから、兩三年にして若黨一疋前は充分勤まるやうになりました、此分で押して往けば別に山本勘助が出て来なくても天下泰平でございませぬが、騒動は何時起るか知れたものでない、或日のこと市之丞が宿直番の時、一椿事が持上つたと云ふものは、丁度夏のこと、宿直は冬より夏が辛いと申します、寒い時はドノ様にも寒を凌ぐ手當はつくが、暑中は熱さを避けるには海邊へでも出る外はない、煽風機などのない昔のこと、蒸熱い宿直の部屋に徒然と坐つて居るのは容易なことでありませぬ、カラ照りはまだ好



いが蒸されると来ては身體が綿の様になつて了ふ、折しも八刻頃市之丞上下を着けたなりで宿直室の柱に凭掛り、堪らなくなつたものと見え、コクリツツと居眠りを始めました、此時運悪くも石原刑部が前の廊下を通る、ヒヨイと覗いて見ると此有様、刑部何を合點たのか莞爾笑ひ、お庭先へ出て来て鎖で繋いである一疋の猿猴を連れて来た、總體の毛が眞白で實に美事な猿猴、是れは大膳太夫信虎公が御寵愛秘藏のもので、指揮に従つて種々な藝を致します、御近臣の頭を打したり、尻を叩かせたり、或は飛かゝらせたり、或は扇子其外の持物を渡はせたり杯して、御近臣が狼狽驚くさまを見て信虎公此上なき慰みとして居られる、どうも此猿猴と来ては御近臣方大禁物だが、敢て手出しをして懲しめることが出来ない、殿の御寵愛の畜類だから其儘にして置くのを好いことにして、猿猴め常に御近臣を馬鹿にして居る、刑部此の猿猴を引來つて市之丞がコクリツツとやつて居る方を示し、一本の木劍を出して彼れを打据ゑる真似をして見せる、畜類ながら藝當の出来る猿猴、殊に毎度御近臣には擲擧つけて居る、早速心得右の木劍を持つてノツツ宿直部屋へ這入つて来た、衝立の此方に刑部隠れて様子を見て居ると、猿猴は木劍を振上げ、快い心持に坐睡をして居る市之丞の頭をコツコツと市之丞ハツと眼を見開いた、見ると猿猴が再び木劍を振上げ打たんとするところでございます、市己れ畜生の分際として武士の頭上に木劍を加へるとは不屈き至極

ッ」怒つたの怒らないのぢやアない、是れは誰だつて怒ります、市御寵愛に甘えて近習近臣を侮る憎い奴だ、今日こそ成敗して呉れるから覺悟をしろ」打込んで来た木劍をトツ放して置いて、猿臂を延して猿猴の前足をムズと掴み、シリ／＼と引寄せました、猿猴め驚いた、今迄は何をしたつて指一本でも指れぬやつを、前足を甚く掴まれ引寄せられた、驚キヤッ／＼と騒ぐ、市之丞は右手に大きな握り拳をこしらへ、ハツと息を吹掛けて頭上をボカリツツと猿猴は愈よ悲鳴を上げる、自分が箠し掛けたのだから此有様に堪り兼ねたものと見え、ツカ／＼衝立の蔭から石原刑部出て来た、刑アイヤ太田氏、上御寵愛の猿猴を何となさる」市何ッ、倍は石原御身が此猿猴に悪さを箠しかけたのでござるな」刑其許は當直でありながら居睡りをするとは如何なる次第」市役目の落度には上の御成敗がある、其許斯様な畜類を我等に箠し掛るとは宿意あつての事ならん、市之丞に何の宿意があるか承はらう」刑己れの過失を棚へ上げて置き、人を責むるとは言語道斷、平素忠義振つた奴の行ひが氣に食はぬ、サア御寵愛の猿猴をお放しあれ」市ナニ拙者を忠義振つた奴とな、汝の如き鼠輩小人が居るから武田の御家にゆるぎが来る、最う今日は用捨は致さぬぞ」全く石原刑部は大の奸物、武田家の忠臣は誰一人彼れと共に齡するを快しとするものはありませんが、何分信虎公のお氣に入りだから手を出さずに居ります、市之丞此時鬱憤が込上げて来た、榮螺

の如き鐵拳を固めて、左手を押えた猿猴の面上を力任せにボカリ擲る、大力無双の市之丞に擲られては堪りませぬ、兩眼バツと飛出し「猿キヤツ」と云ふが此世の名残、刑「ヤア太田は御寵愛の猿猴を打殺した、市之丞は發狂いたした」市「黙れ刑部、我等如何にも猿猴を殺した發狂を何時致した、己れ武田家の奸臣覺悟をしろ」一刀をスルリ引抜いて刑部に切つけました、刑部においてはヒラリ體を躲してバラ／＼と逃出す、刑「太田市之丞發狂でござる、各各出會候へ居會候へ」聲を限りに叫びながら廊下を逃げる、市「己れ卑怯未練な石原刑部、引返して勝負しろ」刀を振廻して追掛けたが、心あるものは事の如何は存せぬが、太田が石原へ刃傷と悟つて一向出會ない、けれども武田は大諸侯、多くの家來のうちには石原へ心を寄するものも亦澤山ございます、バラ／＼大勢出て来て廊下へ立塞り行手を遮る、石原刑部は其儘、大膳太夫信虎公の御前へ出で、刑「申上げます」信「何ちや刑部」刑「太田市之丞御寵愛の猿猴を打殺し、手前これを制止せんとしたるところ、御殿内も願す刀を抜いて騒ぎ廻ります、必定發狂仕つたものと存じます」信「ナニ市之丞め我秘藏の猿猴を打殺したとか、以つての外の奴、直に切腹申付けるであらう」市之丞に於ては多くの人々に遮り止められ、齒噛みをして居るところへ、太守信虎公の仰せとあつて切腹の由達せられました、市家來と畜類と生命を取換へ様とは、一國一城を治めるもの、致し方でない、併し君命に

伴るは士の恥るところ、我腹の切かたを見て奸物共後の手本にせよ」と呼ばはつて太田市之丞は、遂に城内御廊下先において立腹を切つて相果てましたは氣の毒、恰好此時居合した市之丞の懇意な川口善次郎、最期の有様を見ると其儘城内を飛出した、太田の屋敷へ来て、市「松藏居るか、松藏々々」玄關先で大聲を上げます、松藏出て来て、松「これは川口の旦那様、手前に何か御用で」市「彌四郎殿おてる殿は居られるか」松「へエお兩方ともお出でございます」市「善愚圖々々しては居られぬ、貴様は市之丞殿には大恩をうけた人物、彌四郎殿おてる殿を伴つて早く此の甲州を退去しろ」松「何のことだか薩張り分りませぬが、夫は一體どうしたのでございます」市「善オ、然うだ、まだ譯を話さなかつた、是々斯う／＼で只今太田氏は切腹をせられた、石原刑部は奸智に長けた奴だに依つて、彌四郎殿おてる殿が成長して、後日父の仇なぞと覗はれては面倒、根を断ち葉を枯らすの策で、殿様へ如何なることを言上せぬとも限らぬ、依つて注意のため罷越した、貴様は御兩所を伴ひ、安全の地へ移して時節到來を待つが宜からう、早速に取計らへ、寸善尺魔おくれ取返し付かぬことがあつてはならぬ」親切に云つて呉れます、松藏は仰天して暫くは物の心も付かぬ位、なれども松藏此時は以前の松藏でない、多少の學問も出來、腕も幾分覚えが出來た、忠孝の道も辨へましたから、松「夫れは一大事でございます、御親切様に有難う存じます」其處へ彌四郎が出て來た當年

十四歳まだ童子でございますが、變事を聞いて大いに驚く、妹のおてるも来る、女中のおとくも来る、川口善次郎を取巻いて立退きにつき種々評議を凝しました。が、借斯様な突發的の事件には別段好い智慧も出ませぬ、おとくは従來奥向一切を任せられてあるから、金の在場其外のこととも悉く承知、金子を取出して松藏に渡し彌四郎おてるの着類を持ち、自分達は着のみ着の儘でございます、彌四郎に傳家の大小を背負せ、松藏がこれを背負ひおとくはおてるを背負つて、住馴れた屋敷を跡に府中を立退きます、此方は石原刑部、川口善次郎が察しの通り、信虎公へ言上しても、倅達を討てとは御沙汰があるまい、これは我手一つで市之丞の小供を殺す方が好いと、悪い奴で御殿を引退ると其の儘人數を太田の屋敷へ向けました、此時は最う一同退散の跡で人ツ子一人居りません、家内中取散してある様子を見て取つて返して石原に報告する、刑ヤア逃げ亡せたとあれば愈よもつて安心ならず、子供を連れ上は道とても抄取るまい、追つ掛けたらば豈取逃しは致さぬ、ソレ追手を掛ける」出口出口から八方へ人數を分けて出しましたが、どうしても捕へることが出来ません、ト云ふものは松藏始めに思案した、街道筋を逃げたでは追手が来る、在道々々と行けば大丈夫、其處で在所道を段々逃げて行つたから追手に逢はずに済んだのでございます、とうとう野越え山越えをして上州へ足を入れた、他領へ来れば最う安心、此處でおとくがとく松藏さん、逃げる

一散味で落つく先も極めなんだが、お前に何處か心當りがありますか」松「サア甲斐國なら少しは知者がないでもないが、上野國には一向にない、何處へ往つたものかな」と私の先祖は神保と云ふところから出たものださうな、其の神保には従兄弟があると亡なられた母の話しを聞いた事がある、頼みになるかならないか判らないが、満更便りないところへ行くよりは増だ、神保へ行つて見ては如何だね」松「神保とは孰方の方だらう」と多胡の里神保の藤三郎と云ふ百姓ださうな」松「夫では落着けるか落着けないか分らぬが、其處へ行つて見様」と就いては松藏さんお前に相談がある」松「何んだえ……」と「外ぢやアないが、私の親類を尋ねるにお前さんと私と他人の中ぢや世話になり惜い、年頃だつて似合つて居るから、私はお前さんの女房と云ふことに行きたい」松「ヤッ夫りやア困る、私がそんな真似をしては死んだ嬢アに濟まない」と「イエ本當に女房にならうと云ふのではない、折角落着けやうと思つても居憎くなつてはお互ひのためにならぬ、お互ひのためにならぬのは和郎様達のお爲めにならぬことゝなる、お屋敷の大變に私は浮氣な心で然う云ふのではない、ただ表向だけでも夫婦に繕ひ、専主を連れて來たと云へば世話になりよい、他人を引張つて來たでは不都合なこともある」松「成程夫も尤もだ、お互ひに氣を知り合つた中、全くは夫婦でないが、表面だけ夫婦の積りで行くことなら好い」と「あゝ然うして呉れれば私も厄介を頼みよいと云ふもの」素

より忠義の兩人でございませうから、道々斯様な相談をして來ました、双方とも浮いたる心は
 ありません、借多胡の在神保と尋ねると多胡は古來有名なところ、直に分る、道端の百姓に
 松「鳥渡物をお尋ね申します」耳「ハア何でがすえ」松「神保の藤三郎さんと云ふお百姓の家は
 何處でございます」耳「あ、藤三郎様をお尋ねなさるか、藤三郎様の家はのう、此道を北へ行
 くと二股になつたところがある、夫を左りへ取つて曲りくねつて往くと向ふに大い森が見え
 る、其森の前が藤三郎様の家だ、二夕股を間違つて右へ行つちやア不可ないせ」松「へエどう
 も有難う存じます、おとくさん何でも好い家の様だよ」とアレ此人は女房にさん付けをする
 奴があるかね、今からおとくと呼棄てにする稽古をして置かないと、先方へ往つた時間誤付
 くぢやないか」松「夫も然うだおとく、ア、おとく、ムおとく……」と「なにもそんなのべつ
 に呼ばないでもない」松「ケレドモ一寸稽古をするんだ、百姓衆が藤三郎様と様を付けて呼ぶ
 のは豪家と見える、好い案排に隠匿つて呉れ、ば好いが」とサア〜二股の道へ來た、左り
 へ取らなくては不可ない、オ、森が見える成程大きな森だね」教はつた通り來て見ると、森
 は長屋門になつて居ります、おとくがおてるを背負たなり笠を取つて門へ這入り、松藏は表
 に待たして置いて潜り戸からと「御免下さいまし」○「誰だお這入り」と「藤三郎さんは此方
 でございませうか」見ると、年の頃五十餘りの品のよい老爺、圍爐裏で火を焚いて居たが、上

り鼻まで出て來た ○「藤三郎は私だがお前
 さんは」と「まことに妙なことをお聞き申し
 ますが、此方様で甲州の方へ親類のものが
 行つては居りませんか」藤「甲州……あ、甲
 州へは俺の伯母が行つて居たが、夫が如何
 かしたかね」と「伯母と仰せられるのは道と
 云ふのではありませんか」藤「あ、然うだ、
 お道と云ふ名だが……」と「それでは此方に
 相違ない、私はお道の娘のおとくでござ
 います、始めてお目に掛ります」藤「ヤアお
 前はお道の娘か、イヤお道が三四年前に死
 んだと云ふことを風の便りで聞いた、娘が
 あると云つたが何う云ふ暮しをして居るか
 と、偶には思ひ出すこともあつた、どうし
 て尋ねて來なすつた」と「是には深い譯がご



ございますが、緩々申上げなくては分らぬことで、差向き私しは所天と共に御主人様の子息ちやん嬢ちやんをお連れ申して来たのでございます、御厄介でも少しの間お世話をお願い申したいのでございますが、如何でせうか「驚あ、然うか、仔細を聞かなくては、世話をするかしないか返事も出来ないが、兎も角も上らつしやい、私は伴が二人あつて兄の方には嫁を貰つてやつたが、弟はまば獨身、私は妻女に先立れて女手に困つて居る、斯變廣い家に人少なだ、伴達は野良へ出て居るが、幾ら人手がなくても一晩や二晩は泊めて好い、其上話を聞いて出来ることなら世話を、亭主は如何した跡からでも来るのか」田舎の人は正直でございませう、頼みある言葉におとくも嬉し涙、門口へ出て「松藏さん大概承知をして呉れさうだ、話を聞いた上とのことだからサアお這入り」松「あ、夫は有難い」松藏が中へ這入り、一應の挨拶をした上で、足支度を取り座敷へ打通りました、却々廣い家で身代も相應と見え普請も立派に出来て居ります、藤三郎が出て来る「叔父さん是れは松藏と申す手前の所天でございませう」松「初にお目に掛ります手前は松藏」藤「俺が藤三郎だよ」と初對面の挨拶をする。

(第十三席) 松藏清水観音の示現を蒙る事、并に勘助怪物に深傷を負

はする事

捨る神あれば拾ふ神あり、藤三郎は至つて親切な男で、おとくと松藏が迭み代りに主家の大變を説き「松、是れが若旦那の彌四郎様、これがお嬢様のおてる様」と引合せる、彌四郎も優なしく「彌、お父上は悪人のために非業の御最期をお遂げなすつた、家は無論斷絶と心得る、兩人の孤獨を憐んで何分とも頼むぞよ」との言葉、藤三郎涕を流し「世が世であらつしやつたらば、我々の様な百姓は土下座でお迎ひをせねばなるまいに、頼むとの御言葉は勿體ない、おとくも松藏どんとやらも安心しなさい、五人七人寝て食つて居た連、別段困る身代でもない、藤三郎押切つてお世話申す」大肌脱ぎで受込みました、舊幕府の頃上州から俠客男伊達が澤山出た、元來上州と云ふところは總て俠氣に富んだ人間が多い様でございます、其内に藤三郎の伴藤太郎嫁おきぬ、二男の兼三郎、是等の人が野良から歸つて来る、藤三郎は三人を呼び「藤、伴達も嫁も聞け、此處にお在なざるお二方は甲州の御家來太田市之丞様の御子息とお嬢様、これは毎度茶話しに出る甲州の伯母の娘でおとく、このお方はおとくの亭主松藏殿、仔細あつておとくが若様お嬢様をお連れ申した、當分はお世話申上げる積り、お前達も疎略のない様にお世話を申上げなくてはならぬ」屹と申渡し、家内の者も心得て引退

る、松蔵おとくはホツと安心して、夫より夕飯、久方振で心易く酒食を致し、奥の二室を借
うけ奥の室には彌四郎おてる、次の室には松蔵おとく、主と家來だから勿論室が違ふ、嫁の
おきぬが蒲團を出して来て、「これを延べて上げて下さいまし、此の二夕通りは奥、此の一
通りは此方」とまことにお氣の毒様だが、今一ト通り拜借が願ひたい」御夫婦だから一緒
で差支へは無いでせう」とナニ夫婦でも長らく別々に寝て居た癖があつて一つには寝られま
せん」オヤ然うでございませうか、此處らでは夫婦が別々に寝るものはありません」此邊で
は如何にも然うでございませう、此位の百姓になると寝間が別に出来て居ります、寝間と云
ふと贅澤な様だが、決して贅澤の沙汰でない、昔のお百姓の寢室と云ふのは六尺四方、又は
六尺に九尺ぐらゐ、家の隅ツコで薄暗いところ、其中には菰を敷き、其上に一面に叩いた藁
を敷く、上へ薄い蒲團を一枚敷き掛るばかり、夫婦が其中へ藻繰込んで寝ます、是れが頗る
温かい、斯様な中に寝るのだから夫婦別々に寝た例しはありますまい、夫婦が別のところへ
寝るとすると、同様な部屋を更に拵へなくてはなりません、おきぬは合點の行かぬ顔で別に
一ト組夜具を出して來ました、松「あ、やつと是れで安心した、夫婦だなんと云つて一つ所
へ寝せられては堪らない」朴柄な人物丈大當惑をするも當り前、松蔵は翌日より朝早く起
き出で、根が百姓だから百姓業は何一つ知らぬ事はない、外のものと一緒になつて働らく、

女手のないうちだからおとくは、食事の世話萬端を受持つ、只世話になつて居ては必苦しい
から、各自充分な働らきをしますが、彌四郎とおてるとは主人扱ひにして聊かも疎略に致し
ません、從兄弟とは云へ藤三郎は五十有餘、此有様を見てホク／＼喜んで居ります、當分は
極安泰で彌四郎おてるの成長を待つ、併し家内中不審とするのは只一つ、松蔵とおとくと
全く夫婦であらうか無からうか、同じ家に長く居ると事實でないことは誰が目にも見える、
斯くして早くも足掛二年を経過し彌四郎十六歳おてる十三歳と相成りました、松「おとく年の
經つのは早いもので、此處へ來てから最う二年になるな」とホンに昨日今日と思つて居た
のが二年經つて了ひました」松「彌四郎様はお十六、甲州にござれば加冠も去年はなさる筈、
斯うして居るのは無事で好い様なもの、若旦那様お鎮様には、何とかして石原刑部を討た
して上げなければ濟まない、定めし旦那様は草葉の蔭で松蔵もおとくも附甲斐ない奴だと恨
んでお出なさるだらう」と其事は私しも前から心配して居るが、相手が何しろ大身、甲州で
は飛ぶ禽を落とす勢ひのある石原刑部、容易に出會は覺束ない上、石原と云ふ奴は名代の大
勇、手の付け様がないに困ります」松「さうだなア、彼奴が出世の基は、甲州の不動山不動城
の城跡に大賊が棲んで居た、これを退治し様と評議の時に石原刑部：前名小六が、此賊は
自分一人にて退治仕ると、遂に不動山へ乗込み、強賊十三人を塵殺しにした、其功に依つ

て御領主の信虎殿お引上げになり、今日の如く大身になつたのだと云ふ、されば豪勇無雙な奴には違ひない、よし若殿様が首尾よくお出會になつても是れを討つのは容易ならず、此上は神佛のお力を藉りて、彌四郎様おてる様の御孝道を立てさせて上げねばならぬ」と夫より外に刑部を討つ工夫はありませぬ、夫では斯うしませう、當國石原の清水觀世音は大層靈驗顯著だと申します、此觀音様へ手前が三七日のお籠りをして彌四郎様おてる様の仇が打てます様お願ひしませう」松「イヤお籠りなら乃公がする、お前は家内に無くてならぬ人間となつた、藤三郎さんにお話し申し、乃公が三七二十一日の暇を貰つてお籠りに出掛ける」とさうですが、夫では私しも家にあつて鹽物断をし、共に御佛の袖に絶りませう」相談一決して藤三郎にも話し、夫より松藏は清水の觀音堂に參りました、これは俗には觀音山と呼び石段六百二十五段も上つて始めて本堂に達すと云ふ小高き山、此頂きから四方を眺むれば、淺間山の白煙が手に取る如く、妙義山の尖端が視目の前に横たはり、遠くは常陸上總の山々、近くは碓氷川、烏川の流れ、眼下に這つて實に景色に富んで居ります、華藏山清水寺と稱し、大同三年坂上田村麿の開基にかゝり、本尊は沙門延鎮の作、千手觀音でございます、御當今は境内に遊園地も出來、大層繁昌をするさうでございますが、山本勘助時代には實に森閑とした靈地でございました、松藏においては井水を浴び、三七日の間断食で、松何卒主人の仇

一つには手前の女房の仇、石原刑部を討たしめ玉へ」と一心不乱になつて祈念致します、恰度三七二十一日満願の日、断食でございますから身體が堪りません、水垢離を取つて本堂階段の傍迄戻つて來ると、疲れ切つて綿の如く欄干に凭れかゝつて一ト休みと思ふ間に、我知すらトロくと睡りに就いた、然るに何處ともなく、伶麗たる音樂の響きと共に、彩雲たなびき忽然として一童子顯はれ、〇善哉松藏、汝の願ひは觀世音菩薩も納受しましたるぞ、今より七日の後、姿を變えて平井の城下外れ、古りたる庵室のうちに待て、本望成就の助けとなる可き一人を引合し遣はさん、夢々疑ふことなかれ」と言終つて掻き消す如く姿が見えなくなる、松「少々お待ち下さい、伺ひ奉ることがございます、もし」夢中に松藏大聲を上げました、此時麓から七八人の人々、おとくが先立ちで屈竟の百姓ワイワイ、ワイワイ、上つて來た、おとくは目早く松藏の姿を見て駈寄り、オ、松藏さん、マアどうも大層な寢れ方、何を云つて居なされるのだ、サア、松藏さん確乎おし、氣を確乎に持たなくてはならぬ、松藏さん、揺動かします、松藏ハツと我れに返り、松「ヤッおとくか何うしてこへ、何ぞ變つたことでも出來たのか」自分の身體の弱つて居るのも忘れ、ヒヨロと立上る、と「あ、これ、足取りが悪るい、靜かにしなくてはなりません」松「もしも若様お嬢様のお身の上に、何ぞ間違ひでも出來たのではあるまいか、何で斯う大勢の衆を連れて來なすつ

「自分のことは思はず、偏に彌四郎お
 てるの身上のみ案じて居るのは無二の忠
 臣……」と「イエ決して心配しなさんな、
 そんな事で来たのでは無い、今日は満願
 の當日、三七日もの荒行で定めし身體が
 疲れて居やう、六百二十五段の石段は満
 足に下れるものでないと思ひ、達者な衆
 を頼んで迎へに来たのだ、サア〜麓へ
 下らなくてはならない」松、オ、然うかい
 其慶心配をして呉れなくても、一心不亂
 の此松藏、ナニ石段が下りられぬことは
 ない」と夫がお前心得違ひ、神佛にお頼
 り申してもお前の身に過ちがあつたら、
 若様お徳様は如何なると思ひだ、弱り
 果た其身體、釣臺では石段が下りられな



い、血氣な衆が代る〜、背負て下りて下ると云ふ、皆様お頼み申しますぞ」おとくも實
 に心實のある女、其處で迭み代りに松藏を背負ひ、六百二十五段の石段を下り、無事に多胡
 の郷神保の里の百姓藤三郎の家へ連戻しました、斷食絶食をしたものには腹一杯食はせるこ
 とは禁物、食へば食つた〜めに忽ち往生して下ふ、始めは飯汁の様なものを飲ませ、追々に
 食餌を與えて参ります、三七日の斷食に直身體が元通りになる様に思ふのは間違ひ、併し病
 氣があつて弱つたのでありませんから、全癒するのは早うございます、三日四日五日と經ち稍
 元氣が恢復して來ました 松、おとく喜んで呉れ、愈々願は確乎に成就する、満願の其日に斯
 う云ふお告げがあつた」と一伍



一什を話す、おとくも雀踊せん
 ばかりに喜び、と「夫も是もお前
 さんの一心が佛に通じ、觀音様
 が御容助下さるに違ひない、夫
 ではお指揮の日に平井の御城下
 へ出なさる様」松、こゝに分らぬ
 のは姿を變へて行けとのお告げ

だ、分つても分らなくてもお告げ通り姿を變へなくてはならないが、如何云ふ姿に變へたものであらうか」と「サアどう變へたら」兩人いろ／＼相談したが、結句松藏が其昔生れ故郷の酒折を出る時に六十六部と姿に變じ、諸國行脚に出る體にして立去つた、其事を思ひ出して俄かに六部の姿となり、錫杖をついて平井の御城下町外れ、破れたる庵室に立入つて一夜を明さんと致します、こゝでお話しは前回に戻り山本勘助の上に移ります、斯様に申上げれば山本勘助を困らして居る怪行者は、此松藏なること改めて申上げずとも分明の次第と存じます、借勘助においては餘りなる六部の言草に腹は立つたが、目前山名上の妖怪退治の役がある、押揃つては居られませんが、松藏が彼是れ意地の悪るいことを云つたのは、清水堂觀世音の示現で、甲州の石原刑部を討てる程の豪傑を引合せるとあつたが、月明りに山本勘助の風采を見ると、片目で跛者で背は四尺何寸、小男で一向に力もなさう、此方が強く出れば出る程勘助が弱い、是れは觀世音示現の豪傑でない、豪傑は跡から来る、這奴に長居をされては此方の迷惑、斯う感じたから借こそ何でも突出さうとしたのでございませぬ、勘助は這箇も妖怪の片破れと思つたから矢庭に、怪物の嫌ふ守本尊摩利支天を差出したが、怪物でない松藏には利目がありません、勳勝負を望みとあらばし様し、立去れとあらば立も去らう、併し一刻ほどは如何あつても此場に用事がある、狂て頼む、どうか此庵のうちに置いて

呉れ」と懇々として頼み入ります、松夫ほど云ふなら一刻だけは置いてやらうが浪人、此方にも實のところ此場所待合すものがある、萬一此處へ来るものがあつたらば、我等が話しの邪魔にならぬ様速に立退くか如何だ」勳ウム、其許も此處に待合せる人があるのか、イヤ然う云ふ次第ならばお言葉に従ふ、我等の用向が済まぬうちでも、其許へ用事の人來らば、我等何時でも退散する、又我等の用事が先へ済んだ時は、其許と勝負をして腕前の優劣を定める、其約束で宜しいに依つて庵のうちの貸して呉れ」松「イヤ承知とあらば暫く貸さう、サア遠慮なく入らつしやい」勳然らば御免ッ漸やくのこと話しが纏まり、勘助庵の中へ身を隠すことが出来ました、戸を少し開き、その隙間から八方へ眼を配つて居ります、彼是するうちに時刻來つたものと見え、一陣の怪風颯と吹來つたと思ふ間に、忽然として大杉の樹の下に現はれたのは、疑ふ方なき柴村大學：此の晩は前申上げる通りの月夜でございませぬ、勘助において顯然と其姿を認めることが出来ませぬ、姿は見えるが來たところは分らない、何でも風に乗つて來たらしい、一陣の怪風と共に現はれた、これも玉江の話しと打合すると此怪物女を小脇に抱ゆれば、又々一陣の風を起して飛去るものだ、最う油断はならない、尙も其様子を見て居ると柴村大學悠然として、大杉の樹の下に立ち、或は彼方に歩み人の來るのを待つ風情、其内に彼方に女の影、扱は玉屋の後家來たなと思つて居る間に最う近づい

た、勘助に於ては豫て斯うと察したから三本の小柄を殊更に用意して來ました、のみならず其小柄には、悉く毒を塗つけてある、一度此小柄が身體にたつたる時は、其毒忽ち身體中に廻ると云ふ、實に恐るべき毒薬でございます、右の小柄を擱んでソロ／＼と庵の戸を押開いた、太田松藏も此片眼何をするかと勘助の見て居る方に眼をつけますると、立派な武士と上品な女、此夜更けに是れは又如何したことかと不審顔、此方は玉家の後家、菊、オ、柴村様か』○『おきく待うけたぞよ』菊、貴下どうなさいましたのでございます、昨晚も一昨晚も手前に待ばけをおさせなさいまして』○『ウム少し餘儀ないことがあつてな』菊、手前は最う旦那様に、見棄てられたのかと存じまして、今日は一日泣いて居りました』○『夫は氣の毒、サア参れよ』菊、どうしても若い方には勝を取られます、貴下は若いのを御最良でありますから』○『嫉妬がましいことを申すな、玉江は最う手許へ呼ばぬぞ』菊、夫れは虚言でございますから』○『虚言であるかないか、参つて見れば分らうぞ、此後は汝を充分に愛すぞ』菊、お嬉しうございます』○『サア参れよ例もの通り』菊、ハイ、閑寂な城下外れ、此間答が判然と聞こえず、勘助耳を澄して聞いて居ると、柴村大學どうしても畜生だけに其音が濁つて居る、最早疑ふところはない怪物と、一本の小柄を振上げて見當を斗る、此時柴村の怪物はおきくを横抱きにかゝえ込んだ、折しも怪風再び吹き來る、最早猶豫ならじと、勘助視ひを定めてヒ

ユーツと手裏剣を飛ばせました、小柄は風を切つて飛び、今怪物の柴村、怪風と共に飛去らんとする刹那、耳元を擦過つて手裏剣が向ふへされる、敵ありと知つた怪物、頭を返してグツと草庵の方を見たが、其眼は月夜にも拘らずピカリツと光り、恰も両面の鏡を架けたるが如くでございます、勘助心中に摩利支天の加護を祈りながら、左手に木像を持ち、再び飛ばした手裏剣、今度は眼ひ違はず、此方を睨んだ其眼の中へグサリツツ：：○『ギャーツ』異様な聲を發し、バラ／＼／＼此方へ飛び來る、怪物の量見では、○『乃公を睨ふ不埒者、只一ト噛みに』とでもと思つたのか、勢ひ込んで飛來るのでございます、おきくに於ては、ギャアと云ふ叫び聲に驚いた、豈夫自分が惚込んで居る柴村が怪物とは知らない、怪物とは知らないが叫び聲は正しく大學の口から出た、何事な



るかと思つて居るうちボタ／＼と怪物の眼から出る血がおきくの顔に傳はる。菊「アレーッ、大變」叫びながら身もたえするが、斯く傷を負つても怪物の執着心は恐ろしい、まだおきくを放しません、十間ばかり勘助の方へ飛んで来た、勘助更に第三の手裏剣を飛ばした、何しろ勘助は怪物の本性を大概推察して居る、此方へ向つて来ても泰然自若、充分視ひをつけて投げた小柄だから是れは當る、殊に十間以上も此方へ近づいて居るから尙更當る、飛んだ手裏剣は怪物の口の中へ突徹つた。〇「ギャ／＼／＼／＼」此時始めてお菊を傍らへ投り出す、口中へ手裏剣の立つ迄抱いて居るとは鈍い、投り出されてお菊は「菊「キヤッ」と云ふと眼を眩して了ふ、怪物は矢庭に口中の手裏剣を抜取るとバツと投げた、其投げた手裏剣は迂鳴りを生じて、例の大杉の幹へグリーンと突さつたが、深さ四寸も通つたと云ふ、もつて如何に怪物に力があつたか分りません、世に怪力と云ふのは斯様なものを指したのでございませう、扱勘助は三本目の手裏剣を飛ばすと其儘「勘「己れ怪物覺悟ッ」と一刀を引抜き、左手は摩利支天の尊像を高く差上げました、怪物こゝ迄は進んだが口中へ打込れた手裏剣のため、大きに驚いたるのみならず、最初打込れた眼からは止度もなく血が流れ、加之に毒が廻り始めたのか、甚だしく痛みを感じて来た、是れは片眼に跛足の不具者の仕業だなど悟つたものと見え、俄に勇氣挫け其儘バラ／＼と跡戻りを始めた、勘助今迄は怪物が進んで

来たから泰然自若だつたのだが、逃げられては大變と思ふから、續いてバツタ／＼と駈出す、勘助の駈けるのだからバラ／＼とは參りません、バツタ／＼でございませう、幾ら勘助でも、足の不自由なのは爲方がない、怪物は疾風の如く駈出し、更らに風を呼んで何處ともなく逃去りました、勘助深くは追はずに立戻つて来ると、此時松藏は既に庵を出て勘助の前にビタリと両手を支いて控へる。勘「アイヤ六部殿どうなさつた、サ、手前の用事は相果て申した、先刻の約束立合を致すであらう」松藏大地に額を摺つけ「勘「先刻より御無禮の段々平に御用捨下し置かれたい、最早立合は望み申さず、貴下を見込んでお願ひの筋がござる、是非とも御承知下し置かれますやうに」打つて變つた懇懃の言葉。勘「ハテな案外のお言葉、何故立合は致さぬ、何をお頼みなさることがある」松「これには深き仔細のござりますこと、お話し申すも長物語、これにては相成り兼ねます、どうぞ先刻の草の庵へお這入り下し置かれますやう」勘「ハア話がある」と云へば聞きも致さうが、暫く待たつしやい、人を一人助けねばならぬ」松藏の方は夫なりにして置いて、勘助小戻りして玉屋の後家を抱き起した、勘助「勘「ヤッ」と活を入れる。菊「ウ、ム」バツチリ眼を開いて四邊を見廻す様子。勘「是れ菊、氣は確乎に相成つたか」菊「へエ菊と仰せられるのは誰殿でございますか」まだ呼吸を吹返したばかり、少し恍惚として居ります、眼だけはバツチリ開いても、氣が恍惚として居たのだが、

我名を呼ばれてテーツと勘助の顔を見た。菊「貴下は片眼……ワツ大變、ウム、ウム」と再び氣絶をして下りました。是れは怪物から度々、山本勘助に對面すれば生命がないと云ひ渡されてあつたのに、今其勘助に逢つたから驚いて又々氣絶たのでございます。實に厄介千萬な女。勘「六部殿、其許をお使ひ立て申しては氣の毒だが、其邊に水があるまいか、水があつたら少し汲んで来て貰ひたいが」松「ハア、畏つてござる、此邊に水は何處にござらうやら、一向土地不案内で」云つてるところへ、大杉の方より來かゝる一人の武士、深編笠に面を包んで居りますが、是れは片品六右衛門でございます。夫れと見るより編笠を脱ぎ棄て、六「ヤッ山本先生ではありませんか」勘「オ、好いところへ片品參つた、喜んで呉れ怪物は最早退治したも同じ事」六「ヤ、ッ怪物をお仕止めでございますか」勘「大丈夫仕止めたも同じ事だ」六「其處に居るのは玉屋の後家の様でございますが、夫が怪物の化けましたので、成程上手に化けますな」勘「馬鹿を云へ是れは化物ではない、正真正銘の玉屋の後家おきく、唯今氣絶を致したに依つて呼活んとするところだが、生憎水がない、此お修行者に水を頼んだのだが、土地不案内で分らぬとの事だ、水を少しでよい持つて來て呉れ」六「心得ました」六右衛門は土地の者、何事も承知でございます、忽ち飛去つて、彼方を流るゝ小川の水を手拭に潤して持つて來る、勘助再び活を入れて呼生け、手拭ひの水を絞つて口に注ぎ込む。勘「確乎い

たせ」菊「どうかア貴下は、側へ寄らないで下さい」勘「あは、い、い、まだ迷ひが覺めぬと見えるな、イヤ併し迷ひの覺めぬも道理、これよく聞け、貴様が惚込んで居る柴村大學は、あれは誠の大學にあらず、大學と見せて人を誑かし生血を吸取つて喜ぶ妖怪變化だ、今貴様を連去られる時、我等が打つた手裏劍急所に當り、怪物我知らずギヤーツと異様の叫び聲を發したに心付かぬか、ダガ夫は心付いても心付かいても好い、サア、片品、後家を家へ引取らせ、充分手當をしてやらぬと、最う拔殻同様生血を絞られて居る、或は生命に拘はることが出来ぬかも知れない」六「有難う存じます先生、後家の迷ひは今仰有つて下さつた位では覺めますまい、又々家を飛出す様なことがあつては不憫、此上のお情には先生、後家の身を保護してやつて下さる譯にはなりませんまいか」勘「イヤ最う此上は拙者が構はんでも仔細ない後家が幾ら家出をしても、相手は今宵の深傷で再び浚ひに來ることは出来ぬ、人を附けて守らせておけば夫で好からう」六「成程夫も然うでございますなア、夫ではお菊殿身共と一緒に歸つたが好い」お菊は何が何やら分りませぬ、暫く眼を瞑つて考へて居る様子だつたが、勘「エ、先生」勘「何んだ」菊「よくよく考へますれば先生の仰せに依つて思ひ當ることがあります、柴村大學様に化けたのは一體何でございますか」勘「心が付けば重疊、拙者にもまだ何の化けたのと判然は云はれないが、先山猫かな、餘程年經たる山猫であらう、只今ギヤーツ

と叫んだ時開いた口は、耳の根迄裂けて居た「菊」ア、ッ大變そんな山猫に鬪弄れたのでござ
 いますか、ウ、ム」腰を抜かしたのは當然、片品六右衛門困り果 六「お菊殿立たんか」菊「立
 てません、どうぞお助けなすつて」六「誰も殺すとは申さぬ」菊「山猫に取つて往かれます」
 六「其儀は大丈夫だ、山本先生も付いて居らるゝし、拙者も斯くして居る」菊「先生の傍なら
 宜しうございます、山猫もいひました、片眼の跛者は恐ろしいと」六「失禮千萬な左様なこと
 を」菊「先生が居て下されば好いが、先生と別れて行けば大變」目が覺めて見ると恐ろしいの
 恐ろしくないのでありません、腰も抜けたらうが横着も幾らかある、大地に坐り込んで動
 きませぬ、勘助も持て餘したが六右衛門は大弱り 六「先生暫くこれにお出を願ふ、手前はよ
 り玉屋へ参り人足を集め吊臺でも吊らせて参つて引取り参ります」勘「何しろ厄介なことにな
 つたなア」松藏此體を見まして 松「扱御兩所様、手前は山本先生にお願ひの筋あり、先刻よ
 り差控へて此場の様子を見て居りましたが、女の身で凄いと氣が着いては願えますも當
 然、まことに氣の毒に存じますから、手前此御婦人を背負て、お宿許へ送り届けませう、
 又手前が山本先生へのお願ひも、御城下において旅籠を取り、其上の事に致しませう、先生
 も御同行を願へば此の御婦人も御安心でせう、如何なもので」勘「夫は御修行者如何にも氣の
 毒な譯だ、併し夜も追々に更けて参るし、氣が緩んだ故か空腹を感じて來た、夫では城下へ

参つて酒でも飲みながら、緩々話しを聞くと致さう」六右衛門も六「どうも濟んなア御修行者
 其許には何の由縁もないのに、飛んだ御苦勞を掛けて」松「イヤ一向構ひません、骨の折れる
 ことは馴れて居ります」其處で修行者の松藏がお菊を背中へ乗せ、錫杖を突いて城下へ入
 る、夜は最う更けて亥刻頃でもございませう、片品六右衛門先に立つて案内致し、玉屋へ來
 つて戸を叩き家内の者を呼起しました、是れから 六「先々」と山本勘助、并に太田松藏も奥
 の間へ通して置き、後家のお菊は静かな部屋に寢せ醫者を呼びにやり、勘助の方へは直様支
 度して酒肴を持出します、玉屋の家は深更大騒ぎでございませう。

(第十四席) 勘助三度山名上へ赴く事、并に勘助怪物を退治する事

勘助は空き腹へガブ／＼酒を呑むが、松藏は一生懸命の願ひ、酒どころの沙汰でございませ
 ん 松「さて山本先生、手前の願ひ一通りお聞きなされて下さりませ」勘「ウーム、大層改ま
 るな、酒の席だ改まらなくもよい、サア／＼話しなさい」松「お話し申すに就ては、手前の身
 の上が先でございます、實は六十六部に姿を扮して居りますが、是れはホンの一夜づくり、
 全くは六部ではありませぬ、甲斐國武田信虎公の家來、太田市之丞に由縁のものでございま
 す」武田と聞いて勘助、聊か形を改めた 勘「ハテ武田の家來に由縁とは聞棄てならない、此

處は上杉の支配下、武田のものが何んで此邊に參つたのか」松「御不審御尤も、其次第と申し
 ますは：」是より松藏が涕片手に自分が妻を
 殺された事、太田市之丞が石原のため恥かしめ
 られ、遂に立腹を切つたこと、其子彌四郎おて
 るの兩人を引連れ、甲斐の國にあつては身の危
 きを悟り、態と當國多胡の郷神保の里に隠れて
 居る事、清水觀世音の示現によつて草庵に豪傑
 を待つ事、此一伍一什を物語りました、勘助も
 松藏が忠節にホト／＼感心して居ります、松「就
 きましてお願ひと申すは餘の儀にあらず、彌四
 郎様おてる様から見れば、石原刑部は俱に天を
 戴かざるの仇、手前に取りましては又妻の仇で
 ございます、一ト太刀なりと御子様方に恨ませ
 手前も同じく彼れに擦過傷でも負はせたい心願
 なれども相手は名に負ふ甲斐の重臣、此方は子



供や端た者でございます、清水觀世音の御示現により先生を頼んで仇を討つより外はござい
 ません、先生幼きものや軟弱きものを憐んで、後ろ楯になつて下さる様」委細を聞いた山本
 勘助「ウ、ムツ、倍は噂さに聞いた信虎公御亂行、石原刑部の如き佞臣あつて、外から煽
 るがため火の手を擧げること、覺えたり、刑部は實に武田家の毒蟲、左様なものあつては其
 害の及ぶところ、又大なり、よし／＼我に計略あり、松藏決して心配致すな」松「夫では御加
 勢下し置かれますか」勘「我計略をもつて石原刑部を引出し、彼れを討つこと何の手間暇の要
 る可き、左は去ながら其彌四郎おてるや、何れも乳臭き少年、今刑部を引出しても刑部
 は甲州に聞えたる勇士、容易に討取ることは叶ふまじ、先當分は兩人に刀もつ業、長刀取る
 術、一應は仕込むの必要あり、多胡神保の百姓家にあつては、夫等のことを學ぶに便なし、
 兎もあれ此平井には師と頼むべきもの無きにあらず、待たれよ、勘助兩三日のうちに工夫致
 す」松「まことに、忝なき仰せ、清水觀世音の利益は顯然、何分とも宜しくお願ひ仕りま
 す」勘「サア／＼其話しは是れで打切りに致せ、貴様は酒を一向飲まぬか一つ返したらよから
 う」松「手前は彌四郎様おてる様のお兩方に、一刻も早く先生がお味方下さる由、話して喜ば
 せたく存じます」勘「尤もの次第ながら今晚は此處に過ごせ、拙者に思ふ旨もあるのだから」
 松「左様でございますか」松藏早く彌四郎はじめ、一同に吉左右を告げたいのだが、勘助強

てと申すから其晩は當家に一宿することに相成りました、片品六右衛門も此處に泊つたが、是れは親類のことで後家おきくの介抱やら、醫者の應對其外に取紛れ勘助のところへは執持にも來られませんが、翌朝勘助の眼覺むるを待ち、六先生お早うございます」勘「ヤア六右衛門か、借々昨夜は思はざる厄介になつた、幸ひに隠居所に居つて本宅の騒ぎも一向分らなかつたが、後家の様子は如何であつたな」六「先生お喜び下さいまし、醫者の申すに此上最う三日も心氣をつかつたなら命が危いと申します、好い鹽梅に早く醫者に見せたため、人蔘でも用ひ充分看病が行届いたなら十日内外で恢復が出来る」と申します」勘「ウム夫れは結構だな」六「夫も是れも先生のお蔭でございます、後家一人の命をお取止め下さつた先生、何れ親類一同相談の上でお禮を申し上げます等でございます」勘「イヤ禮なぞ云ふに及ばん、是れはホンの刷毛序だ：：時に片品、愈々其許を煩はしたいことがある」六「へエ何でございますか」勘「外でははい、大串圖書の娘田毎、これを一つ助け遣はしたい、圖書殿を招き來る様頼む」六「へエ大串の娘が助かりますか」勘「多分助かる」六「あれはおよし遊ばせ、御家中でも至つて評判の好くない奴、彼廢奴の娘などは、如何あつても宜しうございます」勘「イヤ、然うでない、片品お前も彼れの組下ではないか、殊に重役の一人だ、拙者を彼れに引合したのもお前、萬一娘を助けることが出来れば、其功もお前が立てたと同じことになる、圖書剛慢

無禮の奴と雖も、子の恩愛は人一倍だ、助けられるものなら助けて置けば、後々都合のよい事もある、お前の爲になる様にしてやるから呼んで來なさい」六「へエ先生が夫迄仰せられるならば引張つて來ます」勘「一人一人助けることだ、急いで往つて來て呉れ」昨日迄は怪物退治に、一人や二人の犠牲を拂ふは當り前として居た勘助、俄に圖書の娘を助けんと云ふ、是れには勘助の胸中に謀略が湧いて來たからの事でございます、其謀略の如何なるものかは茲に申し上げませぬが、これは急に引受けた太田市之丞太田松藏のための仇討に利用せんと云ふのでございます、其詳しくは追々分つて参りますが、六右衛門は左様なことゝは存じません、勘助に吩咐られた儘、取急いで大串圖書の宅に参りました、圖書に對面すると、圖書は青い顔、六右衛門何用で参つた」六「お頭へ申し上げます、山本先生よりのお使ひで」勘「ナニ山本の使ひだ、山本と云ふ奴は實に怪しからん人物だ、娘が宅に居るうちは、怪物來らば一討など擬勢を示して、娘の枕元で夜どほし明かし、娘が居らぬとなると、木で鼻をくつた様に、娘の一人位は如何なつても怪物さへ退治すれば土地一般の助けだ、大言を拂つて出て参つた、今にして考へると彼奴片目で跛者、片輪の癖に我娘に懸想でもしたものと見え、其使ひに來た貴様もよく／＼な奴だ、用事などは云ふに及ばぬ」以つての外憤つて居ります、六「ハア用事もお聞に及びませぬか、お聞きならぬと云ふなら手前も強ひては申上げ

ませぬが、山本先生は昨晚かの怪物と戦
 かつて半ばお退治になつて、これから田
 毎殿をお助け申しに参るとの事、併しお
 聞きにならんとあれば夫れまで左様なら
 ……「ヤッなんとといふコレ待つてくれ
 これ六右衛門、何か山本が昨夜怪物を退
 治したか」六へ先大半と云ふところ迄
 やりました「ヤア夫は本當か、シテ娘
 田毎は如何相成つたか」六夫は最うお聞
 きには及びますまい、山本先生には御用
 事が無いと仰せられますから「コレこ
 れ六右衛門、左様に言葉答めをするな、
 正しく娘は助からうか」六其邊迄は確乎
 と分りませぬが、只今の分ならば助かる
 時刻おくれては如何とも分らぬ、兎に角



お頭にお逢ひ申してと斯う申されるのでございませぬ「ヤア夫は本當か、イヤ山本先生は大
 層な御器量な方だからな」現金な奴で、娘を助けて呉れると聞いて、急に山本先生と先生を
 つける、六右衛門心中には可笑いが、重役お頭であつて見れば、笑ふ譯にもなりません、
 六「只今先生は手前親類の玉屋に居ります、後家のおきくも危く怪物の餌食になりますとこ
 ろを先生のお力で、昨晚取戻して頂きました、お頭には相成りますまいナ所詮エヘン…」
 相談がしたいとの事でございませぬが、お出には相成りますまいナ所詮エヘン…「ヤア夫
 れは御使者御苦勞だつたなア、娘を助けて下さるとあれば、何方なりとも罷越す、玉屋は町
 家で滅多に出這入りは致さぬところだが、玉屋は愚か、穢多非人のところでも苦しうない、
 六右衛門、早速案内して呉れ」六へ、…、エよろしうございませぬ、サアお出掛けなさい
 まし、圖書大喜びに喜び、アタフタとして六右衛門と共に城下の玉屋へ参りました「儲ど
 うも山本氏、娘田毎をお助け下さると云ふ、まことに忝なき仕合せ、怪物はどうなりまし
 たか」儲オ、大申殿、お呼立申して相濟ぬ、怪物の儀は昨夜十中の八九刺息をさした、多分
 お娘御は助けることが出来様と考へる、就ては其許に相談がある、拙者より其許へ是非頼ま
 ねばならぬ事があるのだ、拙者がお娘御をお助け申すとし、萬一無事に怪物の手から取戻し
 て差上げたとした時、改めて拙者がお頼みの一條を話す、何事にあれ拙者の頼みを承知して

下さるか」勘助を救つて下さつた其返禮のお話してござるかな」勘「イヤ敢て返禮を望む譯では無いが、其許ならでは調ひ難き一儀がある、其一儀と拙者の功とを取替へに致す譯だ」圖書心中に「尚且勘助は助平野郎だ、是れは娘に惚込んだのだらう、助けて置いて妻に呉れとでも云ふのか、片目に跛者では娘に可哀さう」圖書は圖書だけの考へで、大きに當惑の體

「ハア其お話しはお助け下し置かれて後のことでは如何」勘助けた後と云ふことにはならぬ、只今確乎取極めて置きたい」圖書鳥渡お伺ひを致すが山本氏には御妻女があらつしやるか」勘「妙なことを聞くな、我等元來女は嫌ひでござるて」圖書へ、エ、女はお嫌ひ……貴下の方でお好きでも、女の方でお嫌ひでございませう」勘「何だと」圖書「イヤ夫れは此方のこと、娘を差上げると云ふはチト何うも……」勘「誰が娘を所望すると申した、拙者の云つたことを變な方に取つては迷惑至極、娘を望むのではござらぬ、所望の儀は外にあるのだ」圖書「サア其所望の片つ端でもお漏しに預りたい、路用の金子御所望ならタントは間に合んが、五十や百ならば……」勘「黙らつしやい大串氏、諸々其許は武士に似合ぬお方だ、女や金を所望する拙者だと思はつしやるか」圖書「アッお腹立では困る、娘と金子の外ならば何なりと御所望次第」勘助も聊か腹も立つた、勘「怪物の舐りからし誰が貰ふ奴があるものか、併し娘と金の外なら望み次第の一言確乎と宜しいか」圖書「ハア承知仕つた」勘「後日に至り其事はならぬ杯と仰せが

あると、勘助も武士、一分を立てるために、腕をもつてお相手仕るに依つて其心得で居られるやう」圖書「大變なことになつたが、マア〜娘の命には代へられない、何分お頼み申す」勘「然らば引受けた、助けるのには早くなくてはならぬ、これ〜太田、我等の供をしろ」松「畏まつた」と松藏は以前の六十六部の姿となつて錫杖を突き出す、勘助に於ては足支度を充分にして、瓢然と玉屋の家を立出でました、勘助は是れで山名上へ行くのは三回目のございます、最う地の利も知り、怪物のことも大方は飲込んで居ります、先に立つて山名上石段は上らずグルリ廻つて、奥の奥へと来る、四邊は怪物が人を喰ひ肉や骨を其儘打棄て、置いたと見え、夫れが腐つて異臭紛々として鼻を打ち、鬼氣人に迫る恐ろしさ、松藏鼻を掩ひ驚いて居るが勘助は物ともせず、草の中を右に往き左に取つて來ること小半道、其處には豫て見知つたる大きな笠松があります、落葉の上をガサ〜とやつて來たが、笠松の傍ら一方は小高い丘、其下に少し回んだところ、こゝは勘助が其始め怪物に誑かされ一夜を明した場所、來て見ると落葉を頭から冠つて脛もあらはに氣息淹々たる一人の美女、是れぞ大串の娘田毎でございます、勘助手を拍つて喜び、勘「松藏、これを見い、是れぞ汝主従が仇を討つべき唯一の橋渡しであるぞ」松「ヤ、ッ是れは御大家のお娘御と見えます、是れが手前達の本望を達する便りになるとは如何のことではございます」勘「ウム我計略を申さぬに依つて分

らぬは當然ながら、拙者は途すがら此娘が無事で居て呉れ、ば好いと夫のみ祈つて参つたのだ、喜べ〜」松藏にはまだ分らない、勘助の喜びは躍り立たぬばかり、松先生、此娘は如何するのでございます」勘馬鹿め助けると極つて居る、アイヤ田毎」田ヤーツ山本の片眼跛者：「勘是々悪口を申すな拙者は其許を助けに來た、御親父の大串圖書殿の頼みを受け、救ひ出しに参つた、サアサア一緒に歸らつしやるが好い」田お前の傍へ行くと柴村先生に殺される」勘まだ〜迷夢が覺めぬと存する、斯様な中に棄てられて、夫でも迷ひを取る事が出來ぬとは、全く妖怪に皮肉迄喰入られたものと見える、あゝ氣の毒なも



の、松藏貴様此娘を背負て呉れ」松心得ました、よく女を背負される事だ」勘見る影もなく瘦おとろへて居る、僅か二日か三日のこと、斯くも生氣を吸取れたか、大事にしてい軽く背負て呉れ」田毎は弱り切つて、如何する力もありませぬ、勘助が抱上げて松藏に背負せた、又々先に立つてドン〜出て來る、山名上の観音下へ來ると、彼方の林の中の腹簧



張、これは勘助が始めて来た時休んだ茶見世でございます。勘「老爺や」老「ヒヤーツ先度の片
 眼の旦那様」勘「餘計なことを云ふな、暫く休まして呉れ、是々松藏其娘をおろせ、ドレド
 レ」勘「勘助自から縁臺を二つ傍へよせ合した」勘「老爺何か敷くものはないか」老「是れはハア、
 立派なお娘御で、御病人でございますか」勘「ウム病人だ、板の上へ直接に寝かすも宜しく
 ない、何か柔かなものはないか」老「別段に柔かいものはありませんが、襦袢半纏たゞ一枚」
 勘「オ、夫でも無きには優る、此處へ敷け」老「ハア、御病人を何處からお連れなされたの
 で」勘「何處から連れて来ても好い、老爺や先日の濁酒は大層悪酔がするな」老「利きが好いの
 でございませうから」勘「今日は先日の様に多くは不可ぬが、飲むものを飲まぬと勇氣が缺けて
 不可ない、早く四五本燗けて呉れ」老「お前様は岩窟の主を退治にと仰有つたが、あれ切り歸
 つて来さしやらないので、あゝ氣の毒に又喰はれて了つたことと思つて居ましたが、よくマ
 ア無事でお出なさいました」勘「老爺安心しろ、今日こそは怪物の本性を突止めて、貴様に見
 せてやる」老「ト飛んでもない、その様なことはお止遊ばせ」勘「イヤ最う半ば退治が出来た、
 流石の怪物も通を失ふほどの大怪我をして居る、是から參つて刺息をさす段取りだ、早く酒
 をもつて来い」老「ヘエ」酒を急がせまして山本勘助、大井へ注ぎガブ／＼四五本
 の酒を飲んだ。勘「松藏夫では貴様暫くこゝに待つて居て呉れ、直に怪物を退治して參るか

ら」松藏も驚いた。松「然う手ツ取り早いことに參りますか」勘「怪物が住んで居るのは觀音堂
 の背後の岩窟、彼れ只二本の手裏劍をくつたばかりだが、其手裏劍には我等が工夫を凝した
 鳩毒が塗込んである、手裏劍が當れば傷が出来る、其傷口へは直に毒が廻ると云ふ仕掛け、
 去れば打込まれたばかりには只手裏劍が二本、何でもなしの様だが、時を経るに従つて毒は身體
 の隅から隅まで廻つて、身動きもならぬ様になる、殊に傷所は眼と口中、一眼は疾に潰れて
 山本勘助の二の舞が出来て居る、今頃は飛出すも逃げるもならぬ、撃つた鳥とは此事だ、直
 に立戻るに依つて待つて、夫から老爺や、百姓衆が通行したなら、三人ばかり雇つて置いて呉
 れ、日雇賃は望み次第出す、御城下迄運んで貰ふものがあるからな」勘「ヘエ運ぶものが、何
 をお運びでございませうか」勘「夫は聞かんでも好い、頼んだぞ」勘「勘助平然として立出で、小半
 丁も離れた山名上の石段をドン／＼登つて往く、松藏は田毎に付添ひ、其背後影を成つて居
 ります、此處へドヤ／＼四五人の百姓。○「老爺さん天氣で好いなア」と這入つて来る。老「お
 前方日雇に頼まれねえか、駄賃は幾らでも出すと云ふがなア」○「ナニ駄賃は幾らでも呉れる
 耳よりな話した頼まれへエ」老「其旦那は今山名上へ行かしたかな、お前達頼まれるか」
 ○「オ、田吾作、横藏、山太郎どうだい」△「頼まれへエ」○「全體何をするんだえ」老「何
 をするのか分らねえが、山の主を退治に往かした」○「ヤーツ、山の主だとな、夫りやア危

ねえ、其妻人に頼まれると祟りが来ベエ、是りやアやめたく」何んと騒いで居る、此方は山本勘助、石段を上り切り観音堂の背後へ廻つて来ると、岩窟の中から「グーッ、グーッ」人間の野暮な呻き聲が聞える、勘助一眼ではあるが睨んだところは違ひません、怪獣は毒の手裏剣を打たれた、右の眼の中へ打込れ血が流れたが、夫には撓まず進んだため口中迄も深傷もつけた、口中の小柄は、苦し紛れに抜取つたが、餘りの手練に驚いて、岩窟へ歸る迄眼の方は抜取らなかつた、岩窟へ歸つて始めて取つたが、此時は追々毒が廻つて来たところ、苦しいから岩窟の中を彼方へゴロリ、此方へゴロリ七顛八倒の有様、夫がため、大串の娘も其儘置いた程でございませす、終夜の苦しみにも最早迂鳴るばかり、勘助鐵扇を携へて奥深く這入つた時には勘助も驚いた、大きさは懐ほどもある全身班らな毛が五寸も延び、鬚は銀針を植ゑたるが如く、眼は一眼となつたが人を見れば射る様に光る、耳は中天に突立ち口は耳の根元迄裂け、苦しさの餘りダラ／＼と涎を流して居ります、實に一見身顛ひの出る怪物、勘助「これは」と思つたが怪物の方は夫以上に「これは」と思つた、大變な奴が入込んで来やがつた、是りや堪らぬと思つたか如何だか、勘助の姿を見ると「ブーッ」と涎を吹いて、ヒヨロ／＼ながらも立上り、利鎌の様な爪でベリ／＼と岩角をヒツ掻き、矢庭に勘助を望んで飛付いて来る、勘助心得たりとヒラリ體を轉じて置いて、岩窟の外へ飛出し

た、是れは岩窟内では退治に面倒と心得たから呼出しの策、怪物も續いて飛出した、勘助鐵扇を振廻して此場に戦ふこと半刻ばかり、怪物激しく飛廻れば、飛廻るだけ毒の廻りも早い次第に弱り果て、流石の怪物も最早其怪を恣にするこゝが出来ませぬ、今勘助目覚めて飛付いて来るやつを、一ツ引ッ外して置いて、鐵扇に満身の力を籠め「ウエッ」と一ツ打つたのが真個に來たから堪りませぬ「ギヤ／＼／＼ギア」と、喚くと共に横に打倒れた、得たりと勘助踏込んで首の着け根をウムと押え「勘助これでもか、これでもか」と鐵扇の雨霰、怪物においては九死一生「ギヤア」と不思議な聲と俱に跳ね返す「勘助是れはッ……」怪物の力は何人力だか分りませぬ、英氣を避くるため勘助バツと一足飛びのく、途端に背中をバリ／＼ツツ：勘助は飛びつかれては堪らぬと思ひ、手早く逃げたのだつたが、遂に前足の爪を背中へかけられました、バリ／＼と音がして、着用の着物の上から引ッ掻かれ、長さ八寸もあらうと云ふ裂傷が、三筋並んで出來た、恰も川と云ふ字の形ちでございませす、此傷が長く残り勘助が身體に八十六ヶ所……此有名な八十六ヶ所の傷のうちに、山猫の分も加はつて居ります、勘助ほどの豪傑でも斯様な傷をうけては堪らない「勘助アッ」と云ふ間に背中から血がダラ／＼、勘助どうも激しい働らきた、立合に汗を流したのは是れが始めて「氣樂な人間で、斯くの深傷血の流れるやつを汗だと思つて居る、此時振返り様に「勘助迂奴ッ」と揮つ

た鐵扇、怪物の眼と鼻の間を甚かに打ちました。〇「ギャーツ」是れが致命傷でございませう、手足を震はし、ノタ打ち廻して、最早地上に氣勢もない。勘「コン畜生ッ、大層骨を折らせやがつた、コン畜生ッ」續け様に怪物の頭を十五六、さしもの怪物脳骨を打碎かれ、全く勘助のために退治されて了つた、ホツと息を吐いて、勘「イヤ恐ろしい怪物、毒に當つて半ば死にかゝつて居ても此通り、是れが毒に當らず、満足に居たら退治も容易ではなかつたが、毒を打込むと心付いたのは天佑、勘助の運が好かつたのだ」と舌を巻きましたのも道理、扱勘助に於ては手傷をも厭はず、刀の提緒を取つて退治した山猫の四足を縛り上げ、ズル／＼引摺つて見たところが、目方が三十貫もある案排で、逆も三十六段の石段を持ち下ることは出来ません、是れは其儘にし置いて自分だけ下つて參りました、茶屋の老爺も太田松藏も、借は居合す百姓共も驚いたの何のではありません、見ると勘助自分の血やら怪物の血やらで、頭から足の先まで血だら眞ッ赤、逆も此世の人とは思はれません、百姓などは甲「ヒヤーツ化け物が来た」乙「ハッ觀音様の主が出て来た」と騒ぎます位、松藏飛んで出で、松「先生これは何うなされたのでございませう」勘「イヤ松藏安心して呉れ、漸やく怪物を退治に及んだ、愉快々々」松「どうも驚きましたなア、此血ツたら大層なもので」勘「怪物め血を垂下ながら、飛んだり跳ねたりしやがつた、夫がために此通り」松「ヤ、ッ先生、お背中へ傷をお受け

になりましたなア」勘「さう云へば背中がムズ痒い氣がする」勘助も餘程強情な人物、長さ八寸の傷も三ヶ所もつけて平氣な顔をして居る、尤も三ヶ所の傷で尻古垂れる様では、八十六ヶ所の傷で有名になる氣支ひはありません。松「何しろ此儘置いては悪うございませう」勘「さうだ、怪物の爪には毒のあることがある、其毒をうけてはならない、老爺鹽があるか」老「へエ幾ら茶見世でも、鹽位はございませう」勘「鹽さへあれば結構、其鹽を皆出して呉れ、夫から鹽をなア」老「鹽を如何なさるのでございませう」勘「よく餘計なことを聞く老爺だ、何でも好い早く出せ」鹽を出させ、夫れに水を一杯はらせ、勘助眞裸になると其鹽の中へ飛込んだ勘「松藏、傷口へ鹽を摺り込め」松「え、鹽なぞ入れては痛んで大變でございませう」勘「ナニ構ふものか、鹽でよく洗へ、痛いと思つて遠慮しては不可ぬぞ」松「へエ」松藏愈々驚いたが爲方がない、傷口を鹽でゴシ／＼洗つて居ります、百姓共は肝を潰して居る。松「お痛うございませう」勘「ウ、ムツ、よい心持ちだ」何の快い心持のことがあるものか、其内に傷口を洗ひ上げると、勘助印籠から金創膏を取出して、是れを傷口へ塗込せました、布片を裂いてスツカリ繃帯を施したが、勘助自若として色も變じませぬ。勘「松藏退治した怪物は觀音堂の岩窟の前に轉がつて居る、四足は提緒をもつて確乎と縛つて置いたが、何しろ三十貫からの重味があつて、持下すことが出来ない、斯様なこともあらうかと、先刻茶屋の老爺に人足を頼んで置

いた…是老爺「老」へエ〜」鶴人足共は何うだな、頼んであるか」老「へエまだ相談が纏りません、此通り人数は居るには居るのですが」勤「何故纏らん」老「貴方が主を退治なさるゝ其手傳ひをして、跡へ祟りが来てはならぬと申しまして」勤「こんな馬鹿なことがあるものか、怪物が生て居てこそ仇もし様、拙者が退治して了つて最う息の根が止つて居るに詰らぬ心配をせずに一同登つて怪物を擔ぎおろせ、拙者も一緒に參るから」甲「へエちやア祟りはないでせうか」勤「祟りなぞがあるものか、祟れば第一拙者が満足で居られぬ、長らく人間の肉を喰つた大怪物、見て置くのも後學のためになる」甲「へエ夫ぢやア」承知はしたが百姓のこと、ビク〜もので勤助の跡につき、觀音堂の裏手に来て見ると恐ろしい怪物が、眼を剝出し齒を喰ひしばつて呼吸絶えて居ります、百姓共勤助の指揮に従ひ、五人がゝりでエツチャ〜石段を擔ぎ下しました、其處で勤助が此怪物を百姓に擔がせ、松藏に田毎を背負せて、平井の城下へ出て參りました、で此怪物を柴村大學の屋敷へ持込んだ、勤「頼む」○「ヤッ山本先生、貴下何を持つて來たのでございます」勤「大學先生に進上物を持つて來た、御病氣も追々御快氣と承はる、今日は是非お目に掛りたい」○「少々お控へを…」取次は奥へ引込む。

(第十五席) 勤助刑部の釣出しを策する事、并に太田彌四郎主従仇討

用意の事

平井城上杉憲政の指南番、鞍馬八流の使ひ手柴村大學も、豪いには豪いが勤助に比べれば駿河の富士と一里塚の相違があつたものと見えます、一子益丸を妖怪變化のために奪はれ、これを退治せんと山名上の岩窟へ上つたのが基で、却つて妖怪變化のために魅入られ、或時は骨々節々が痛み、或時は激しく寒熱が往來して身體を痛め、一年有餘もブラ〜として門人には教導も怠り勝てございました、最初勤助が尋ねて來た時は前申上げる通りの大熱、これも怪物の仕業であつたと見え、恰度勤助が怪物退治を終つた時刻から俄かに快氣となり、半日も経たざるうちに元氣恢復、實に我ながら不思議に感じて居りました、併しまだ褥のうちに居ります、ところへ門弟が「先生、三州牛久保の山本勤助先生、今日は何でも漢でも貴下にお目通り致したいと申して參りました、殊には何か貴下に差上ぐべき珍物を持參致したとの事でございます、如何仕りまするか」大「オ、山本先生お出下すつたか、先生は實に高名のお方、先頃來度々當道場へ來て居られたと云ふ、一度もお目に掛らぬのは残念と心得居つたが、幸ひ今日は快氣である、湯にも入らず頭も剃らず、見苦しい形ぢではあるが、夫をお厭ひなくばお目に掛らう、天下の名士の警咳に接するは本望とお答へ致せ」○「心得ました

山本先生お待遠様、先日來お尋ね下さつたところ一度もお目に掛らなかつたのは残念、湯にも這入らず髻蓬々甚だ見苦しうござるが、夫れをお許しならば天下の名士の警咳に接するのは本望との事でございます」勤「あ、左様か御病氣のところだ、苦しうないお目に掛りた」○「心得ました」勤「就ては勤助が寸志これをお納め下さる様に」玄關へ押据ゑてあつた釣臺の掩ひを取れば箇は如何に、天を睨んだ物凄き山猫の死骸、アツと仰天して勤助を客座敷へ案内することを忘れ、ドン／＼飛んで再び大學の病間へ來た ○「先生、タツタツ大變でございます」大「何を狼狽る、大變とは何んだ」○「山本先生がどうかありませんでしたせ、貴下にお目に掛ける珍品なぞと申し恐ろしいものを持ち込みました、是々斯う云ふもので……」見た儘を話す、大學も稀有に思つた、病後ではあるが今日は氣分も判然として居る、オツ取り刀で玄關先へ立出でました 大「アイヤ山本氏」勤「オ、柴村殿でござつたか、既に手前の名を御存じの上からは改めて名乗りは致さぬ、今日は其許御病氣本復のため、斯様な珍物を持参いたした、お受取り下されたい」大「是れはしたり山本氏、一體何をお持ちでござるな、得體の知れぬ獸類、天を仰いで苦痛の態を示して居る、斯様なものが何で珍品、天下に名だゝる山本氏にしろ、呆氣たことをなさつて、我等を弄ばんとするならば其儘には棄置き申さんぞ」愚弄でもされると思つたから大學烈火の如く怒つた 勤「あは、は、は、是れが其許にお分

りにはならぬか、此得體の知れぬ獸類こそ其許の御病根でござらう、其許の御愛子益丸殿を取り喰らひ、其上ならず其許の影身に添つて思し來つたも、亦此怪物の行爲、これこそ山名上の岩窟に永年棲んで居たる山猫の類、某今日巳の上刻頃同所觀音堂の裏にて退治仕つた、何んと珍物でござらうかの」大「倍は是れが山名上の怪物、我子の仇であつたるか、ウーム」山猫の死骸を見詰めて居るうちに、大學考へたのは然う云はれ、ば不思議にも、今日巳の上刻頃から病氣が俄に拭ふが如く去つた、恰も雲霧を排して天日を視る心地となつた、是れは尙且怪物の仕業であつたな、斯う氣が付くと勤助の有難さが分る、突然夫へ兩手を突き大「山本氏の御芳志忘れは置かぬ」と嬉し涙…… 勤「お分りになつたか、お分りになりさいすれば夫で好い」大「お心入れの贈り物有難く頂戴仕る、先々此方へお通り下し置かれたい」勤「イヤ取急ぐ、まだ」大「申殿屋敷へ參らねばならぬ、夫に就いて柴村殿、御子息の仇を打つたのを恩に掛けるのではないが、手前折入つてお願ひの儀がある、何なりと御承知下し置かれやうや」勤「改まつたお言葉、我子の仇のみでない、此怪物をお刺止め下さつたのは取りも直さず拙者の命をお取止め下さつたも同じ事、左もなければ眼には見えねど、怪物のため我等は自然命を失ふところであつた、何なりと御望みのことは、誓つてお果し申すでござらう」勤「早速の御承知 忝ない、武士には二言なきもの、其御誓言を承はる上は、只今

委細のお話しを申す暇が無い、追つて御頼みの一儀委細にお話しを仕る、今日は取急ぐから勘助扱りはありません、一つ怪物を退治したので、八方へ頼みを持ち、其頼みとは何んてございませうか、追々に申し上げますが、是より田毎を連れて大串圖書の屋敷へ来る、圖書夫婦の喜びは並大體ではありません、怪物の餌食になつたと思つた娘が、無事：イヤ無事ではないが生命を取止めて戻つて来た、俄に屋敷中春風が吹いて来た様で、勘助の指圖に依つて醫者は小坂仁齋を招き、田毎には充分の手當を加へます、勘助を奥座敷へ通して大層な御馳走、夫婦込み代りに出て来て待遇を致す、勘助程よいところで、勘助アイヤ御主人、玉屋においとお約束の一儀、これより委細のお話しを仕りたい、就ては病中ながら柴村大學殿を招き、これとも談合仕りたい儀がござる、速に使ひを立てられて欲しい圖書は柴村とは仲悪るはでござりますが勘助の云ふことだから爲方がない、長まつた」と直に柴村を招きます、柴村も不思議と病氣全快、直に湯に入り髪を櫛づり、衣服を整へて出て参りました、離れ座敷の一室に顔を合せました時、勘助大串氏も柴村氏もお聞きを願ふ、實は拙者止み難き仔細あつて、當年十六歳の男子と十三歳の娘、又壯年の男のために仇を討たせねばならぬ儀がござる、其仇たるや誰あらう甲州の武田信虎公の寵臣、石原刑部と申す大勇の人物、逆も子供や端た者で討てる敵でござらぬ、依つて某差添となつて仇討を致させ申す所存だが

右に述ぶる如く武田の寵臣、容易のことと外へ引出す儀は相叶ひ申さぬが、若御兩所が先刻我等に仰せられたお言葉に相違なくば、御兩所のお名前をもつてすれば必らず釣寄せること相叶ふと存する、此儀に就いて一臂のお力をお借り申したい、如何のものでござらうや」これを聞いた柴村大學、大「仰せではござるが、我々の名をもつて武田の寵臣を如何にして釣出せませうか、逆もこれは出来得ることにはこれなくと存じますが」勘助イヤ出来ざることをお頼み申す勘助ではない、元來此の石原刑部と云ふ人物、至極の奸人で表面には忠義を見せ掛け居りますが、實は怨深くして怨のためには主をも賣りかねまじき奴、依つて上杉殿の御重役なり、又御指南番なりの貴方方から、君命なりと申偽り、安中城壹萬貫の地をもつて招くと云へば、彼必らず喜んで来るに違ひない、彼れは饒勇無雙の猪武者にして、敵地へ踏込むを恐れざるは、彼の不動山盜賊退治の一條でも分つて居る、其手續きは萬事拙者が指圖を仕るに依つて、御兩所の書き判ある書面を刑部の許へ送つて貰ひたい圖書も、石原刑部は其名を聞けども逢つた事なし、果して其計略行はれるや心許ない」勘助イヤ、御心配あるな、失策つたところで其許方に敢て迷惑の掛る次第でもあるまい、其時は拙者夫迄として諦念るだけの事、左様に仰せられるなら、柴村仰せに従ふことにし様ではないか」大「如何にも宜しい」とあつて、此處で山本勘助密書の下書きを致します、山本勘助は元來

軍師：軍師のすることだから、木に竹を
 繼ぐ様なことでも巧く筈、密書は愈よ出
 来上りましてございます、其處で勘助松藏
 を呼び、勘助松藏貴様の忠義を天も憐んで、
 事は萬事巧く參つた、一應は幼少のものと
 其方、幾らか腕前出来る様になつた上でな
 ければ仇は打てぬ、當分は修行をさせねば
 ならぬと存じたが、事は意外に運んで来た、
 斯様な一件には時機と云ふものがある、時
 機を取り損なへば、其時機の来るのは容易
 なものでない、幸ひ大串柴村兩氏の助けを
 得たに依つて、棄置かず直様仇討の手段に
 取掛る事にした、尤も大敵であるに依つて
 荒ごなしは拙者がしてやるが、茲に困るの
 は彼れを呼出す一條だ、呼出しの策は立つ



でも使ひに往くものがない、使者に立つ奴が氣が利いて居ないと、巧く運出して參る譯には
 ならぬ、依つて松藏お前が甲府表へ乗込み石原刑部を引出して來い」松へエ手前がござい
 ますか」鷲虎穴に入らずんば虎兒を得ず、貴様が甲州へ立入るのは甚だ危険の様だが、刑部
 とは身分が違ふに依つて顔を見知られては居まい、顔を見知られて居なければ往つたところ
 で驚くには及ばぬ、夫れに上州平井上杉家重役大串圖書郎黨として參るのだから、よしや見
 知りの者があつても、世の中には随分似たものもある、格別危害を及ぼす様なこともないと
 心得る」松へエ畏りました、ナニ思案がございます、上杉家御重役大串圖書様家來となれ
 ば、其の心得にて參ります」鷲夫では先方へ參つたならば是々斯うく」委細のことを含め
 まして、圖書大學の密書を持たせ、圖書の家來らしく身の調度をこしらへ、平井の御城下を
 立出でました松藏、一旦多胡の神保へ立戻り、彌四郎おてるおごとくに其由を物語る、山本勘
 助と云ふ天下の豪傑を後ろ楯に得たので、一同の喜びは如何ばかり、偕松藏は日ならずして
 甲府八ツ花形の御城中へ乗込んで來ました、此時は松藏見知りをおそれ自から顔に傷けて形相
 を變へて來ました、此の一事に依るも松藏の忠義は分ります、御城内のことは悉く承知の
 松藏、門番を欺く位は朝飯前の仕事、御門を無事に通つて石原刑部の屋敷へやつて參りまし
 た信州諏訪の諏訪信濃守頼茂は太守信虎公の妹、聳、諏訪家の使者と偽はらせたのは勘助の

計略でございます、諏訪家の使者ならば別段怪しむところはありませぬ、使者の間に通して置き、刑部何氣なく對面致します、刑部諏訪よりの使ひ何事であるか、松藏飛退つて低頭平身、松藏恐れ入り奉ります、聊か他聞を憚る儀でございます、お人拂ひの儀を願ひたう存じます、刑部ハア左様か、是々一同遠慮いたせ、近臣を遠ざけた時に松藏四邊を見廻し、襟の縫目より密書を取り出しました、松藏偽つてお目通りを願ひ申譯もありませぬが、實は手前は諏訪家の使者ではありません、上州平井のお館上杉式部憲政の重臣大串圖書の郎黨、名上猫之助と申す者でございます、刑部は凝と兩手を膝の上に置き松藏の顔を睨めた、此時はまだ上杉家とは、敵國になつては居りませぬ、足利の餘威も幾らか残つて居るところへ、上州平井の主上杉は關東管領家の一族、敵國ではないが武田家から見



は餘り重きを置きませぬ、何時頃取つて武田の領分を廣めることになるか分りませぬ夫故に、親しみもありませぬ仲、油断ならじと刑部が松藏に眼を着けるのも當然でございます、松藏少しも悪怯れず靜かに件の密書を差出しました、刑部手に取つて讀上げると、上杉憲政公其許を慕ふこと早天の雨露に異ならず、是非に來つて上杉の家の柱石となつて貰ひたい、若し其許をれを許容せば安中城を宛行ひ、其近傍に置いて壹萬貫の領地を遣はし、上杉の政治向萬端を任せたいとの事、家臣にも相應なものはあるが、全く心を許し上杉を守るものは其許の外ないと、牡丹餅で頬を叩く様なことが細々と認めてあります、刑部讀終つて再び松藏の顔を凝と眺めた、刑部是れ名上猫之助とやら、大串圖書殿は上杉家重臣たることは我等も既に是れを知る、大串氏の上



には渡邊、増田、園山などの歴々があるではないか、然るに其歴々を差措き斯く云ふ刑部に
 國政の大任をまかせんとは、どうあつても解し難きこと、是れは如何ぢや」松「ハッ、其疑
 ひは御尤もでございませうが、渡邊様は御老衰でお役に立たず、増田、園山の御兩所は權
 を蔑らにして館様の御意に合はず、夫故我等主人大串圖書、又鞍馬八流の指南番柴村大學、
 此兩人に萬事御相談、上杉家の改革には是非とも天下に並びなき豪傑の士を入れて、増田園
 山の權を制せねばならぬと、其處でお館様の御内命が下り、御當家様にて御承知下されば
 直様安中城と壹萬貫相違なく下し置かれる御墨附が出る筈になつて居ります、斯様なことは
 秘密中の秘密、よく其由を申し上げよとの事でございませうした」刑「あ、左様か、篤と勘考いた
 すに依つて二三日は當屋敷に逗留いたせ」松「何分吉左右をお待ち申上げます」松藏巧く化け
 込んだ、山名上の山猫よろしくと云ふ案排式、こゝに一日二日逗留してをります、刑部
 考へた 刑「武田の家には、五虎將と云ふ恐ろしい奴が居る、山縣河内守虎清、内藤豊後守虎
 豊、馬場信濃守虎信、原美濃守虎胤、飢富兵部少輔虎政、斯様な人物が居る間は、逆も我々
 が國政に與かることは出来ない、上杉微なりと雖も管領家の一族、鶏口となるとも牛後
 となる勿れ、安中城一萬石で我れを招くと云ふは此上もない出世、況て國政を預るとなれば
 何事も心の儘、場合によつては上杉家を横領し、上州一國我手に入らぬとも限らぬ、運

が我上へ向いて来た、オ、然うぢや」漁師は川で果てる、慾の深い奴は慾のために身を滅ぼ
 す、勘助いまだ甲州へ足を入れたことはないが、軍師だけに武田の家來の性行は悉く胸に
 あると見え、計つたことは忽ち的中して來ました、其處で刑部松藏を呼出し 刑「密書の趣旨
 悉く承知した、果して某を安中一萬石でお招ぎとあるならば、喜んで參るであらうが、
 其前に親しく上杉殿に拜謁を願ひ、お目通りの上で約束を致したく思ふ、別に上杉と武田と
 は鋒を取つて立向ふ間柄ではなし、平素疎遠に過ぎて居るだけの事、我等平井へ參つても差
 支へない、拜謁の事取持ち得るゝや如何」松「御念には及ばぬ、お館様からの御懇望、萬一平
 井へお出向あると聞かば、貴下様がお望みなくともお館様より御沙汰があるに相違ござら
 ぬ」刑「然らば日を定めて平井へ出向くことに致す、尤も不和の仲でないにしろ、我等は武田
 の重臣、表立つて上野國へ罷越す儀はならぬ、密やかに參るであらうから其由大串柴村兩氏
 に宜しく傳へあるやう」松「早速の御承知使者の面目も立ち、此上の喜びはありませぬ、御出
 向きの節は圖書大學兩人お出迎ひ仕るが、前申上げた通り渡邊増田園山などの前もあり、
 御拜謁も内分の取計ひを致さねばならず、夫是御承知置きを願ひたう存じます」刑「尤もの次
 第だ、就いては主君信虎公、駿河の今川次部少輔殿お招ぎにより、近日のうちに駿州へお客
 に參る、其節病氣と稱し跡に残り、私かに平井へ立越すが、日取はまだ定らぬに依つて、定

まり次第當方より密使を立てる、これも圖書殿へ傳へて呉れ」松「畏つてございます」松藏上々の首尾だ、こゝで刑部に別れを告げ八ツ花形の城を出で、夜を日に次いで上州へ戻つて来る、山本勘助は刑部の様子どうあらうかと待ちに待つて居たところ、松藏立歸つて委細の事を告げました、勘助は「ア愈々刑部め引かゝつたな、我も後には武田に仕へる身だが、祿に依つて己れの進退を決する、刑部如き人間はあつて害あり、無くて事の缺けるものでない、よし／＼來りたる其曉には太田市之丞の仇、又松藏妻の仇も美事に討たして呉れる、松藏は直に仇討の支度にかゝれ」松藏の喜びは天にも昇るの思ひ、神保に歸つて其支度に取懸りました、慙ることゝは神ならぬ身の知る由もない石原刑部、主君信虎公駿河へ出立を待つて居ります、抑々信虎公駿河の今川次部少輔義元公の方へ參ると云ふのは、如何なる仔細であるかと申しますのに、信虎には嫡子勝千代：：此時は既に今川義元の執持にて元服、京都の室町御所足利將軍義晴公より、諱の一字を賜はり晴信と名乗り又信濃守に任せられ、轉法輪家の御息女が御息所として參つて居ります、外に二男左馬助信繁と云ふ子があります、信虎此の二男を寵愛し、武田の家は是非共嫡男の晴信を廢し、二男の信繁に相續をさせたいとの思召、石原刑部の如きも二男信繁を立てることに大賛成、自分が格別見るところがあつて信繁を立てたいと云ふのではない、主君が然う云ふから阿諛で、夫が好い／＼と云ふだけの

こと、扱此の信繁を立てるに就いては、豈夫に兄の晴信を殺して了ふ譯には往かない、其處で駿河の今川を頼み、此方へ當分預ける事にし、其の留守中二男に代を譲つて了ふ魂膽、然るに晴信は幼少からして山本勘助と主従の約束をして置く様な伶俐な人物、駿河へ往くと云つても容易には參りません、又武田家の大忠臣前に申上げました五虎將の人達も、表面は信虎公に従つて居るが、内實では晴信公の方へ心を寄せ、如何にもして信虎を廢し晴信公を世に出さうと相談して居ります、夫がため晴信は病氣と稱し何と云つても駿河へ出向きません其處で五虎將の面々が信虎公に申上げるには、〇御嫡子晴信公が駿河へ參らぬと云ふものは始めの御沙汰が悪かつた、今川は儀式の家、足利家の儀式を學ぶために行けと云ふのだから、病氣と稱して出られぬのだが、其實留守中、二男左馬助殿に御家督をお譲り遊ばすことも悟つて居ります、これは寧ろ我君が先へ駿州へ趣き、駿府表において申し談ずることあり、晴信速に來れとお申遣はしになれば、晴信公も最早お断りは出來ますまい、駿府へお呼寄せになつた上、今川は無論我君に同意、其處で厳しく取止めになるが宜しからう、然うでなければ最初の御沙汰が御沙汰だから逆も急にお出向きには相成りませうまい」と言上いたしました、信虎元來大勇の人だが智慮の淺い大將、老臣方の此の言上を聞いて「信如何にも夫が宜しからん」とあつて、晴信を追ひ出すため、自分が先へ行く様なことになつたのでござ

います、是れ實は晴信公に味方する老臣共の計略で、斯くして信虎を駿河に追やり、今川の
手で却つて信虎を押籠め、武田の家は晴信公に相續せんと云ふ策略、人を祈らば穴二ツ、
俸を押籠め様として親父が押籠められることになる、今川が何で又老臣共の頼みを引受け、
信虎押籠めに同意したかと云ふに、義元公の御息所は信虎の娘晴信の姉でございます、親類
の交誼もあるが夫れは只表面の義理合で、義元々來上洛の望みがある、夫れには甲州の武
田の如き大家を控へて置かないと、上洛の留守中隙に乗じて他國より攻込れる憂ひもありま
すし又信虎を押籠めて置けば此れが人質となつて甲州からは今川へ弓をひくことが出来ませ
ん、旁々此信虎押籠めと云ふことは今川に取つては頗る有益なことでございます、依つて父
を押籠め子が無理往生に家を繼ぐと云ふのは甚だしく不倫のことであるが、其慶ことには掛
つて居られない、戰國の習ひ自分の方に都合のよいことなら、曲つたことでも引受ける、次
部少輔老臣共と打合せの上、信虎公の方へは何でも云ふことを聞く様なことを云つてやり、
出て來る様に仕掛けたから堪りません、信虎公は落し穴に簞をともし知らず、駿州行き支度
を急がしました、愈々出立となつた時石原刑部、俄に病氣と稱し信虎公のお供を辭し、信虎
公とは反對に夜に乘じ姿を變へて上州へ向つて出立に及びました、此事は前以つて腹心の家
來が平井へ來て大串圖書へ通知しました、圖書は直様勘助に沙汰をする、勘助より太田松藏

へ飛脚が來る、松藏は彌四郎おてるの兩人を上座に据ゑ、おとくを側に呼近づけ、松
げます、お二方の仇石原刑部は山本勘助先生の計略によつて愈々、來る二十五日平井の御城
下へ乗込んで來ると云ふ沙汰がありましてございませぬ、申す迄もなくお二方は御幼少、勿論
此の松藏も妻女の仇でございます、山本先生荒ごなしはしてやると仰せがありました、先
生にはかりお任せ申して居つては、親の仇も討ちましても眞實の仇討になりませぬ、討つも
討たるゝも時の運、相手は名たる武田家の豪勇でございませぬ、夫に恐れて居ては尋常
の勝負がなりません、依つて松藏は返り討と覺悟しました、お二方も返り討と御覺悟下さる
様、討たるゝと覺悟をすれば刃の下を掻ひくぐりませぬ、一ト太刀位は刺せぬことはあり
ませぬ、一念凝つては岩をも通せ、最早此の世になきもの討つでなく討たるゝ覺悟でお出
まし下さる様に、彌四郎漸やく十六歳だが、忠臣市之丞の俸だけあつて、松藏決して心配
いたすな、先は大人此方は小供、逆も敵ふとは思つて居ない、父と同じ刀の錆、夫れは既に
覺悟をして居る、てるお前は漸く十三歳、どうぢや此仇討に出るのは止めて、萬一我等討た
れた時は、劍術を習ひ優れた腕前となつて、親兄の仇を討つことにしては、おてる又利かぬ
氣の女と見えて、年々は參らすとも父も殺され家を逐はれた恨み、兄上様が右から參れば手前
は左りから參ります、貴下が殺されると極つた以上、跡に残つてどう致しませう、のう松藏

さうではあるまいか」松「ヤッお出来しなされた、おとくが萬事申上げる事も、能々お呑込みだから左様な思召ともなる、其志しがあるならば松藏と三人、ヤツカ傷ぐらゐ付けて置きませうや」松「とく汝もどうかてるの介添となつて其場に臨んで呉れる様」とく「素より其覺悟女ながらお主様の仇でございませす、是非お供にお連れ下さいます様」松「ウムおとく殿もお主の仇とな」とく「殺されるも殺すも一運托生でございませす、枯木の山の賑ひ、矢鱈に切られさへしなければ幾らかの手助けになるでせう」松「ウム天晴の志し、主従四人心を合せ、死ぬも生るも運賦天賦、御利益あらたかなる清水の觀世音をお願ひ申して、大望成就を祈つたが好い」とく「最う此仇討さへ出来ませすれば、手前は其場に命を失ひましても、残念とは存じません」情は人の爲ならず、太田市之丞の心掛けが好かつた爲、斯くの如き忠僕忠婢が出来ました、四人は必らず命を棄てる覺悟、尤も仇を討たんとするものは、相手を殺すばかり思つて居ませぬ、殺さなければ殺される、是れが仇討當然の結果でございませす、併し斯の如く必死を極めた仇討は滅多にありません、彼是して居るうちに勘助の方から再び通知があつた仇討の場所を違ひに違がない、依つて平井の御城下町通りにおいて討たせる、明二十四日に奥服店玉屋の店へ来る様にとの事でございます、玉屋は御存じの後家おきくの家、一同男み立ち支度とり、其翌日平井の御城下に来り玉屋へ草鞋を脱ぐ、此方は勘助大串圖書柴村大

學と打合せをした、片品六右衛門を石原刑部出迎への一人、勘刑部の沙汰には忍び姿で参るとの事なれば、供は召連れまい、武田の重臣でも彼れは猪武者、上杉公から招かれるのに氣を許し、深編笠か何かで来るだらう、當方からも出迎ひ多數は要らない、大串柴村兩家の御家來、又は御門弟衆を頼み、彼是十人もあれば大丈夫、城下外れより通りをお導き下されば、玉屋の近所にて我等が石原へ喧嘩を仕掛ける、其時は跡に引退つて喧嘩の様子を御覽下さい、大概こなしの付いた時分に、仇討の當人共を出す、手筈は付けてある、間違はぬ様」と悉く打合せを致しました、

(第十六席) 勘助彌四郎に親の仇を討たする事、并に勘助宇田川典膳と槍術試合の事

石原刑部においては、一萬石の主人になる身の上と、忍びではございませすが立派に着飾り、佛は只一人、日敷を重ねて上野國平井の城下へと、乗込んで参りました、城下外れには、大串圖書柴村大學の兩人、少しく後に退つて片品六右衛門、大學の門人五六人、之も皆立派に着飾つて待らうけました、刑部の姿を見ると、片品六右衛門ツカ、と前に進んだ、六「アイヤ夫れへ見えられたのは甲斐の石原刑部殿にはお在さずや」刑部深編笠を取つて、刑「如何に

も我等は石原刑部信國にござる、シテ其許は「六」手前は上杉家の臣片品六右衛門と申するもの、お重役大串殿御指南番柴村殿お出迎ひでござる」云つてるところへ大串圖書進み出ました。圖「某は大串圖書、遠路のところ、よくぞ御入來下すつた、定めし主人も満足に存するでございませう、シテお供方は：：」刑「は、ア大串殿でござつたか、今度は又御懇なお手紙を下し置かれ、某を上杉殿に御推舉とは祝着至極、殊に又お出迎ひとは恐入つた」大學も大「手前柴村大學でござる、お見知り置かれたく」刑「イヤお歴々お揃ひの御出迎ひとは恐入る、今日のところは我等もホンノ忍びでござる、斯様御鄭寧のお執持をうけ様とは存せず、家來も一向召連れません、何事も拜調の上の事」圖「御尤も至極、是より御案内仕る」石原の左右には圖書と大學が付き添ひ、前には片品六右衛門、後からは大學の門人、皆腕の出来るものばかり、これは萬一に備へる覺悟、石原刑部も化かされると云つて、好くも斯う巧々化かされたものでございます、左右前後には狐や狸が取巻いて行く、勘助大の山猫を退治たから猫の妙術を自分が取つて了つたかと思ふ位、偕一同は御城下の町を練つて呉服店玉屋の前へ立到りました、傍らより糸立てを身に纏ひ、襦袢々々した行装、一見乞食非人かと思はれる人物、加之に片眼で跛足でございます、是れ云はずと知れた山本勘助、酒に酔つた體でヒヨロ／＼出て來た、此時右手に付いて居た大串圖書、此事ありとは前から承知、二足三足

遅れた間に、勘助突如ドーンと刑部に突當つた、突當ると同時に、身體より一種異様の臭き香が立つ、刑部が「刑「あッ」と鼻を摘み少しく顔を横にそむけたが、刑「無禮者ッ」と大喝一聲、全體人を殺すこと杯は屁とも思つて居ない刑部、是れが甲州の領分内であつたならば、拔手も見せず叩つ切つて了つたのでございませうが、今新たに一萬石の食祿で、上杉家へ召抱へられると云ふ時、非人乞食と雖も御城下の民、夫れを無暗に切ると云ふのは大人氣ない業、殊に左右に上杉の重臣も居る、其手前にも短慮を見下げられる憂ひがある、大喝一聲喝しつめたならば、左右の大串柴村が黙つて居まい、斯う思つたから怒りを静めて一足引退り、醉漢の姿と柴村の顔とを見くらべた、勘助は一向平氣再び石原の傍へ摺寄つて、勘「ナ、何んだと、何が無禮だ、得體の知れぬ奴め、何が無禮だと吐しやアがるんだ、無禮なら如何するへ、ン汝の二本差たのは夫りやア何んだ、田樂屋の看板か」此惡口を聞いて刑部が怒つたの怒らないのちやアない、烈火の如く憤つて、刑「あいや柴村氏、此無禮は何ごとでござるか」柴村は何處を風が吹くと云はんばかりの面つき、大「あは、是れは平井に名高き山勘と云ふ醉漢、酔えば誰にでも喧嘩を吹掛けるが、而も彼れには聊か腕前あり、容易に懲らすことが出來ぬため、打棄て置くのでござる、石原殿無かし御迷惑であらうが、お忍びのことだ、本格を冒した譯ではない、柳に風、謝罪つて通らしやつたが好い」刑「ナ、何んと云はれる、

苟にも農工商の上に立つ武士、斯様な無禮者を棄おくは武士の名折れ、況んや謝罪つて通るとは怪しからん、勘忍袋の緒が切れ申した「大憎い奴でござる、若し其許此山勘を懲らして後の憂ひをお断ちにならば、お館様への奉公始め天晴のお手柄」刑「イヤ非人を切つて手柄などとは笑止の沙汰だが、左ばかりの困り者なら生して置いては却つて害、よろしい拙者成敗いたす」これを聞いた勘助、カラ／＼と打笑ひ、勘井の中の蛙は大海あるを知らず、菟の穂から覗くものは、天井の一方を見るのみ、山と山の間に挟つた甲州武士、天下に人なしと思ふは片腹痛い、成敗するか成敗されるか、汝覺悟してかゝれ」刑「ヤア穢多非人の分際として舌の長きことを云ふものかな、石原刑部の大刀をうけて見よ」叫びも敢えず、スバリツ：と抜打ちに切つける：：此時は大串圖書も、柴村大學も、將亦片品六右衛門其他の面々も、左右へ並んで檢視の格でございます、玉屋の暖簾を割つて太田彌四郎同じくてる、松藏おとくの面々も此争ひ如何に、勘助の沙汰指圖はどうであらうと様子を眺める、あはや勘助眞二ツと思ひきや、ヒラリツと體を躲した其の早さ、刑部空を切つて聊か驚き、激しく追つて切つて廻るを、右に飛び左りに跳ね、跛者の足をチヨツキチヨキ：：實にや胡蝶の花に狂ひ、健へんとするも能はざるに似て、ヒイラヒラ／＼舞上る、刑部こゝにおいて心付き、敵地にはあらざるも知らぬ他國へ踏込んだ上、我れを斯く迄應對は是れ乞食非人の業ならず、何

か仔細のあることならん、油断ならじと屹となつたが、今時分氣のつくのは遅まきの唐がらし：：勘助においては何時の間にか、鐵扇を取出し、勘「何處からでも来て見ろ、山勘を殺すものは天下一人もある筈なし、あは／＼ア大分刀に持重りが来たな奴」刑「何をツ」一上一下虚々實々、眞劍と鐵扇の勝負、目ざましなると云ふばかりもありませぬ、勘助は刑部を弱らせるが役目だから、左右前後に飛廻つて彼れの疲れを待ちます、刑部如何なる隙を見出したか、大上段に振冠つた一刀、刑「非人觀念」と叫んで斬込んで来た、勘助バツと一足退つてピシリツ：：刀持つ手を鐵扇で打据ゑる、刑「あッ」と云ふ間もあらばこそ、ガラリ、大刀を投出しました、狼狽して拾ひ取らんとするところを付込み、骨も折れよとばかり肩先から右手を打つ、刑「ウムツ」刑部の身體ビク／＼／＼ツ：：筋肉一時に引ツ釣り、性を失ふ如く感じたが、勇猛の刑部飛退つて小刀を抜いた、落した刀を拾はんとしたが逆も拾つては居られない、止むを得ず小刀を抜いたのでござります、刑「恐しい奴もあればあつたもの、是れは天狗だな」セイ／＼セイ／＼息遣ひの荒いこと、怒つた野猪が山野を荒れ廻るに異ならず、勘助の方は一向平氣、勘「大分弱つて来やがつたな、併しまだ／＼小供や端た者を出すには早い最う一ト揉み二タ揉みだ」鐵扇を刑部の目先に突つけ、勘「どうした蛙野郎、穂男、其持つたのは夫れでも刀か、イヤ早態のない奴だ、斬れ斬込まぬか、立往生か蛙野郎」刑「己れ憎きと

ころの其雑言、覺悟ッ」勘覺悟は疾くにして居る、蛙の方で覺悟をしろ、ガア／＼ガア／＼騒いでも騒いだゞけでは人間は切れぬ、どうした動かぬか」刑／＼、残念、非人乞食に辱かしめられるとは」怒が頭へ上つて、天井へ突抜ける位、假令勘助の方に隙はなくとも、別段双物を持つて居るでなし、高が鐵扇一本、どうなるものか、最う自暴自棄、獅子奮進の勢ひをもつて、小刀を振り廻して進んで来る、勘助斯うなつては手のうちのもの、ヒヨイ／＼ヒヨイ／＼飛退きながら、或は扇骨腰のあたり、或は胴體足の邊、ドコ其處の嫌ひも用捨もなく合同合間に鐵扇を食はせる、刑部へドモドしながら狂ひ廻るが、遂には打傷が三十六ヶ所も出来た、双物こそ持たないが、勘助の腕前で打たれ、而も其傷所が三十六ヶ所も出来たのだから、彼方が痛み此方が痛み、流石の刑部も殆んど苦痛に堪られなく相成る、刑部の供をして来たのは間下小十と云ふ腹心の者一人、此小十が見兼ねましたからツカ／＼と進み、片品六右衛門に向ひ、小／＼え、鳥渡申入れたうございませう」六「何んだ」小「主人刑部は貴方々のお招ぎに依つて當地へ參つたもの、謂は貴下方のために客でございませう、無禮を加へるものがあつたら御制しに相成るとか、共に御成敗なさるとか、當り前、斯く難儀致して居るのを、面白がつて御覽になつて居るとは怪しからぬ、何とか御助勢下さる様」六「貴公は譯の分らんことを云ふ奴だ、夫だから柴村氏が、山勘は手におへぬもの詫を入れて通らつしやいと親切

に申したのに、我意に慕つて一ト討たなぞとお力みになつた、されば自業自得、自から招いた禍ひだから仕方がない、我々の無調法とはならぬ」小「併し棄置けば相手が双物を持つて居らぬにしろ打殺されぬとも限りませぬ、其處を何とかお重役へお話し下すつて」六「其程思ふなら貴公は刑部殿家來、飛出して助勢したが好いではないか」小「夫れが手前なぞ出ました處で」六「イヤ／＼勇將の下に弱卒なし、一萬石の値打のある刑部殿の腕前、其家來だもの卑下するには及ばん、平井の家來に遠慮は要らぬ出さつしやい、貴公さへ出れば山勘も邪魔になつて、遂には刑部殿に討たれるだらう、何も忠義だ出さつしやい／＼」六「右衛門も悪い男だ一生懸命持上げる、斯う云はれては小十も致し方がない、澁々ながら一刀を引抜いて勘助の背後へ廻つた、柴村大學聊か驚いで、大「是々石原の供方、卑怯な真似を致すな、助太刀ならば前へ廻れ」と大聲に呷鳴り付ける、是れは勘助へ注意のためでございませうが、此注意は遅かつた、疾風の勢ひにて飛出した間下小十、根が眞面目に掛つては討てないを承知、飛出すが否や二ツになれと勘助の背中から浴せ掛ける、太刀風三寸にして身を避けませんが勇士の習ひ、大學が注意をしない迄も、油断のある勘助ではありません、ヒラリツと横へ飛んだ、實は勘助刑部を應對ばかりでは面白くない、何か打殺せる様な奴が飛出せば可いと思つて居たところだ、刑部を殺して了つては仇討をさせられないが、餘のものならば殺しても可い、

まことに可い量見で、餓虎が肉を得た様に喜び、此奴は手頃な者が来た。人間を丸太扱ひにして居る、小十は勘助に飛退がられて空を切り、體が前へのめつたところを勘助得たりと例の鐵扇でボカリ：：腦天へお見舞ひ申した、腕は牙えたり得物は鐵扇、眞的に撲はされたのだから堪りません、小十「ワァー」と長くひくところを、長くひく暇がない、ワの一字が此世の名残り、兩眼が一尺づゝも飛出し、糸をひいてブラリッ：：腦骨微塵に碎け、血嘔吐を吐いて打倒れました、只の一打ち、まことに呆氣ない命でございます、刑部目前に我家來を殺された、愈々氣が頭に上り、刑「己れ山勘ッ」と追廻す、追廻せば追廻す程汗ダク、最う眼が眩んで腰がグラ着き、身體は綿の如く、彼方へヒヨロ、此方へヒヨロ、如何に勇猛な奴でも身體が疲れ切つては働きが出来ませぬ、最う可い頃と思つた勘助、勘出よ太田來れよ太田」と叫ぶと、特構へたる太田彌四郎同じくおてるの兄妹、彌四郎は太刀おてるは懷劍でございます、勿論懷劍なぞでは、働らきが出来るものでない、おてるは勘助が背後楯格別働らかせぬ積りでございます、其後から太田松藏並におとく、何れも下には着込みを着用に及び、白の鉢巻き白の袴、袴の股立ちを取り小棧を揚げる、甲斐々々しく打扮ち、勇みに勇んでゾロ、出て来る、おてるは勘助の前に來り、外の三人は三方から刑部をオツ取り巻く、刑部大眼を開きセイ、といひながら此有様を見て、刑「シヤア物々しや、貴様達は

何者だ」云ふ間も待たず進み出たのは前髪立ちの彌四郎、珍らしや石原刑部、我顔は見知るまいが、我こそは甲州八ツ花形の城主武田太膳太夫の大忠臣、太田市之丞の忘れがたみ彌四郎、これなるは妹のおてる、汝三寸の舌頭に掛けてよくも我父を死地に陥入れたな、親の仇とは俱に天を戴かざるが孝子の道、今こそは其親の仇を討つ時節到來、刑部名乗つて尋常に勝負せよ」松藏續いて、刑「刑部我顔を見知つたるならん、大申圖書殿家來と名乗り、八ツ花形へ乗込んだのは、汝を此處まで引出さんの計略、我こそは甲州の分内酒折の百姓松藏汝のために我妻は腹を割かれて無慘の最期、其後太田市之丞様に仕へて家來となつた、女中のおとくも、我れに志しの同じきもの、主人の仇なり妻の仇敵、恨みの刃をうけて見よ」刑「偕は迂奴らは太田市之丞に由緒のものか、我を仇として覗ふは殊勝の様だが心得違ひ、市之丞は太守御寵愛の猿猴を打殺し、其罪に依つて切腹仰せつけられたもの、又百姓の妻の腹を割いたは是皆太守の仰せをうけて致したこと、我に於いて恨みをうける覺えなし、見當違ひの逆恨みは刑部の迷惑するところだ、仇敵と視はれる筈はない、考へて出直ししろ」松「黙れ刑部、汝舌頭をもつて瞞着さんとするも其手を食ふ我々ではない、家來の身として悪事を皆太守に塗付ける、其一義によつても汝の大奸物は分る、此場に及んで卑怯未憐なことを云ふな、サア尋常に勝負をしろ」刑「女小供や端た人足、是非に我等を仇敵と云ふなら、

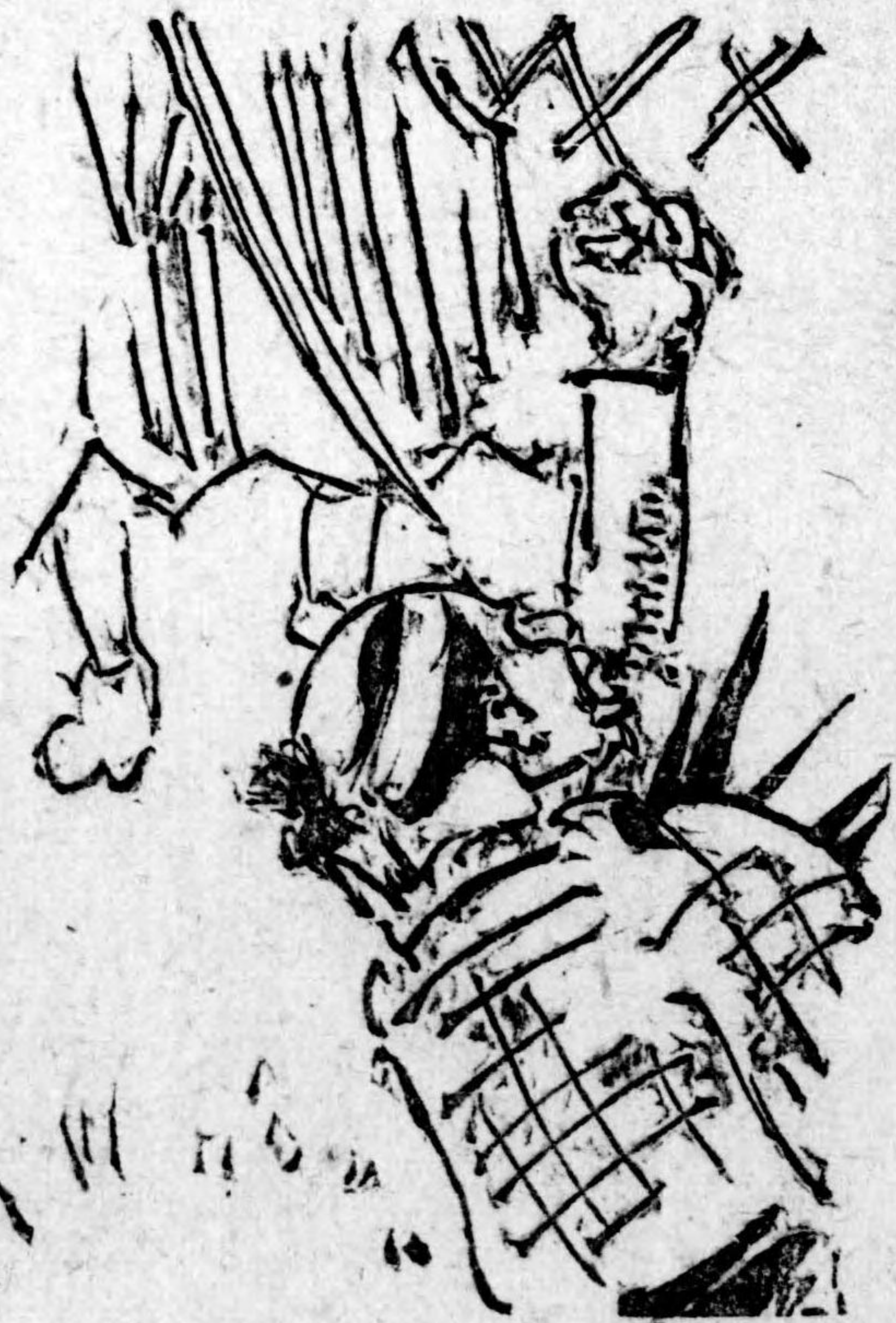
仇敵にもなつて遣はす、アイヤ山勘助今聞き通り仇討が出た、此仇討を片付けて置いて汝と勝負する、暫く控へて居ろ」勘助大いに笑ひ、勘「ヤツ拙者をば恐れると見えたり、去ながら我等は此場を去ることはならぬ、是れよく聞け、汝穢多非人と我事を罵るに依つて、本名を告げて閻魔の廳の土産にして遣はす、何を隠さん、我こそは三州牛久保の住人、軍學兵法をもつて天下を遍歴する山本勘助、孝子孝女忠臣義女の頼みに依つて、此仇討の助太刀を致すものである、殊にてるは餘りなる幼女、てるへ指南のため相手となる其心得でサア来い」刑「アッ」と驚ろいた刑部、刑「道理で強い譯だ、天下に名だたる山本勘助、片眼で跛者の看板を、今迄見損じて居たのか」自己の不明が漸く分つて來ましたが、これは遅い、青菜に鹽と云ふ顏附をして居るが最う爲方がない、刑「諸は大串も柴村も一緒になつて我を欺いたのだなア、此上は片ツ端から叩き切り死骸の山を築いて呉れる、サア来い、來れッ」力むは力むが疲れは極度に達して居る、殊に小刀一本だ、彌四郎一刀を振冠つて斬込む、松藏續いて斬込み、おとくも同じく劍術の手は知らないが盲目滅法界、勘助は刀は抜かず鐵扇でおてるを守護しながら、勘「足を拂へ、胴だッ、胴だぞ、ソレ小手ッ」一々世話を焼きますが夫は皆急所に這入つて居る、隙あるところを指されるから五月蠅の何のちやアありません、討つ方は夫程劍術の心得なき女小供、足とか腰とか指圖されても夫程には思はぬが、刑部は腕のあるだけ急

所を指されれば用慎しない譯にならない、ところへ彌四郎松藏は前申上げる通り強敵が相手だから生命を投出して掛つて居ります、隙のあるなしに拘らず飛込み飛込み無性に斬つてかかる、勘助「チヨイ」鐵扇を振廻しますから何分にも爲方がない、一足退り二足退り段々後へへと退つて來た、何しろ往來の真中、遂に玉屋の向ふ側、疊表などを商ふ家の軒下迄追込まれた、柴村大學フト氣がついて此家へ逃込れてはと思ふから先へ廻つてバタ／＼戸を締めさせる、一軒が戸を建てるに習つて近所隣り悉く戸を建て、物見の小さな窓から目ばかり出して見物する、刑部三方から攻められ軒下まで來た、ところが疊表の荷物が其處に二ツ許り轉がつて居ります、背後に眼がない刑部、足を退く拍子に此荷物へ打突かる刑「あッ」と思つた時は荷物に足を取られて真逆様に倒れた時でございました、勘「ソレッ」と聲を掛けると飛込んだ彌四郎、彌「觀念」と叫んで横つ腹を一ツグサリッ……、苦しがつて寝ながら刑部横に拂つた一刀、彌四郎の首の附根へ臨んだ時勘助手早く、其双先を鐵扇でボカリ……刀は刑部の手を放れて二三間先へ飛ぶ、勘「ソレおてるッ」おてる懐劍をもつて、てる「父の仇思ひ知れッ」と是又腹を一突き、松藏拜み討ち上から振おろした奴が、右の肩先を真深に斬込む、おとくも我劣らじととく「旦那様の仇敵」腰の番ひをグサと突込む、刑部程の剛の者だが、天命の盡きたのは致し方ない、荷物の上へ尻餅をついた時、二ツ並んだ荷

だによつて間に挟つた、荷と荷と間で足を宙に上げて居るから起上れない、まことによく出来たもので、茲に到頭彌四郎其外多年の本懐を達しました、勘助助太刀の甲斐ありと喜び鐵扇を揚げて一同を煽ぎ立て一先玉屋へ引取る、大申圖書柴村大學は各々其屋敷へ引取りましたが、平井の城下を斯く騒がしまして、勘助圖書の娘を助け大學を助けてある處から、兩人の執成によつて何等お咎めもありません、玉屋の後家も此時は元氣恢復、勘助のために助けられたと



云ふので、後家より申し出し彌四郎主従は當分玉屋に止り、彌四郎松藏の兩人は柴村大學の道場へ通ひ、充分鞍馬八流の劍術を學ばせることに話しが纏りました、勘助は何日迄も此處に居られるものでない、彌四郎其外の納りつき、最う外に用がありませんが、其處で愈々上野國を出立致しました、彼の山猫を退治しました山名上は後年武田信玄が城を築き、是れを猫谷の城と稱し、又此近郷を山本の郷と申しますのは、何れも勘助の手柄を後世に傳へるためでございます、備勘助は夫より下野國へと乗込んで来た、御承知の通り此下野國は東は常陸、南は下總、北は陸奥、御當今では磐城岩代となつて居るが、山本勘助時代には陸奥國の一部でございます、西南が上野國謂は奥州の咽喉首でございます、先づ小山の城下に小山小四郎隆政の様子を探り城の繩張りを見極めます、此小山の城は保元平治年間に下野大



椽小四郎政光の築く所にして、傳へて隆政に至つたのでございませぬが、後關ヶ原に石田治部
 少輔三成が旗を上げた時、奥州會津に上杉輝正大弼景虎が是に呼應して起つた、徳川家康出
 馬し此小山の城を上杉追討の本陣と定めました位、此小山の城は其繩張りが却々能く出来て
 居たものと見えます、勘助此小山の繩張りを見究め夫から壬生の御城下へ乗込んだ、壬生は
 元上の原と申したところでもございませぬが、寛正年中壬生筑後守胤業が城を築きました、め上
 の原改め壬生となりました、五世の孫上總守義雄：此人却々の器量人で、當時宇都宮國綱
 の手に屬して居たが、何時かは相模の北條と手を携へ、下野一國を切從へようと云ふ野心、
 山本勘助に御目見得を賜つて、義我等小身、遠來の客を充分に待遇す事も出来ざるが、緩々
 逗留してせめて軍學なり槍劍の術なりを家來共に授けて貰ひたい」と叮嚀のお言葉、此時御
 家來で槍術指南を致してをつた宇田川典膳、主君が勘助へ格別のお言葉を賜はり、餘りに優
 待するのを片腹痛く思つた、典膳小男で眇目で指三本も足りない、斯廢奴に何が出来るものか
 壬生にも槍の使ひ手はある、馬鹿にして居るぢやないか」と大不服、典膳アイヤ我君山本氏は
 聞えたる槍の名人と存する、願はくば今日御前に於て一手合仕り度、此儀仰付け偏に願ひ上
 げます」義ハ、ア、典膳、汝手合せを望むと申すか、イヤ山本氣の毒だが予が前にて其手並
 を見せて呉れる譯にはならぬか」勘助莞爾笑つて、典膳畏つてござる、去ながら手前は主と

して軍學兵法を論じまするもの、槍術は主でございませぬ、主ではありませぬがお好みとあ
 らば勝負仕るでございませう」義典膳山本が立會つて遣はすと申す、早速支度を致せ」上
 總守義雄人物ではあるが、自分の家來に負させたくはない、宇田川典膳は相應の腕前がある
 左程見苦しき敗は取るまいと思つた、見苦しい負を取ると思へば許さなかつたが、典膳を少
 し買被つて居る、イヤ少し位ではない、大いに買被つて居たのでございませぬ、雙方忽ち
 庭上へ出た、互ひに蒲公英つきの槍を抜いて突立つたが、元來勘助と云ふ人は思つたことは
 ドン／＼云ふ、決して人を願ふと云ふ事はしない、是れが勘助の大の缺點で、直情徑行
 ……まことに何うも遠慮會釋なくドン／＼やる、狷介不羈は憎み嫉みの基で、總身へ多數の
 傷をうけたのも皆此缺點から來た譯でございませぬ、此時勘助が、典膳アイヤ宇田川氏、貴所の
 蒲公英へは胡粉を澤山に塗らつしやい」典膳手前の槍へ胡粉を塗つて如何致す」其胡粉を塗
 つた蒲公英が手前の身體へ觸るゝ時は、手前の手足又は着類が必らず白くなるでござらう、
 白き粉が手前の身體の何れの箇所にも着いた時は夫をもつて手前の負と致す、突いた證據
 に胡粉が残る如何でござる左様な勝負は…」典膳貴殿の蒲公英へは何を塗りなされる」手前
 は何も塗らぬ、貴殿の槍を巻おとすか又は尋常に突いたものでなくては手前の勝と致さぬ」
 典膳山本氏は何も塗らぬ、拙者ばかり胡粉を塗るとな…」典膳左様々々、手前が勝つ時は尋

だらう「何を云つて居る、血ぢやアない金魚を食つたのだ」△意地が穢ねえ、食ふものに事を缺いて金魚なぞは止せばいゝのに「ワイ／＼ワイ／＼騒ぎ廻つて居る、宇田川典膳、恥かしさに眞赤になつて、コソ／＼／＼濡鼠が溝板でも潜る様に御挨拶を申上げて我屋敷をさして立戻つたが、これが勘助に遺恨を含む基と相成つたのは、是非もなき事でございます。

(第十七席) 典膳勘助を討たんと謀る事、并に壬生の兩門苦心奔走の

事

壬生上總介義雄も、山本勘助の腕前には舌を卷いた。義井の中の蛙は大海を知らず、我家來共の内にては一番の使ひ手宇田川典膳、小供も小供、嬰兒の腕を捻る様にやつて退けた、山本勘助は成程當代の豪者、典膳に胡粉で來いと云つたのは彼れの高言でない、卒直のところだ」と心付き感心をした。義「天晴なるぞ山本、近う／＼」勘「イヤお褒めでは痛み入ります」義「サ、近う參れ、盃を取らするであらう」勘「重ね／＼忝なうござる」義「實は左迄とは思はなかつたが、思ひの外の腕前、シテ是れが軍學の餘技であるとは、愈々もつて感ずるの外なし」大層な御賞美で赤銅造りの太刀一ト振りを下しおかれた、勘助身に餘る光榮を喜んで引退つて參る、此方は宇田川典膳這々の體で宿許へ引上げたが、残念で／＼耐りませぬ、

典「何うして呉れ様」と思つて居るところへ門人の磯田、金子、羽黒、石山などの連中が見舞旁々やつて來た。勘「借先生、どうも大變なものが舞込んださうで、お怪我はなさりませぬか」典「イヤ御一同何とも面目次第もない、残念で／＼ならぬが、腕前が餘程違つて居るので涕を呑んで引取つたが、御前に於て高言を拂つた山本勘助、定めし我君も不快に思召してお在なさるだらう」金「先生ところが爾でないで、今鳥渡承はつたに殿には大層山本を御最良お手許にあつた赤銅造りの太刀を當座の褒賞としてお與へになつたと云ふ」典「フン夫は眞實のことか」羽「全くどころではござらぬ、眇目め拜領の太刀をブラ下げ莞爾顔で今退つて往きました、手前眼前夫を見ましたので」典「借々殿様は情ない思召、如何に不覺を取れば迎、イヤ合戦の場に於て御馬前で討死をする我々、旅他國の渡り鴉を御賞揚あつて、泉水で濡ビシヨとなつた我家來を何とも思召さぬとは聞えぬこと、これでは戦場で我家來を討取れば敵に御褒賞を下さると同じ事だ、イヤ殿様を恨らんでも爲方がない、憎い奴は山本勘助、おのれヤワカ無事で此下野國を立たせるものか」石「先生の御立腹お道理至極で、手前共の様な者も萬一つお役に立つならお助太刀致します、寧ろ殺つてしまつた方が宜しうございませう」典「勿論だ、伊し勘助と云ふ奴は容易ならぬ腕前の者だ、磯田も金子も羽黒も石山同様、イヤとなつたら味方して呉れるだらうなア」勘「仰せ迄もありません、手前の考へでは夫程豪い奴な

ら御門弟中一同へ觸れを出して、大勢で討取つたらば如何なもので」典「お前達が先立ちになつてやつて呉れるなら、門弟一同も味方して呉れる、一同でやれば幾ら腕前達者でも一人と多勢討てるに違ひない、どうか多年の交誼を思つてやつて貰ひたい」金「先生の恥辱は壬生の御家の恥辱、殿様の恥辱となる事だから勘助を殺したつて差支へはあるまい、夫では我々が骨を折つて御門人一同のところを廻りませう」典「何分頼む」こゝで磯田、金子、羽黒、石山の四人が先立ち、御門人のところを廻つて歩いた、何が偕て戦國時代のこと各自殺氣立つて居る、殊には勘助に無禮の振舞ひがあつたと云ふので、内々面白からず思つて居た連中もあつた。○結構々々面白く、早速お味方」△拙者も御加勢」○我等も御同意」×手前も一味」と云ふので血氣に逸る若侍七八十人、



我もくと勘助殺しのお手傳ひに馳參じた、是から毎日多勢の人が宇田川典膳のところへ寄合ひ、如何にして勘助を殺したのか、どう云ふ手筈を取つたものかとの相談、是が二人三人でコソコソ話すのだと滅多に分らないが、荒くれ武士が酒を仰飲つて公然に相談をするのだから、此事忽ち太守上總介義雄の耳に這入つた、義雄大きに驚き、武士大將の松崎右門、高田左門の兩人を呼出す、是れは壬生の兩門：即ち右門左門を兩門と稱へて有名な人物、これをお呼びになつて、義「兩人」ハ、ッ」宇田川典膳山本勘助のために脆くも後れを取つたのを残念に心得、多數徒黨して勘助を討つての企てある由、其方共も定めし承はり及んだであらう、如何ちや」右門聊か膝を進め、右如何にも其儀承知仕りました」義「是は以つての外儀と存する、山本勘助は當時其名を遠近に馳せ、少しく後來の心掛けある諸侯は争つて彼れを召抱へんと致してをる、左ばかり名あるものに打負けたり逆、宇田川典膳の恥と云ふにあらず、同じ腕前同じ手練の者同士なら恨む事もあれ、素より格段違つた技倆負けるのは當然の事だ、必らずとも詰らぬ企てして、物笑ひを残してはならぬ、速に思ひ止まる様、其方共罷越して取鎮めて參れ」兩人「畏つて候」直様打揃つて宇田川典膳の道場へ乗込んで來た、右頼む」○ドレレレ……これは松崎、高田の御兩所、よくぞお味方にお出下された、サア〜」右お味方に來たとは何だ、我等は殿様の御内命によつて罷越したのだ、典膳

殿居られるか」〇へエ只今山本の眇目を討つ大評議最中でございます」右早く取次がつしや
 い「〇へエ」取次の者典膳に此事を云ふと、典膳それへ出て来た、案内をして書院に通し一
 應の挨拶があつて、松崎高田の兩人より上總介義雄の思召を傳へる、典膳殿様の仰せならば
 と承知するかと思ふと然うでない」典「今日は手前一存に於てお請が出来兼ます、御迷惑でも
 一同と評議を仕りますから、暫くお待受けを願ひたい」高田左門が 左若侍など血氣の
 勇に逸つて却つて山本のために討果される様なことがあつては宜しくない、評議とあらば及
 ばすながら我々も其席に連つて諭してやらうと存する、松崎氏どうだらう」右イヤ夫はよい
 ところへ心付かれた、宇田川夫では我々も評議の席へ參つて心得違ひなき様に若侍を慰諭
 て取らせ様」典「左様でございますか、重ね々御迷惑だが、然らば左様に願ひたい」其處で
 奥座敷へ打通つた、八疊敷の間を二ツと六疊が二ツ、餘り廣い屋敷ではないから残らず襖や
 障子を取拂ひ、其處にゴタ／＼四五十人の人が寄集つて居る、中には椽側へ三人五人づつ陣
 取つて酒を飲んで居るものもある、一番奥の十疊の間に典膳は兩人を案内した、茲には磯田
 金子、羽黒、石山など重立つたものばかり七八人居ります、其時典膳が一同に向つて 典「松
 崎高田の御所御使者で、殿様からは々々斯く斯くの仰せ渡しがあつた、御一同これは如何し
 たものだらう」と口を切ると松崎右門が 右「宇田川の云ふ通りの次第で殿様も大層御心配、

勘助は高名な人物、其勘助に敗を取つたから逆、敢て宇田川の恥とするには足らないのだ、
 一同心得違ひのない様に殿様の仰せに従ひ速かに此場を退き、身分々々の御役目を勤めます
 る様に」此時磯田：磯田は門人中の頭分、名は丈之助と云つて年は二十五だ、此の日向ふ
 見すの猪武者、松崎殿の仰せだが、是を黙つて居た日には壬生侍の名が廢ります、宇田
 川先生が只の敗け様ならば我慢が出来るが、尋常の試合に泉水の中へ突落して金魚を口に頬
 張らせるといふことがございませうか、高慢ちきな眇目山本、他國へ出れば壬生の槍の指南
 宇田川典膳は是々だと一ツ話しの笑ひの種に致すのは知れて居ります、斯様な無禮な奴をヌ
 ケヌケと他國へ出しては宇田川先生の恥ばかりではない殿様の恥とも相成る、手前は誰が何
 と云つても承知は出来ませぬ、御扶持を召放すとの嚴命ならば浪人となつても勘助は生かし
 ておきませぬ、各々如何でござる」一同「寧ろ面倒にお暇を願つて山本退治をやらう」御一
 同の意氣込み忝ない、夫でこそ戰國武士の魂だ、早速連判状を作らう、殿様へお暇願ひ
 をして山本の眇目を殺す、浪人すれば天井なし頭の押へ人がないのだから心任せ」磯田丈之
 助硯箱を引寄せ連判状を書始める、流石の松崎高田の兩門も手の付け様がございませぬ、宇
 田川典膳内心は大喜びだが松崎高田の前がある、黙つても居られませぬ 典「アイヤ磯田連判
 状とは穩かでない、マア待たつしやい、殿様の御心持ちと云ひ御兩所のお骨折、只々我はか

り張るも宜しくあるまい、今一應考へ直して：「『これは怪しからん、全體この事の起りは先生からではござらぬか、其先生のため我々門弟御扶持を投げ生命を捨て、山本勘助を殺さうとなつた、今更先生がお止め立なされるは怯けた譯か、夫ともお扶持が惜くなつたのでござるか』」
 『イヤ爾立腹して呉れては困る、併し殿様の思召もあり御兩所のお顔もある、マア静かに熟く考へて事をせんければ、切角の武士の意地も通し甲斐のない事では困る』高田右門も口を添へて、右殿様の仰せを一向に用ゐんのみならず、殿様からお暇を下されると云つても立去るに忍びないのが臣子の情、それを此方から殿様に暇を呉れる、そんな亂暴なことは宜しくない、今日は御一同も殺氣立つて居る様で我々の云ふ事も能くは耳に這入らぬと見える、依つて今夜は御一同再考なさつて、明日迄否やとも我々兩人の許へ御沙汰下さる様、御沙汰なしに勘助を打つ様なことがあれば殿様へ申譯が立たない、其許方は兎に角、我々が御返事を申し上げぬうちに事が出来たとあつては切腹でも致さなくてはならぬ、其處を心得て明日までよき御挨拶をなさる様に、宇田川篤と心得さつしやい、殿様の上意は其許に下つたのだから、典心得ましてござる、再應評議の上明朝御挨拶に罷出ます、御前體よろしく御取繕ひ下しおかれまます様に：「こゝで松崎右門、高田左門の兩人は立歸る、後で宇田川典膳が、典借々御一同の勇氣は實にどうも大したもの、日頃智者であると云ふ高田左門も

餘り口を利く事が出来なかつた、左門は智者だくと御家中で持囃すが、其智者も智を用ゆるに處なき迄御一同の勇氣は逆つた、夫と云ふも斯くいふ拙者を思召して下さるからの事殊に磯田の血判連判状はよい思ひ付き、是程皆さんが意氣込んで下されば、山本勘助だとして鬼でもなければ蛇でもない、何我々より少し優れて居る位のものだ、討つて討てぬことはござらぬ、サアこれからは連判状へ御一同血判致さうではござらぬか、我等が發頭人だ我等第一番にやる、宇田川典膳若侍を慰諭るところではない、忽ち小柄を抜いて腕から血を出して血判に及ぶ、磯田丈之助欣々然として、我等の發言は先生も此の通りだ、第二番には我等とこれらも名を書き血判に及んだ、次は金子熊太郎、次は羽黒甚兵衛、次は石山角右衛門續いて一同血判：「總體が六十四人でございます、残らず濟んだ後、典借御一同此上は勘助めを討つ場所を定めて、此方から果し状をつけたものでござるか、豈敢に暗討も卑怯如何なものぞござらう、勿論公然に果し合が好しい、室の明神境内、室の八島附近に於て、果し合を致さうではござらぬか、宇田川先生より勘助に對し果し状をお遣しが可い、典成程室の八島は至極よろしからう、然らば果し状だが、斯う極つて見れば明朝に至つて松崎高田へお返事をした上での事に致さう、血氣に許り逸つた様に思はれてもならぬ、夫もさうだ一應断つておいて致さう、何しろ今夜は飲み明すが可い、其夜は一同大きに飲んで勇氣を練り

夜の明けを待つて事を致さうと夫々支度に及んでをりまする、此方は眉を擧めて宇田川の處を出た松崎右門と高田左門は、其儘御殿へ戻らずして左門の屋敷へ来た。左「借松崎どうも怪しからん奴は宇田川だ、我等私かに様子を見て居たが逆も是は尋常では思ひ止まらん、依つて明日迄返事をしろ、返事をする迄は決して事を待つてはならんと申したが、あれは松崎どう云ふ積りか、我等の心が分つたか」右「別段高田の心が分つたかも知れないかも知あるまい、明日迄に宇田川が若侍を慰諭めて可い挨拶に来るだらう」左「夫だから不可ぬよ、逆も可い挨拶なぞに来るものか、我等の考へでは五六十人の人だから居る、今更宇田川も止める事が出来ない、必らず勘助に果し状か何か出すに違ひない、最う主君の思召も受付けぬ覺悟で居る様子だ」右「併し君命に戻るは家來の分でないだらう、兎も角明朝まで待てば分る」左「そんな氣樂なことを云つて居れば壬生家の一大事だ、イザ合戦となつた時に君前に立つべき五六十人のものが、肩を並べてお暇でも願へば、我藩の如き小さな大名には由々しき出来事となるのだ、夫によつて聊か考へたことがある、其ため我屋敷へお連れ申したのだ」右「何か可い考へがあるかな」左「よいと云ふ程のことでもないが、是からやつて見れば分るのだ、御足勞だが我等と一所に往つて貰ひたい、最棄ておく事はならぬ」右「どうする積りで何處へ行くのだ」左「先刻宇田川のところで明朝までに挨拶をしる、夫迄は何事をしてもな

らぬと云つて来たのは茲の事だ、今より山本勘助の宿所を尋ねて早々此の土地を引拂つて貰ふのだ、勘助さへ居なければ何も起りやうはない、彼等が幾ら騒いだところで爲方がない、喧嘩は自然お流れとなる」右「成程巧いところへ氣が付いた、一家中で高田は智者だと云つて居るが聊か夫に相違ない、是れは山本勘助に内情を打明け頼んで見よう」左「矢鱈に内情を打明けるのも如何なものだが、兎に角勘助の様子を見た上で、出来る事なら爾して貰つたが何事もなくて可い」右「山本だつて御家中に騒動を起させるのを樂しむものでもあるまい、殿様からは赤銅造りの一腰を下すつた上、是迄にない叮嚀な扱ひをなされて居る、二言と云ふものでないから早々参らう」左「イヤ晝の内は不可ん、萬一宇田川一味の者に我々が山本の宿所へ参つたところを見られるれば、内通にでも往つたと思ふ、左すれば火に油を注ぐ様なものだ目を暮してから参る、何は無くとも一献くんで」晚餐を認め御酒を飲み、日がトツブリと暮れてから、供をも連れず忍び姿で松崎右門高田左門の兩人、御城下の佐野屋と云ふ茶屋旅館へやつて参つた、此佐野屋は申す迄もなく山本勘助の泊つて居る宿屋でございます。右「許せよ」冠つて居た深編笠を取つてズイツと這入つた、佐野屋の亭主が見ると御城中の立派な旦那方、帳場の中から丸くなつて飛出し「亭へ、エッお在なさいまし」右「ア、當家に參州牛久保の住人山本勘助殿居られる筈だが、左様か」亭「はい、彼の眇目で指の三本足りない、

何か企んで居るやうでござる」勘ハ、ア手前に恨みを懐いて、偕々女子と小人は養ひ難し、典膳も尙且小人でござるな、御注意は千萬、忝ないが彼れ何程のことか致すべき、御棄置下さる様に」左「イヤ其處だて山本氏：彼れの門下門弟は彼れ百人もござらうか、聞くところに依れば五六十人一連となつて血判に血をすゝり、其許に仇を致さうとの結構、殿に於ては殊の外御賞美ある其許、萬に一ツも間違ひがござつては我々が殿へ申譯が立たぬ、如何でござらう是は我々兩人よりの頼みだが、既に御用も大略お片づきのことなれば明朝にも當地御發足と云ふ儀は：」勘ハ、ア人数五六十が、徒黨したと仰せがあるが、イヤ面白いな、實は是迄五人十人は相手にしたことは數が知れぬが、五六十人の相手はまだしたことがない、まことに幸ひでござる、勘助一人にて五六十の人間と戦つて見たい、高の知れた蛆蟲共何程のことがござらう、決して御心配下さるな、折角の思召だが、人数多きため山本勘助、敵に背後を見せたとあつては後代迄の名折れでござる」取つてもつかぬ勘助の大氣焰、兩人顔を見合すばかり：」左「イヤ、山本氏が多勢を恐れ敵に背後を見せた：逃げて呉れと申すのではござらぬ、一家中に騒動起るのを防ぐため、手前共兩人より只管お願ひ致す次第、こゝは枉ても御承知を願ひたい」勘折角のお頼みだが此儀は平に御用捨下さる様、今日にもあれ晴の勝負を申込るれば、勘助辭退なく立合を致すでござらう」決然斷つて了ふ、勘助に於て

も何も這麼ことに飽迄意地張る必要はないが、實のところ勘助は、未だ二日ばかりは此壬生を立退くことが出来ぬのだ、それは壬生城の繩張り面白ところがある、後來心得て置かねばならぬ箇所があるのだが、外面だけの觀察では物足らない最う少し内面から見取調べて置きたい、夫がため兩門の頼みを容れて明朝出立とはならぬ次第、明ら様には申しませぬが夫があるから斷つたのだが、松崎、高田の兩門は内情が分らぬから、○山本は恐ろしく功名心に強い、強情千萬な奴だ」と大きに不服を抱いて立戻つた、高田どうしたものだらう、山本と宇田川の喧嘩はどうなつても構はぬが、殿からの御沙汰宇田川が諸かぬとあつては困る、今御家中の若武者五六十人も一度に暇を取つて出る等となれば、御家の安危にも拘はる程のことになる、困つたなア」左「サア夫故、拙者も心配して居るのだ」壬生家は誠に小藩、一家中血氣のもの六七十人もお暇を願ふ様なことがあつては前申上ぐる通り一大打撃兩人心配は致したが止むを得ませぬ、左「明朝殿様へお目通りを願つた上」と其夜は分れて歸宅致しました、此方は翌朝になると宇田川典膳、典磯田、今朝高田松崎の御兩所へ斷りも立てなくてはならぬ、其上で表向き山本に對して果し合を申込よう」勘「勿論左様でござる、手前金子、羽黒、石山とも相談致したが、山本が出立でもしてはならぬ、今朝は様子を見て參る譯で、旅籠屋へ石山が立寄り探る様に頼んで置いたが、愚圖々々して居ては餘計に不利益

早速果し状を書いたが宜しうござらう」典「夫も爾だ先へ果し状を書いて置かう」其處で兩人文句を相談の上、室の明神の境内に於て果し合を致したい、明後日朝四刻を相圖に室の八島へ出向いて呉れ、立會人は門人磯田丈之助、金子熊太郎、羽黒甚兵衛、石山角右衛門の四人と云ふことを認めました、折柄石山角右衛門も来た、石山本の宿所の前へ行つて行ると大きな建札があつた」磯「ハ、ア如何云ふ建札があつたな」石「拙者當地引拂ひの儀は来る四日早朝に御座候、御用の方は夫以前に御沙汰下されたたく候、山本勘助とある、四日迄は出立せぬことは大丈夫だ」磯「ヤア夫は結構々々、今日は一日だ、此方では明後日の果し合と極めた、明後日は三日だから山本も嫌とは云へない、夫では尙更のこと直に果し状をやるが可い」典「併し松崎高田と約束をしたのは、何とか今朝挨拶をして、其後山本の方へ手を付ける、夫迄は何もせぬと云つてあるから、一應断つた後でなければ、果し状はやる譯になるま



い」磯「ナア二構はない、既に我々は萬一の場合、お扶持をお返し申して永のお暇をさへ願はうと覺悟したのだ、先生は松崎高田の御兩所へお断りに出向く、我我共は山本へ果し状を送る、手分けてやれば宜しからう」典「成程祿を捨て、掛つたのだ、彼是斟酌はいらない道理、夫では手前は直さま松崎高田の御兩所へお断りに出る、各々は山本へ出向いて果し状の返事を取つて貰ひたい」磯「山本の方は我々四人で取計らう、先生は松崎高田の方を……」こゝで宇田川典膳は、支度に及んで松崎と高田へ出向く、磯田、金子、羽黒、石山の四人は果し状をもつて山本勘助の旅宿を訪ねて、勘助に面會致しましたが、此の一件は如何落着致しますや……」



(第十八席) 典膳勘助を討つ機を逸する事、并に勘助情死の男女を助ける事

磯田、羽黒、石山、金子の四人、山本勘助の前に出て、宇田川典膳の果し状を差出すと、勘助莞爾笑つて是れを取上げた、一讀の後、勘助御門人衆御苦勞だ、ア、イヤ書狀の趣き委細承知した、表に立看板を出した通り、我等當地の用向は三日中に済む、四日早朝發足の積り、憚ることあらんかと思つて態々札を出したのだ、夫がため餘計に當地に逗留することはならぬが、滞在中なれば何時でも差支へない、多分五十人、七十人、丸くなつて出られるだらう、多勢を相手は至極面白い、後學のため願ふても斯様なことは滅多に得られぬ、御遠慮なくドシ／＼詰掛られたい、其許方も立會人なぞと間意いことは云はず、宇田川と一所に打つて出なさい、但し此果し合は日延は出来ぬ、我等出立の都合があるから、日延させぬ事だけは確と斷つておく」磯田然らば御承知の御返書を一筆願ひたうござる」勘助宜しい」果し合承知の旨を書いて渡した、磯田等四人は喜んで其儘立戻つて来る、羽田成程山本は勇氣があるな、五十人、七十人丸くなつて掛つて来い、斯様な試合は願つても得られぬと云つた、萬一敗を取つてはならぬから、各々其御覺悟で」羽田ニ幾ら力んでもタツタ一人、此方は六七十人も居る、二人か三人全く生命を投出して切られる積りで飛込めば、勘助だつて鐵でこさへた人間ぢやない、必らず傷を負はせるに違ひない、大丈夫だ四日に當地を立つ、満足に立たれるものでない、各々も勇氣を充分につけてゐるが可い」石田勿論さうだ」一同大きに意氣込んで

居ります、偕亦松崎右門と高田左門の兩人は早朝御殿へ出て殿様に拜謁を願ふ、上總介義雄早速御逢ひになつて、善昨日申付けたる宇田川典膳の一條は如何相成つたるか」左其儀につき高田左門申上げますが、典膳門弟共殊の外騒ぎ立て、御家を退散しても山本勘助を討たねばならぬと意氣込み、甚だしく意氣込み居ります、又勘助に對しては一應退散を勧めました是は勘助さへ退散なさは、御家中別條なく相濟む事と心得ましたるからの事、然るに勘助更に退散を承知致しませぬ、五人、十人相手にしたことは、是迄數を知れぬが、五十人、七十人の相手はいまだ致した事がない、討たるも討つも武士としては有打のこと、多勢の人の恐ろしさに背後を見せて逃げたとあつては勘助の一分立ち難くと申し、是れも果し合を望み居ります、誠に早双方とも強情者の寄合困り入りました」義左様か、イヤ／＼双方が左様なことを主張ならば、予に取計らひ方がある、左門近う」左ハ、ツ」上總介義雄、高田左門に何か耳打をなさつた、莞爾合點て左門は又右門に耳打をする、右成程これは妙計でござるな、山本勘助の出立は来る四日、夫迄のところを……」左あ、松崎氏お聲が高い」義兩人早速取計らへ、予は又其心して致すであらう」左忝けなきお言葉、左様取計ふでございませう」と兩人一應我屋敷へ立戻つて家内の者と萬々打合せをして再び登城致しました、義雄の妙計とは何であるか、左様なことは宇田川典膳更に心づきませぬ、松崎右門のところへやつ

て来て「頼む」「ドーン」取次が見ると宇田川典膳だ、お出なすつたな、主人から仰付の



○「主人は今朝、急に殿の御召で御出仕に相成つた、其節申置きには宇田川典膳殿昨日の御

あつたのは是れだ。○「只今主人不在でござ
います」が「典、何れへ往かれた」○「御殿より
急々のお召、多分今朝は宇田川様お見えで
あらう、お見えになつたら昨日の御返事は
高田左門殿方へ遊ばす様にとの言置きでこ
ざいました、何うぞ高田殿の方へ」典「ハア
急々の御登城で委細は高田殿へ返事して呉
れと申おかれたか、承知した、夫では高田
殿へ御返事を申す、御歸りがあつたら我等
の参つたことをお傳へ下されたい」典膳其
足で左門のところへ来た典「頼む、頼まう」
○「ドーン」典「手前は宇田川典膳、御主人
左門殿御在宿ならば御意得たうござる」

返事に参られるに相違ない、夫に就ては尙お話しもある、お目に掛つてと思つたが急の御召
だから止むを得ぬ、委細は松崎右門殿も御心得である、どうか右門殿へ御返事下され、尙右
門殿からお聞き取りが願ひたい、斯様申せとの事でござりました、御足勞乍ら右門殿の方へ」
典「イヤ實は右門殿方へ参つたところが此方と同様の御挨拶、右門殿も急のお召委細は當方
へとの事であつた」○「ハア、して見ると右門殿も急のお召になつた事と見えますな、打合の
間もなく出仕したので双方が同じ事を云ふ譯になつた、夫では御足勞ながら御殿へ出て主人
に逢つてお話し下さる様、是非今朝御挨拶を承はり、其上申上げることあると云つて居
りましたから：：」典「左様でござるか、御殿へ出てお目にかゝる儀は：：」と云つたが、何
しろ勤助一條に就ては有無の挨拶だけはしなくてはならぬ義務があります、此儘で置く譯に
ならぬから已むを得ず御殿へ出て来た、高田松崎の兩士に面會を求めると、松崎右門が出て
参つた、右「これは、宇田川、昨日は失禮致した、急御用で出仕したため、こゝ迄御足勞を
願つて相濟なかつた」典「夫に就て御返事申上るため：：」右「あ、御返事は手前だけでは承
る譯に参らぬ、今高田を呼ぶ、暫く」ズーツと引込んで、一刻経つても一刻半経つても出て
参りませぬ、松崎は、右「高田氏宇田川を待たしておいたが、此上の算段をしなくてはなら
ぬ」左「第一番に磯田を呼びにやるが可い」右「跡のものは」左「磯田が来たら金子、金子が来た

ら羽黒、羽黒が来たら石山と、此四人を引張つて来さへすれば跡は何を爲出来すものか、順順に呼上げ様」右「夫でも」足輕に内命を含めて宇田川の道場へ飛ばせる、足輕が「足輕出丈之助様にお目に掛りたい」左「ハア何用だ」足「只今宇田川先生が至急にお目に掛りたいの事だ、御城中にお出なさる、手前と御同道下さる様に」左「御殿に出る筈がない、高田、松崎の屋敷へ往つたのだが」足「手前は何か存じませんが、至急との事でございます」左「ハア然るか、然らば同道し様」磯田丈之助何の氣もつかず足輕と同道で御殿へ来た、夫と見て高田左門「左「磯田よく来た、サア、此方へ上りなさい」左「手前は宇田川先生のところへ用事で参つたもので」左「宇田川は今御前に出て居る、直に下つて来るだらう、此方で待たつしやい」一室へ引入れて夫には張番をつけておく、次に羽黒次に金子と云つた様な譯で、宇田川の参謀本部は皆御殿へ引出された、跡に残つた連中は「ハテ一同が御殿から先生に呼寄せられたが、天氣模様か幾らか變つて来たかな」△「雨か風かと思つたら意外に好天氣で何事もなくなつた日には詰らない」何て噂をして待つて居ります、借宇田川は其日八刻過ぎになつて、上總介義雄がお目通りを賜はるとの事でございませぬ、餘り待せられたから内心不平で堪らないところへ、思ひもつかず殿様のお目通り、何事なるかと思つて居ると、殿様御酒宴につきお相手をしろとの事だ、まだ果し合は明後三日、今日一日位は何んでもないと、典「難有き仕

合せ、手前宅に差掛つた用向がござれば、手紙を一本遣し度く、其上殿様御前へ罷出まする」○「尤も至極、今晚は多分夜もすがらの御遊びであらう、其積りでな」典「承知致した」典「膳其由手紙を認めしたが、是は書いたゞけで家へ届けつこはない、高田、松崎が手配しておいて、其手紙は取上げて了つた、典膳は御前へ出て御酒のお相手、上總介義雄が御酒宴中、義「典膳」典「ハ、ッ」義「昨夜々中フト眼を覺すと、何者とも知れず庭前へ兩三人忍び込んだ様子、怪しからぬと存じ咳拂ひを致すと森閑とする、又暫くすると人音、ハテ不審と近習に戸を繰らせて見ると確かに逃去る人影……どうも戦國の世の中何時害に逢はぬとも限らぬな」典「夫は以つての外の次第、宿直もござりましたらうに、何故曲者を取逃しましたか」義「サア宿直の者も五六人は居たらうが、寢室とは一ト間隔つて居つた、騒がせるもと思つて棄ておいたが、まことに心掛りに相成る」典「恐れ入つた儀でござる、左様な曲者をお棄置遊ばすは後日の祟り、取逃したのは残念千萬の次第」義「オ、さ典膳、汝位の腕前の者が宿直せば、定めし曲者忍び入つても取つて押へよう、今宵より御殿内へ詰切り宿直申付ける、随分出精して勤め呉る、様に」典「ハ、ア……」典膳弱つたの弱らないのぢやない、御殿内詰切りとなれば勿論屋敷へ當分歸れぬ、ト云つて既に山本勘助には果し状が向けてある、之は失策た、何しろ一同の門弟達も祿を放れても勘助を討つと決心した程だから、兎も角も其旨

お届けをしておけば可かつた、お届をせずにはやる果し合は是れは私し事、茲で急に勘助と果し合の約束があると言上が出来ない、典「ウーム、ヘエ……ハ、ッ」何を云つてるか分らない、義典膳、屹度申つけたぞ、典「畏りました」據らないからお請はしたか濟ぬ顔、高田左門が、左「宇田川、まことに御苦勞だが三日ばかりで宜しい、其内に拙者か松崎かで代る、三日は必らずやつて呉れ」是れは何だか曰くがありさうでございますなア、眉唾ものです、せ「全く眉唾ものに違ひないが主命は重い、勘助を討つためなら祿を返上してもとの言草は立つが、殿様御寢所へ曲者忍び入る、夫を防ぐために宿直を仰せつかつた、祿を放しても此宿直は出来ぬとは申されませぬ、其處でお請に及んで御殿内に止ることになつた、磯田はじめ四人の門弟共は、同じく殿様からの仰せとあつて、お木戸固めと云ふ名で、御殿内に止めさせられた、勿論一人一人来たのだから、外のものも同様な目にあつて居るとは聊か知らず、○「今頃は宇田川先生と共に外の奴等は山本退治にかゝつて居るだらうが、乃公ばかり這變目にあつて詰らない」と各自に思つて居ります、其内に三日は早くも過ぎて了ふ、戰國時代の大将は家來のために如何に心を用ゐたかは、上總介と宇田川典膳との關係でも分ります、楮山本勘助に於ては約束の時刻、室明神の境内に出張に及び、宇田川典膳今や來ると相待つて居るところへ、松崎、高田の兩人から使者が來て云々斯様と告知した、勘助、勘「イヤ壬

生殿は却々考への深いところがある、來ぬ奴を待つたとして爲方がない、夫では當地を發足しよう、其儘室明神から取つて返し、翌朝悠々として壬生を出立、其日宇都宮の御城下へ乗込んで來ました、然るに宇田川典膳は勘助出立後、二日經つて漸やく宿直御免の御沙汰で我屋敷へ戻る、磯田、金子、羽黒、石山の面々も同じ時刻に御用濟で退つて來た、一同殆ど狐にでも魅まれた様、退出になると早々に典膳の所に寄合をつける、典「高田、松崎の古狸に一杯食はされた、最う山本勘助風を食つて逃げ失せたらう」我々一同も尙且二杯も三杯も食はされた、山本も憎いが、此儘取逃して了へば松崎、高田の兩人が相手だ、旅のものに加勢して我々を出し抜くとは酷い、勘助の眇目立つたか立たぬか聞かせて見ろ、使ひを旅籠屋の佐野屋へ出して問合せると一昨日宇都宮へ參る、宇都宮に當分逗留するとの言置きにて出立したと云ふ、典「宇都宮へは五里足らず、勘助逗留とは天の與へ、各々宇都宮へ乗込もう」親の心子知らず、宇田川典膳主君の上總介殿、武士大將松崎右門等の心遣ひを思はず、山本勘助當地を立去つたと聞いて残念がり、如何にしても勘助を討たざれば武士の面目が立たぬと執念深き事蛇の様なもので、金子、羽黒、石山などと首を鳩めて相談すると、幸ひ宇都宮國綱の家來安住隼人助は磯田丈之助の遠き縁者、取敢えず磯田から安住のところへ使ひを出し山本勘助宇都宮へ乗込んだなら、同人の動靜を探つて委細知らして呉れるやうに、勘助に對

して我等はじめ多年師と頼んだところの宇田川典膳、深き怨みを抱いて、近日師弟五六十人揃つて出向き勘助と一ト勝負する積り、其節は何分お助力をお頼み申すと云ひ送つた、安住隼人助が考へたのは、隼五六十人押して来る、僅か二人のために其慶人數が来るとは間違ひだらう、是は五六のひと勘助と何か事が起つたのだ」と早合點、早速承知の趣を返答しておいて、山本勘助なる人は何處へ宿つて居るか、何れ武藝者なら御城中へ便宜を求めて這入つて来るだらうが、夫を待つてばかりも居られまいと、人を出して御城下を尋ねさせます、此方は山本勘助、宇都宮の御城下へ這入つて来て鶴屋淺五郎と云ふ旅籠屋へ着きました、此屋は其頃土地第一等の旅籠屋で却々な繁昌、家も廣いし屋敷も廣大、奥の離れ座敷へ通つて勘助旅の疲れを慰めました、其夜の真夜中頃、廁へ來つて勘助明放した小さな窓から不圖庭を眺めると庭には泉水築山が法の如くあつて、彼方に可なり大きな石燈籠、暗の夜であるから石燈籠から、光りが放つて薄々ながら其邊が見える、見て居る内に廊下の彼方の戸が一枚開かれて、パツと飛出した



のは若い女らしい、續いて一人男も出て來た、驚ハテな妙なものが夜中に飛出したぞ、女中共とお客の戯れならば庭へ出るにも及ぶまい、又女中と若い者なぞの出會ならば尙更の事、蒲團部屋もあらうし是程の大家、客の居らぬ座敷が幾つもあり、只の忍び合でないのは夫だけでも分るが、ハテ出奔でもする積りか：：ヤツ石燈籠の影で手に手を取合つて泣いて居る、是は何か仔細のあることに違ひない』勘助男女の情事に就ては一向不心得だが、雷ならぬ様子と見て取つたから忍び足で廊下を來た、五六間も來ると、彼等兩人が飛出した戸は其儘開放しになつて居ります、音せぬ様にソツと下り立、直ぐ傍にある離寢の許に身を隠して窺つて居ると、此處は斜に三四間で石燈籠途切れ／＼乍ら男女の話しが耳に這入つた、女、あ、情けない逆も此世では添はれぬ、思へば憎いは豪轉和尙：：』男、道ならぬ戀の冥罰は靦面、人を恨まう様もなし、此上はお阿喜様、



人目にかゝらぬ其内に一刻も早く「女」未來で添ふのを樂しみに、父上母様には不孝の罪、濟まぬことゝは知り乍ら何うぞ御勤辨下さいまし「四邊を探して石なぞを袂に入れて入れる様子」勤ハ「ア是は情死だな、大略そんなことだらうと思つたが、豈夫この泉水では飛込んだところで死ぬ譯にはならぬ、木の枝にかゝつて縊れ死ぬ積りかな、夫にしては石を拾つて袂へ入れたこれはチト妙だぞ」と思つて居るうちに、兩人の男女は足音を盗んで山の彼方へ參る様子、勤助も同じく足音を忍んで尾いて往くとは彼等は一方向心づきませぬ、泉水の橋を渡つて築山の蔭へ來ると、此處は石燈籠の光りも届かぬ暗いところ其處に大きな井戸がございます、井桁に捉まつた兩人。○「南無阿彌陀佛」法華宗は大分流行だが、斯様な場合に南無妙法蓮華經ではチト變でございませぬ、普通に死去た場合は南無妙法蓮華經ドンドコ、ドン／＼でも納りはつぐが、世を果敢なんでも自から死に就く場合は、南無阿彌陀佛でなくては哀れは催しませぬ、山本勤助木の蔭からバラ／＼飛出し、突如女を抱き止めた「女」アッ誰殿でございませぬか、死なねばならぬ譯があつて此の始末、お慈悲にお見のがし下さいませぬ様に……」振放さうとしたが、勤助に押へられては逆も如何することも出来ない、勤助女を捉まへたが、男は放任かしておく、幾ら山本でも木の枝からも竹の股からも出たのぢやアない、尙且助平根性があるから、女許り止めて男は放しておく、成るなら男ばかり飛込めば可い……とでも思つ

たかど、お疑ひでございませうが然うでない、情死の場合に一人が止められ、一人飛込む様なら情死でも何もありません、女が抱止められたから男は我知らず飛込むのを止めて「男」手前共兩人は、逆も生て居られる身でございませぬ、助けると思召てお殺し下さいまし「勤」アハ、生て居られる身が死ぬ筈はない、夫は當り前だ、何か仔細があつて死ぬと極めたのだらうが、死ぬとならば何時でも死ぬる、今夜でなければならぬとは思はれない、全體お前方は此宿屋の者か又は客人か「女」ハイ手前は當鶴屋の娘阿喜と申すものでございませぬ、是れは親類であり永年店で番頭の役を勤め、今日では帳場を預つて居る清三郎と申す者「勤」ハ、ア兩人一ツところに居て何時か乳繰合つたな、親の許さぬ不義淫弄を働いた爲、面目なくて死ぬのだらう「男」イエ決して左様の儀ではございませぬ、何れ斯うして死なうとするのでございませぬから二人の仲は二世も三世も變るな變らない、骨がなければ一ツにならう……「勤」これこれ惚氣るとは不埒、左様の儀はないと云つても、左様な儀があるから畢竟生命を捨て、詫をしようと思ふのだらう「男」夫が違つて居ります、手前とお阿喜殿とは從弟同士、旦那なり伯父なりの淺五郎様が、兼ねて似合の夫婦、外に男の子はなし、清三郎はお阿喜の婿として此家を譲つてやると仰せがあり、お阿喜殿は勿論其心、手前も婚禮の日を樂んで居りました所、雀の宮に轉得寺と云ふ寺がございませぬ、和尙の豪轉坊主が此お阿喜殿に横懸幕をして

是非妾にと望まれました、さうなつては逆も兩人添ふ事は出来ませぬ、浮世をはかなんで此始末に及んだのでございます」鶴何だ馬鹿々々しい、夫ならば別に死ぬにも及ばぬぢやないか、亭主の浅五郎も貴様を養子にする積りなら、其轉得寺の坊主を断れば事が済む」男と云ふが然う参りませぬ、豪轉和尚と云ふのは出家は表向き、其實は子分の百人も持った此界隈の無頼漢、加之に力が三十人力もあつて寺のうちに道場を構え、乾兒のものに劍術を仕込んで夫に亂暴を働かせて居ります、若しお阿喜殿が参らぬと申せば、豪轉和尚乾兒を連れて乗込んで参り、無理にも引取つて参るでございませう、爾なれば斯様な大屋臺もメチャ／＼に打毀されて了ひます、夫故和尚から申入れれば嫌と云ふことが出来ませぬ」勘ハ、ア坊主の身をもつて女を辱かしめ、劍を舞はし酒に親しむとは憎い奴：イヤ左様なものは後來の警しめにもなる、拙者が向つて娘は思ひ切らして参る、安心して死ぬのは止める」鶴ヘエ御親切は有難うございますが、先々夫はお断りに致します、貴下がお向ひなされた所で豪轉和尚に敵うものではない、返り討ちになつた其跡で手前共が又死ぬとなると、貴下を殺しただけか却つて損になります、切角ではありませんが、黙つて手前達をお殺し下すつた方が、貴下のお徳でございませぬ、お阿喜殿覺悟をしてね」天下の豪傑山本勘助も、背が小さい眼が片ツ方、意氣は昂らず人物が安ッポイから、宿屋の番頭情死男に迄見限られて了つた、どうして

も人間には威容が備つてをらぬと損でございませぬ、勘助少しく憤然として「此郎野人を見損なつて居るか、斯う見えても拙者は三州牛久保の住人山本勘助と申すものだ、豪轉坊主幾ら強くとも拙者の敵ではない、兎に角思ひ直して亭主とも相談するから此方へ来い」男「イエエ最うお構ひ下さいますな、手前共は打捨つてお寝み下さいます」鶴「まだ強情を吐してをるか、其儀ならば：」と云ふと清三郎の襟首を掴んでグツと引寄せると忽ち右手に抱へ込む、左手にはお阿喜を抱へて軽々と元の廊下口へ来た、鶴亭主々々：「家内のもの出會なさい、椿事出来致した、亭主は居ぬか、家内のものは如何した」と大聲に呼立てた、勘助今夜来たばかり、此の家の勝手が一向判りませぬ、兩人の奴等は死なうと云つて居て面倒だ、亭主を呼起してと思つて、大聲に呼んだのでございませぬ、〇「忠吉なんだらう、大層呼んでるが」忠「又作さん先刻から私しは目が覺めて居る、奥庭の方で人聲がしたから、夜具を頭からスツポリ冠つて寝た態をして居るのだ、多分大盗賊が来たのだらう、下手に聲を出す其處へ一番先にやつて来て、高手小手に縛り上げる、金は何處にある、亭主は何處に寝て居る、何と尋ねられる、狼狽と長い奴を目の先へ突付けられる、生命あつての物種黙つて居ねえよ」横着な奴等で知つて居ながら奉公人は蒲團を頭から冠つて知らぬ振り：「女中のおつぎと云ふが寢惚けて、女」早立ちでございませぬか、ハイ、畏りました、只今々々」何

と云ふかと思へば、傍ではギリギリと齒切り等をして居る、此時亭主の淺五郎、フ
 ト眼を覺した淺「お喜和〜」喜「ハイ」淺「何か騒がしいなア、盜賊でも這入つた様子だ」
 喜「貴下お怪我をなさつてはなりません」淺「イヤ大丈夫、有金をやり何でも怒しいものを持
 つて行けと云つて居れば、豈夫生命まで奪らうとは云ふまい」喜「貴下は夫れでも手前は困り
 ます、賊なぞは女と見ると淫猥しいことを持かけます」淺「お前の様な婆アさんは幾ら賊でも
 物好きな馬鹿な真似をするものか、夫より女中共に氣をつけてやらぬと」喜「貴下は女中々々
 と仰有つて近頃来たお君に思召がある様でございます、油断も隙もあつたものぢやアない」
 淺「巫山戯るな、今賊が這入つた所で嫉妬なぞを」夫婦喧嘩がオツ始まる、氣樂な話した、
 亭主の淺五郎帯を締直し、道中差を一本もつてブル〜顛えながら廊下へ出て来る、廊下の
 隅には金網のかゝつた行燈がございませぬ、其光りで見ると、左右に何か抱へてノソリ
 ノソリと勘助が此方をさして来る様子、淺「成程盜賊は手が早い、最う土藏へ這入つて品物を
 出して来た」清三郎とお阿喜を品物と心得て居る、勘「ヤア貴様は亭主だな」淺「アッ先刻お泊
 りの旦那様でございませぬか、金子は有だけ差上げます、生命許りは…」勘「金子なぞは誰が
 要ると申した、生命を二ツ拾つてやつた」淺「ヤッ清三郎とお阿喜」喜「旦那様まことに申すは
 ございませぬ」阿父さん事情が事情でございませぬから、遂に死ぬ氣になりました」勘「アイ

ヤ御亭主、拙者廁へ來つて小窓から外を覗くと是なる兩人が怪しき様子、何事をするかと庭
 へ出て見ると、泉水の彼方の大きな井戸へ兩人身を投げて死なんとする、仔細は分らねど抱
 止めて生命は拾つてやつた、聞及べば雀の宮の轉得寺の豪傑とやら云ふ和尚が是なる婦人に
 戀慕して妾に欲しいといひ込んだとやら、明朝に至れば我等和尚に逢つて其不心得を論し、
 娘のことは思ひ切らしてやる、是から花も咲かう實も熟らうと云ふ兩人、井戸の中へ葬つた
 ところで爲方がない、心得違ひない様よく話してやるが宜い、拙者を馬鹿にしをて不可
 ぬ」と笑ひながらに云ふ。

(第十九席) 勘助豪轉和尚を取つて押へる事、並に典膳の使者豪轉を

説く事

鶴屋淺五郎豪轉和尚の難題に誰か助ける豪傑の侍はないかと、心私かに願つて居たところ
 計らず清三郎とお阿喜の情死一條から山本勘助と言ふ豪傑の助けを得たのは仕合せ、併し前
 申上げし通り勘助は風采の上らぬ小男、此人口では大きなことをいふが、豪轉和尚は三十人
 力誰あつて此坊主の向ふへ廻る勇者はない、巧く話しが纏まりはしまいが、折角親切に云つ
 て呉れる事を断はるも變だ、何分頼むと其晩は淺五郎夫婦が、清三郎、お阿喜の不心得を懇

懇諭して寝て了ふ、翌朝になると早く飯を終つて山本勘助、手轉に身支度をして鐵扇携へ店先へ出て参つた。勘亭主はより雀の宮へ参る、誰か案内を致して呉れる様に「淺」これは旦那様、昨晩は誠に御親切様、お蔭で娘と番頭の命が助かりました、只今御挨拶に上るところでございましたが、遂朝立のお客が澤山で遅なはりましたでございます、まだお早いではございませぬか」勘「イヤ若いところの兩人、定めしクヨクと心配致してをらう、一刻も早く安心させてやりたい、又坊主留守にでもなるとならぬ、直に誰か供を致すよう」淺「畏りました」と云つてるところへ夜前の清三郎が面目なげに出て来て、淺先生お早うございます、昨晩はまことに難有うございました」勘「ウム貴様清三郎とか申したな、拙者は是から雀の宮へ罷越す、貴様案内をして参つて呉れ」淺「へエ有難うございます、夫では手前が御供を仕ります、どうか充分にお掛合を願ひます」勘「よし、早く支度致せ」淺「へエ」清三郎直様支度をして供に立ち、宇都の宮の御城下を離れて雀の宮へやつて参つた、見ると可なりの寺であるが、庫裡の此方を見ると一棟劍術の稽古場が建つてあつて、中では二三十人の人代るゝ立合をして居る掛聲が聞えます、勘「頼む」勘「へエ、何れから」小坊主が出て参つた、勘「拙者は諸國修行の者だ、三州牛久保の住人で山本勘助、豪轉和尚お在でならば一ト手合所望に参つたと取次いで呉れ」勘「暫く……」小坊主が奥へ走つたが忽ち出て来た。勘「御立合の儀承知仕り

ました、道場へお通り下さいまし、御案内を致す」勘「左様か」勘助は道場へ通る、清三郎は庫裡の上り櫃に腰を掛けて、煙草を喫つて居たが、淺「お小僧さん」小「何んだ」淺「和尚さんは劍術は強いかね」小「強い何のつて、毎日一人二人は修行者が尋ねて来るが誰だつてお師匠さんに敵ふものはない、力が三十人力で一ツ叩かれたものなら眼の球は飛出すし、骨は粉なごなになつて終ふ」淺「ホ、ウ夫では評判通り強いんだね、シテお妾さんが幾人もあるとの事だつたが、何人位あるかね」小「夫れは五人あつたが、皆昨日暇を出して了つた」淺「昨日……何で一時に暇を出したのだね」小「新らしく一人来る、夫は御城下の宿屋の娘でお阿喜さんと云のだ、夫が大層美しい女で、御師匠さんはお阿喜さへあれば外の女は要らぬ、最う明日明後日連れて来るから皆暇を出して了つた」淺「六人のお妾の代りを一人で勤めるのかな、夫りやア大變だ」小「御師匠さんは女好き、夜も晝も代るゝ、傍へ引つけて可愛がるのだよ」淺「蛸入道の餌食とは情ない、尙且昨晩の通りになつて了つた方が仕合だつたかも知れない」小「お前お阿喜さんを見たかえ全く美しい女だ、あれ位の美人は宇都宮廣しと雖も二人とはあるまい、御師匠さんは果報者だなア」淺「お小僧、羨しいか、お前の年は幾つだ」小「十四だよ、好い女を見れば小僧だつて變な氣持になる」勇將の許に弱卒なし、豪轉和尚に使はれて居るお小僧、小供の癖に最う色氣が澤山だ、清三郎お小僧と話しはして居るが、實に氣が

氣ではありませぬ、山本勘助といふ修行者、巧く此話しを破つて呉れ、ば可いが、夫にしても来ると直に試合を申込んだ様だ、其慶立合をするのだらうと、庫裡を出て横手の方、稽古所の武者窓のところへ来ると最う試合も始つたのか竹刀の音が致します、幸ひ其處に醬油の明樽が一本轉がつて居る、夫れを足代に上つて見ると武者窓から中が見えます、見ると山本の勘助の小男鐵扇を片手に立上つて居る、相手は豪轉和尚の弟子と見えて、二十五六歳の血氣の青坊主：青い面をして居るから青坊主、これが向ふへ廻つて「青ヤツヤ、ツ」大汗をダクダク流し、竹刀を大上段に振冠つて勘助の隙を見て居るが、勘助はニヤリ／＼笑ひながら鐵扇を中段につけて居るばかり、寸分の隙もない、勘ハ、ア是れは高の知れた腕前だ、ヤ、ツ」少し隙を見せると、先刻より血眼になつて隙を覗つて居たところだ、誘ひの隙だと悟ることが出来ませぬ、青「ヤツ」と意氣込んで打込んで来るところを、ヒラリ體を躲した其早さ青坊主力餘つて稽古所の板の上をウムと撲つた、勘助體を轉じて其儘ヒラリ鐵扇が舞ふよと見る間に、青坊主の右の腕をビシリツ：一ツ、青「アツ參つた」後へ飛出したのが背のズングリした赤坊主、其後が鐵壺眼に眞黒な黒坊主、勘「豪轉和尚の五色の備へが、青に赤に黒この次は黄色いのか、勝負は早い方が可いドシ／＼出ろ」大言を拂ひながら出る奴も出る奴も片ツ端から打込んで了つた、以上八人枕を並べて討死の有様、豪轉和尚一段高きところにあ

つて、此様子を見て居たが、勘「小癩なり修行者、イデ我手並を見せて呉れん」とバラ／＼真中へ飛んで下りた、勘「山本氏今度こそは手前がお立合仕る」勘「出たな、愈々蝸入道が出たなア、助平和尙の豪轉坊サア來なさい」勘「助平和尙とは怪しからん一言」勘「助平だから助平と申したのだ、夫とも助平でない」と云ふのか、勘「不埒なことを吐す、出家は女色を五戒の一ツにして居る、助平とは何んだ」勘「あは、眞面目に其慶ことを云はるゝか、よし去らば和尙其許と賭を致さう、拙者の腕前が和尙より上に打込むことが出来たら、必らずとも五戒を守つて女は犯さぬと約束をしる」勘「何そんなことは譯のないことだ、萬一其許におくれを取れば如何にも五戒を守つて女を犯すことを止めに致さう、其代り拙者が勝つたら何とする」勘「ウム和尙が勝つたらば：：：サア夫は約束に及ばぬ、斯く云ふ山本勘助が勝つと極つて居る」勘「巫山戯た事を云はつしやい、愚僧生れながらにして三十人力を有し、劍道に於ても充分に修行を致し、尋ねて來る武者修行一人として我等に勝つ者はない、愚僧が勝つと極つて居る、勝つた時は何とする、サア其賭物を出さつしやい、愚僧は如何にも約束通り女犯はせぬと賭けた、其許は何を賭る」勘「さうだなア、差當つて賭るものが：：あゝあるぞ大有りだ萬一拙者が負となつたらば御城下旅館屋鶴屋淺五郎の娘お阿喜、これを速かに献じ様」勘「えエツお阿喜を：」勘「豪轉坊も大きに驚いた、偕は鶴屋に頼まれて阿喜の破談に來た奴だな、

此奴憎さも憎し、此眇目横着此上なしの野郎だ、其儀ならば目に物見せて呉れんと立上つた
 豪「お阿喜を賭物にするとは面白い、勝負あつた後は兎や角を云はせぬぞよ」武者窓から覗
 いて居た清三郎も驚いた、眇目大變なことを云ひ出した、是ぢやアお阿喜さんの破談に來
 たのだから、縁を纏めに來たのだから分つたものぢやアない、山本の小男可い按排に弟子坊主に
 は勝つたが、豪轉和尚は容易ならぬ奴だ、今迄の様には行くまい、何しろ勝つて呉れねば大
 變だ」氣を揉むのは當り前：豪轉和尚も急き込んだ、豪「これが一番の勝負だ、お阿喜が我
 物になるか人の物になるかの境目、豪いことになつたものだが、何此の小男我等の前に立つ
 て何が出来るか」竹刀を取つて、豪「ヤツ」と構へる、勤「ヤ、ツ」勤助は相も變らず鐵扇を中
 段に取つた、六尺鏡かの大坊主と五尺に足らぬ小男の立合、暫くは雙方氣を計つてをりまし
 たが、豪轉坊如何なる隙や見出しけん、一聲叫んで打おろしたる木劍は、流石の山本勤助も
 木ツ葉微塵と思ひの外、ヒラリツと飛退いた勤助、勤「ヤツ」と云ふと木劍の先を刎ね上げた、
 豪轉坊もしれ者、打込んだ木劍を引く間もなく、再び叫んで横なぐりにブーン、風を切つて
 來るやつをヒヨイと飛上つて空を切らせた、成程豪轉坊は力量人に優れ、誰にも打負けたこ
 とはないと自慢を云ふだけあつて、如何して、劍法は實に非凡なもの、流石の勤助も大き
 に感心する位の腕前、暫くは打ちつ打たれつ互ひに優劣なく立合つて居たが、劍道に功を經

たものは永く立合へば立會ふ程、精神愈々加はり勇氣益々奮つて來る、同じ腕前の様に見えて
 も豪いやつは永びく程可いが、弱い方は永くなればなる程汗がダク、で眼が暗んで來る、
 立合ふこと稍一刻ばかり、勤助の方は弱らないが大入道は大分疲れて來た、額に油汗が浸潤
 で來て息遣ひが荒くなつた、此時豪轉も氣がつく、此奴男は小さいが大した腕前、此儘愚圖
 愚圖して居れば氣根が疲れて負になつて了ふ、何でも彼でも打込まねばと、豪「ヤツ、ヤ、ツ」
 電光石火の如く激しく振込んだ、勤助に於てもチャンチャンと鐵扇を合せ、又々打合ふ事稍
 五六合、豪轉が苛つて打込んだ木劍を體を開いて置いて、鐵扇に力を籠め其木劍をバツと打
 つ、打たれては耐らぬ、豪轉持つたる木劍をポロリ取り落した、豪「南無三、失敗つた：」
 大坊主參つたと云ふかと思ふと、失敗たと云つたが參つたとは云はない、強情な様だが無理
 もない話して、參つたと云つて了へば大事の、お阿喜を取られて了ふ、五人もあつた妻を
 追出して今日にも入れる積りのお阿喜を他人に取られては大變だ、之は一世の浮沈とも思ふ
 位だから參つたとは云はない、木劍を取落した儘勤助にムンズと組付いた、三十人力の糞力
 で小男一ト捻りと云ふ積り、勤助に於ても不意に組つかれたが其糞事にぬかつては居ない、
 忽ち組合つて上になり下になり、豪「エンヤ」勤「エンヤ」と揉合つた、勤助小男だが力量も相
 當にある、併し三十人力の和尙程はないが、組打も一種の術だ、力量許りあつても必らず勝

る譯のものではない、其内に勘助「勘ヤツ」と云ふと大坊主を組敷いた、豪轉が「ウムウム」牛の迂鳴る様な聲を出す術で押へつけられたのでは致し方がない、勘坊主如何だサア参つたと云へ、参つたを云はなければ首を捻切るぞ」豪「ウム、何の糞」幾ら藻掻いても迎も跳返す事が出来ませぬ、勘「どうだ坊主」豪「ウーム、残念」勘「残念では不可ぬ、参つたか参らぬか」豪「マ、まゐつ…」勘「タが足りない、判然云へ」豪「参つた、参つた」勘「確と参つたなア、先刻の約束は宜しいか」豪「アツ苦しい、ド豪い目にあつたものだ、生れて始めて斯度目にあつた」勘「先刻の約束、五戒の一女犯は決してしない、女は思ひ切ると云ふことは可いか」豪「仕方がない、女犯はやらない」勘「お阿喜に指でもさゝぬな」豪「オヤ、」勘「オヤ、」があるかお阿喜に未練は残さぬ、何處へ嫁入つても差支へないなア」豪「どうでも勝手にしろ、愚僧に用はない」これを聞くと武者窓に覗いて様子を見て居た清三郎、躍り上つ



て「清」嬉しい、難有いなア、山本先生ッ」踊り狂つた拍子に乗つて居た醤油樽が顛覆り、スツテンコロリ、豪轉和尚は稽古所の板敷に両手を突いて「豪」倍々驚き入つた御修行者のお腕前、豪轉今日まで斯様な御人に出會つた事がない、其許は全く人間か」羽黒か二荒の山奥から出た天狗だと思つて居る、勘「アハ、ハ、ハ、イヤ和尚も隅には置けない腕前だ、拙者は先刻も申入れた三州牛久保の山本勘助と云ふものに違ひない」豪「實にお美事なるお腕前、斯様の豪傑のお尋ねに預つたのは愚僧の仕合、先々一献差上げたい、此方へお通り下さい御案内仕る」勘「和尚氣の毒だなア、劍術に負したり女の關係を断したり、其上馳走になぞなつては」勘「どう仕りましたサア、」豪「供を待たしてある、酒の馳走に與ると云へば手間取れる」豪「イヤお手間は取らせません、直ぐに」勘「イヤ、酒を出すのは手間は取れまいが、拙者が飲むとなると容易では止めない、夫故手間取るから供は先へ歸さう」豪「マア供の奴にも一杯やります、宜しいではござらんか」勘「イヤ、夫には及ばぬ、拙者と一所に馳走になれば、二日ばかり三日がかりになるかも知れん」豪「大層召上ると見えますな」勘「さうさ酒ならば、臺を出したなりで五七日位は飲續ける」豪「ヘエ夫では酒の方でも大の豪傑で」勘「勿論さうだ」勘助稽古所から来て見ると清三郎の姿は見えない、庫裡へ来て小坊主に聞いて見ると何だか醤油樽から轉がり落ち、顔を摺割き手足に疵が出来、血眼になつて下駄を脱放して

飛出したと云ふ、是れは清三郎勘助のやうな小男が大入道に勝てる氣支ひないと思つて居た處が、美事に勝を制したばかりでなくお阿喜の縁談も巧く打破つて呉れたので、最う夢中になつて勘助には一言の挨拶もせず、ドン／＼／＼鶴屋へ飛歸つたのでございます、家内の者が見ると額から血が染潤で居る手足に摺割きがある、亭主の浅五郎出て見て驚いた、清三郎如何したのだ、清、え、ッ大變で、何、大變ッ、何が大變になつた、清、え、手前が大變になりましたので、清、確乎しろ、大變とは怎麼ことだ、清、醬油樽から眞逆様に落ちたので大變な目にあひました、清、何を云つてやがる、大變だと云ふから驚いた、貴様が醬油樽の上から落たとて、大變な事が何處にある、清、今になつて手足がズキ／＼痛んで來ます、清、御修業者は如何した、御修行者のことばかり一同で心配して居たのだ、どうなつた、清、夫が其の、ホン／＼ヤアヤ、アツと云ふのでございまして、清、不可んなア、清三郎は氣が怪しくなつた様だぞ、清、全く氣も怪しくなる位のもので、其の嬉しさと云ふものは我ながら分つたものでありませぬ、清、愈々如何かした、清三郎確乎しろ、清、へエ、チャンと此の通りお膝に手を置いて確乎して居ます、誠にお目出たう、是でお阿喜さんも助ければ手前も死ななくつて可い助かりました、清、シテ見れば先生のお掛合が巧く參つたのか、清、その參つたを和尚め云はないので、ボン／＼／＼試合が組打となつたので、修行者が大入道を取つて押へてサア坊主お

阿喜を思ひ切るか、參つたと云へ、參つたと云はずお阿喜を思ひ切らぬならば坑主ッ首を捻切るぞツと、力んだところは芝居でも見られぬ圖でございました、どうも豪い事で、清、あ、夫では御修行者の山本先生は、豪轉和尚と試合をなすつて美事にお勝ちになり、其場でお阿喜のことを話して下すつたのだなア、清、爾でございませぬ、和尚めあの大きな面を膨らしなから參つた、お阿喜は思ひ切ると申しました、其面ツたらなかつた、ヤレ嬉しやと思はず跳り上つたので、乗つて居た醬油樽が顛覆つて怪我をしました、前後顛倒ながら、清三郎事の概略を述べた、鶴屋浅五郎はじめ女房、お阿喜は尚更喜ぶこと限りはありませぬ、清、清三郎、貴様御修行者に斷つて戻つて來たか、清、餘り嬉しかつたものですから、夢中になつて飛歸りました、何とも斷はらずに、清、夫は不都合千萬、デハ乃公がお迎へに往つて來よう、迎もあの御人體では豪轉和尚にお勝になる筈はないと、内心馬鹿にして居たのは乃公の誤り、あれはことによると羽黒山の大天狗小天狗の内、人助けのために此處へ姿を現したのかも知れない、爾と分つたなら乃公がお供をすれば可かつた、狡い奴で亭主は始めて勘助の凡人ならぬを知つた、羽織を引掛け供を連れて亭主浅五郎雀の宮へやつて來た、大分時刻が遅れて居るから迎も大先生は轉得寺にお在なざるものでないとは思つたが、他を尋ねる方角もないのだから轉得寺へ來て聞いて見ると、大先生の山本勘助、羽黒山へ舞戻るところぢやアない、

豪轉和尚と奥の室で酒宴の最中、ヤレ嬉しやと其儘庫裡の方で待つて居ると、何時まで経つても酒は止まない、納所坊主を捉まへて淺五郎、和尚大層酒を運ぶが、お客は山本先生の外に誰々が来て居なさるね、納所も外には居ない、師匠と修行者だけだ、お二人で其處に召上れるのかね、納所何しろ寺の師匠は晩酌が五升、客でもあると七升位はやるが、小男の修行者腕も強いが酒も強いには驚いた、是れで最う一斗五升の酒を出し切つたが、飲むは飲むは長鯨の百川を吸ふと云はうか、夫は鯨ほど大きな身體ならば飲めるが、小男の癖に大鯨を真似て何處へ酒が入るのか、手品でも使つて居やアしないか、夫とも羽黒天狗か二荒天狗が修行者に化けて来て居るのではないかと思ふ位だ、羨、ハア羽黒天狗二荒天狗：道理で旅荷物の中に羽團扇が仕舞つてある様だ、納所ハテね羽團扇があつたかね、夫では最う天狗に違ひない、庫裡のうちで勘助を天狗にして了つた、此方は勘助豪轉和尚と差向ひで大きに飲んだ、兩人で二斗以上も飲んだらう、豪轉もグテンとくなれば、勘助も大きに酩酊して、勘住持今日は殊の外馳走になつた、是で暇を致す、羨、マアよいではござらんか、今夜は泊つて明日緩々飲んで、勘、さうもしてをられん、まだ宇都宮には半月位は居る、折々飲みに来るから其節は頼む、羨、イヤ何時でも来て貰ひたい、愚僧も今少し劍術の奥儀をも習ひたいから、来て下されば此上もない喜びだ、勘、餘り喜びでもあるまいが、迷惑でも構つたことはな

い、氣の向いた時には押込んで来る、羨、どうしても戻られるか、勘、勿論歸る、暇をして立出でると、鶴屋の亭主がヒョコ、頭を下げて待つて居る、勘助可い心持ちになつて亭主を供に連れ、宇都宮の御城下へ戻つて来る、鶴屋の家では羽黒天狗の御歸りと云ふので、清三郎お阿喜を始め下女下男に至るまで、地盤へ飛おり土下座を突いて迎へ入れる、サア是からは勘助は生命の親なり大した先生とあつて下にも置かず執持ちます、此話しは忽ち宇都宮御城下の評判となる、御城中へも聞えましたから彼の安住隼人之助、取敢へず壬生の磯田丈之助のところへ知らせる、丈之助から宇田川典膳、典膳から門人一同へ知らせ、又々大寄合をして勘助を討つ評議を始めた、時に磯田丈之助が、丈、諸皆様を差置いて手前から發議するは異なるものだが、山本の眇目宇都宮に於て右様のことのあつたのは幸ひ、雀宮の轉得寺の和尚豪轉、これを味方に抱き込み、和尚と共に討つたならば誠に都合が可いと思ふ、和尚だとて勘助のために打込まれ、己れの好いた女を奪はれたも同じ事、必らず勘助を恨んで居るに違ひない、豪轉和尚を味方とする計略は如何でござるな、一座を見廻して進み出た、宇田川典膳小膝をハタと打ち、典、磯田よいところへ心づいた、寺の坊主が町家の娘に懸想すると云ふは、是れは只の坊主でないことが分る、巧く持込めば寄合つて勘助の眇目を討つのに加擔するは知れて居る、誰か雀の宮へ行つて豪轉坊主を抱込んで来るものはないか」と云ふと羽

黒甚兵衛が「羽」此の役は手前に心得がある一ツ
 参つて見ませう」典「羽黒お前往つて呉れるか、
 お前なら辯舌もよし、何とか巧く丸める事が出
 来るだらう」其處で典膳は土産物と路用の金と
 を與へて、羽黒甚兵衛が雀の宮へ参る事となり
 ました、甚兵衛乗込んで来て見ると、轉得寺は
 却々立派な寺院、豪轉が恐ろしい強さうな人物
 大きに喜んで土産物を出し、武藝の話などを
 して様子を見ると前申上げる通り、諸國修行者
 には誰にも敗けた事がない位の豪い坊さん、羽
 黒甚兵衛此坊主を味方にすれば大きに心強いと
 喜んで、甚僧御住持へお願ひがあつて罷越した
 が、承はれば和尚には三州の旅鴉山本勘助に
 試合の上でお負けなすつて、加之に思ふ女を横
 奪にされたとの事でございますが、果して夫は



全くの事でございませうか」兼「ア爾う露骨に云はれては坊主頭の隠しどころがない、面目な
 い話し残念なことではあるが、勘助にはドウも敵はない」甚其處でござる、手前の師匠壬生
 の宇田川典膳も彼れのために辛い目にあひ、誠にハヤ残念と存じてをります、遠く壬生から
 出張しても此恥辱は雪ぎたいの考へ、勿論手前の方には師匠と共に生命かけてやりませうも
 のが五六十人もござる、皆連判の上で主人から暇を取つても恥辱を雪ぐと決心した程で、便
 宜を得れば今日でも當宇都宮へ乗込む手筈、和尚が鶴屋の娘は思ひ切り山本勘助に心から降
 参したもものなら、御相談にはならぬが萬一勘助を恨むお積りがあるなら、手前の師匠と一處
 になつて事をして下さるまいか」と智辯を振つて持かけた、豪轉和尚坊主頭をツルリと撫で
 兼「イヤ連判状をつくり御扶持に離れても山本を討ちたい、ウ、ム夫は豪い決心をしたもの
 だな、愚僧も何を隠さう鶴屋のお阿喜思ひ切るとは云つた様なもの、實はあれ程の美人は外
 にない、眼を瞑つても姿が眼の中へ轉がり込んで居て忘れることがならん、ト云つて一旦言
 出したことだ、思ひ切ると云つた上は未憐らしいことも云へぬ、夫がため堪えては居るが殘
 念でならぬ、お前の方に勘助を殺さうとの計畫があれば愚僧も其仲間へ這入つても可い、併
 し勘助の腕前は容易なものでないせ」甚それは勿論典膳も存じてをります、ダガ幾ら強いと
 云つたところで向ふは勘助一人、師匠の方は五六十人も必死を決めたものがございます、一

體壬生で討取つて了ふところでしたが、殿様が其手筈を探つたものと見え、大將分のものでお傍へ引つけて置いて其跡で勘助を出立させて了つた、斯う云ふ譯で壬生では討取ることが出来なかつたのだが、愈々和尚がお味方下されば、五六十人當地迄押出して来て必らず初一念を通さなくてはなりません」豪「ウム敵は一人、味方は五六十人、枯木も山の賑ひ、木ツ葉武者でも五六十は頭数だ、夫だけ来るとならば如何にもやらう」豪い坊主で壬生の武士を枯木や木ツ葉にして了つた、羽黒甚兵衛大いに喜び、然ればお味方相違ござらぬア」豪「相違ないとも愚僧は坊主だ、まだ頭髪と嘘言とは云つたことがない」甚夫は忝ない、デハ手筈は如何致したもので」豪「愚僧の寺は此通り廣い、兎も角も勘助を討つと云ふ連中は皆忍んで愚僧の寺へ来るが可い、来た上で宇田川典膳の手並を見、成程となつたら討つ手筈をしよう」オヤチト變だぞ、成程となれなかつたら約束は反古か。

(第二十席) 鶴屋主從勘助へ大事を知らせに来る事、并に典膳鶴屋主從を脅迫する事

豪轉和尚と羽黒甚兵衛は尚勘助を討つに就いての相談をなし、甚兵衛使命を果したのだから喜んで立歸る、典膳も豪轉和尚の強い様子を聞き、大きに力を得て直様支度をなし、三人五

人づゝ段々と雀宮の轉得寺へ集つて来る、豪轉和尚典膳に會つて見ると典膳も一流を窮めた人物、こゝで双方打解けて勘助を計る相談を致しました、三日と経たぬうちに轉得寺へは典膳同志の面々が五十人ばかり集つた、是ならば大丈夫と見込をつけて和尚から勘助を迎ひにやる、勘助はかゝる企みがあるとは聊かも存じませぬ、今鶴屋の亭主と茶を飲んで何か話して居るところへ清三郎が来て、さうか」清「これを差上げて、お返事を承はつて参りたいとお待申してをります」勘助差出した手紙を開いて見ると、今日は幸ひ強酒の客人が参つて大きに飲まんと云ふ話し、お差支なくば直様お出を願ふ、何れとも返事を呉れるとの事でござります」勘「ハ、ア和尚は餘程の酒豪だ、酒豪には又酒豪の相手があるものだ、先日の酒戦拙者より先へ参つたから、今日は酒豪を引張り出して其仇を討たうといふ趣向だな、敵に聲を掛られて後逸巡する勘助ならず、イヤ参ると申して使ひは歸して呉れ」清「ハアお出掛けになりますか」勘「ウム行つて来る」亭主が、亭「先生は家にお出なされた時は一向に召上りませぬが、豪轉和尚と飲む時は、却々の大酒と伺ひました、今日はお断りなすつて手前方で底の抜ける迄召上つては如何、随分先生のお相手になる様な酒飲みを狩集めて見ますから」勘「あは、イヤ酒は尚且豪轉位な面白い坊主と飲む方が可い、まあ往つて来るとしよう」亭「左様でござりますか夫では誰かお供を」

勘「イヤ〜供などは要らぬ、今日はトモすると寺へ泊ることになるかも知れぬ、晩くなつたら待たずに寝んで呉れる様、決して心配はいらぬ」豪氣な勘助其儘迎ひに来た男と一所に宇都宮を立出でましたのが、彼是四刻半只今の午前十一時頃でございませう、然るに勘助が出ると間もなく鶴屋へ来たのが壬生の商人で鶴屋とは心易い人物、商「鶴屋さん暫く御不沙汰を致しました」亭「されば壬生でよく出掛けなすつた」商「晝にはチト早い、用の都合だ、どうか御飯を下さい」亭「畏りました、只今：今年はチト不順だが御地の方は作物はどうだね」商「イヤ何うも不順でまことに困る、百姓達などは不思議と此不順の



天氣を喜んで居る」亭「へエ妙ですなア、天氣が不順では作物の穫れが悪いだらうに」商「夫が御承知の通り、此二三年は豊作つゞきで米は澤山にあるので値段が安い、今年あたり不作で呉れると値が上がる、收穫は少しくても金にすれば同じ高になつて、夫で貯への米も共に値が上るので、腹勘定がよくなる、少し不作で呉れれば可いと祈つて居る位」亭「ハ、ア謂れを聞いても餘り難有くない話したが、マアお百姓になつたら其慶氣もするだらう、時に壬生の方に珍らしい話はないかね」商「別段これと云ふ事もないが、御家中に一つ騒動が出来た、五六十人の方々が宇田川典膳様と云ふ槍の名人を筆頭に、山本勘助と云ふ眇目を殺さうと、遂に二三日前脱走して宇都宮へ来たとの事で、夫がため御家中は上を下へと騒いで居る」亭「へエ山本先生を殺すために其慶大勢が徒黨して宇都宮へ乗込んだ、夫は大變ッ」と亭主は家内のものと顔を見合せた、商「何でも雀の宮の大きな寺の坊主が、一ツ腹になつて勘助を討つさうだが、勘助が幾ら強かつて、五六十人の人にあつちやア敵ふものぢやない」亭「何ですつて雀の宮の坊主が」と亭主愈々驚く、商「さうさ、其雀の宮の坊主と云ふのは是も随分強いさうだ、豪轉と云ふちやア御當地の方も慄毛を振つてると云ふぢやないか」亭「そりやア大變だ」商「お前さん坊さんを御存じだらう」亭「イヤ坊主などは如何なつたつて構はねえが、山本先生に怪我があつては申譯ない、清三郎〜サア支度しろ、乃公と一所に雀宮まで行け、坊

お在なさる、少し待て、御酒を上つて居る時に、外の用を持込むと気が抜けて不可ぬもの
 だ」邊そんなことは云つて居られない急用で……鳥渡で宜しうございますから」西「急用ツて
 云つたところで旅のお方だ、親が死ぬでもなければ子が死ぬ譯でもあるまい」邊「お寺だと思
 つて死ぬことばかり考へて居るが、死ぬ外にも急用は幾らもある」丁「今に取次いで上げる、
 待つて居るが宜い」坊主ども一向動きさうもございませぬ、亭主はヤキモキして居たが、邊「ハ
 テな是りやア愈々可怪ぞ、斯う澤山に酒を運んで居るが、豪轉和尚どうも満足な人間でない
 奸智に長けた奴だから、動もすると酒の中へ毒でも打込んで飲ませるのではないか、よく聞
 く話だが麻痺薬を飲まして置いて殺す、是は卑怯千萬な様でも坊主め先生には敵はぬと覺悟
 して居る程だから、卑怯と笑はれても爲り兼ねはしないぞ」益々氣が急いで来た、其處で一
 人の坊主を小蔭へ呼んで、豪「こりやアお前さんのお小使ひだ、些少いが」と紙に捻つて小粒
 一ツ……坊主大喜び、坊「大層待たして氣の毒だ、私しが一ツ取次いで先生を連れて来て上げ
 様」邊「頼む、又後でお禮をする、鳥渡逢へば可い」のだから」坊「よし」阿彌陀の光も金か
 らでございませぬ、小粒一ツ貰つて、坊主バタ／＼奥の書院へ駈けて来ると、ヒヨックリ
 出て来たのは豪轉和尚、豪「何處へ往く」坊「え、お師匠さん山本先生に急用があつて、鶴屋の
 亭主が最前から庫裡に控へてをります、其お取次ぎに」豪「ナニ鶴屋の老爺が来た、一人か」

坊「イエ清三郎と云ふ番頭を連れて来ました」豪「あは、ア、イヤ都合のよい時には都合
 のよい奴が来る、勘助は最う畏に掛つたも同じ事、彼奴を巧く殺つて了へば鶴屋へ乗込んで
 嫌が應でもお阿喜を貰つて来ようと思つた、老爺と清三郎が来たのは飛んで火に入る夏の蟲
 よいところだ二人を捕虜にして置いて談判すれば譯はない、お阿喜だから逆老爺が捕虜にな
 つて苦しんで居ると聞けば二ツ返事、親を助けたいために乃公に靡くに違ひない、巧いぞ巧
 いぞ」坊「へ、エ何でございます」豪「ウム貴様其處に立つて居たのか、聞いた事をベラ／＼喋
 舌つちやア不可ん、其老爺と清三郎には乃公が用がある、山本が今逢ふ少し待てと云つて逃
 さん様にして置け」坊「ハイ」豪「逃せば貴様を身代りに素ッ首を引抜くぞ」坊「エ、ッ夫れ
 は大變ツ」青くなつて取次の坊主庫裡へ出て来た、亭「どうでした先生は……」坊「先生か、山
 本先生はお逢ひになるとよ」亭「直にこれへお出なさいますか」坊「ア、少し待つて居ると仰有
 つた」亭「困つたな急ぐ用だが」坊「今に出てお出なさらう」亭「亭主は幾ら待つて居ても勘助
 が来ない、亭「モシ／＼お氣の毒だが最う一遍取次いでお呉んなさい」坊「然う急いても駄目だ
 乃公では今度は不可ない、外のものを頼みなさい」亭「何んでお前さんは駄目だね」坊「其處に
 謂くがあつて乃公が下手なことは出来ない、外のものを頼みなさい」亭「亭主も變と思つたが仕
 方がない、又一人の坊主を蔭へ呼込んで、亭「これはお小使だ」再び小粒を出して頼む、此坊

主畏つたと奥へ飛込むと、彼方の障子の隅で豪轉が弟子の恭念と云ふ納所坊主に何か頻りと吩咐け居たが、目早く「亭」これ〜何處へ行く」切「鳥渡山本先生へ、鶴屋の老爺が「亭」不可ん〜、其處取次をしては」切「ハイ呼出しては悪うございませるか」亭「馬鹿め困つた奴だ：あゝ可い〜、山本先生お逢ひになる、此方へお通りなさいと連れて来い、老爺ばかりぢやア不可ない、清三郎の青二才と一處に連れて来い、恭念お前は此處に居て二人を受取つて吩咐た様にして呉れ、乃公が居たでは工合が悪からう：是何を茫然立つて居るのだ早く二人を連れて来ないか」切「ハイ〜」亭「恭念屹度吩咐たぞ」恭「ハイ〜」神ならぬ身の鶴屋主從「亭」大層待たせるぢやアないか、先生はどうなつたらう」清「さうですなア、まだ殺された譯ではありますまい、毒酒を召上る程酔つて了ふ時間が経ちませぬ」亭「如何か無事で居て呉れ〜ば可い」と云つてるところへ、漸く取次に往つた坊主が出て来た、切「お待遠様サア此方へ」亭「先生に此方へ出て貰ひたいのだから」切「何だか知らないが、山本先生が清三郎と亭主と一緒に来て呉れと仰しやつた、奥の小座敷までお出掛けだ」亭「へエ清三郎と一緒に」切「さうだ二人共来て呉れと仰しやつた」亭「爾ですかえ、夫ぢやア清三郎上りな」清「手前は別に御用がない、只お供をして来たゞけの事で」亭「先生が来いと仰有るのだから、上つても差支へはあるまい」清「差支へはないが何だか變ですわ」とは云つたが逢はぬ事には用が辨じない、亭

主と共に小坊主の案内に連れて来ると、段々奥へ〜と導く：前申上ぐる通り轉得寺は大層大きな寺、廣い何の何のではありませんが、遂に長い廊下の往止りへ来て了つた、其角に控へて居たのは恭念坊で、恭「オ、鶴屋さん是からは愚僧が案内する、此方へお出で」亭「案内する」と仰有つても、是から奥は庭ぢやありませんか」恭「庭だよ、庭を横へ往くと土藏の小座敷其處に山本先生お出でだ」亭「へエ土藏などにお出なさいませるか」恭「さうだ、土藏の中で酒宴だ」清「旦那何だか可怪うございませぬア」亭「可怪やうだが幾日も〜續けて御酒を召上る、御酒興の最中に本堂へ何處からか葬式が来た、ジャンボン始められた日には飲んだ酒も旨くない、ジャンボンの聞えぬ様に土藏の二階へシケ込んだのかも知れない、マア〜往つて見よう」亭「亭主は餘り疑はない、先で云ふのに道理をつけて庭下駄を突かけた、清三郎は椽側に立つて考へて居ると恭念が、恭「サア〜早くしないか、愚僧もいろ〜役がある、手間取つては居られない」清「手前は之に控へて居ます、旦那様だけお連れ下さい」恭「何を云つてるのだ、自分達が山本先生に逢ひたいと、忙がしい中を人に手数を掛けて置いて、今更往かぬとは何だ、此青二才め」と飛掛つて引ずり下した、恭念坊も豪轉和尚の片腕と頼まれる怪力首筋を掴んでグツと引立てた、清「アッ痛い、これは亂暴でございませぬ、其處ことをされちやア首が抜けて了ふ」恭「抜ければ恰度幸ひだ」清「アッ参ります〜、恐ろしい力のある坊さん

だ」亭主もこれを見て、借は先生に逢ふ用向を早くも豪轉坊主に悟られたのではあるまいか
 とは思つたが、まだ山本先生がチャンとしてお在になると、心で思ひ夫を頼みだ 亭「あゝ和
 尚さん、そんなになさらずとも、先生に逢ひに来たのだから参ります、清三郎早くお出で」
 清「甚い目に逢ふものだ、首筋が腫上つて息苦しくなつた」仕方がない、後から庭下駄を穿
 いて尾いて往くと、恭念坊一ツの低い雑蔵の前に立つた、腰に提げて居た木札の鍵を取つて
 ゴト／＼と、ビーンと錠を開き、ガラ／＼とと繰つたのは金網の張つてある大戸、中
 からブーンと匂つて来たのは味噌の匂ひ、漬物の匂ひ、愈々怪しくなつたから兩人、一ト足
 二タ足後すざりをする、大活眼を見開いた恭念
 坊「恭」此中に山本先生がお在だ、サア這入らつ
 しゃい」亭「へッ、味噌蔵の中に山本先生が」
 恭「さうだ」亭「先生のお在なさるところに、錠
 前を打つたのですか：：如何に何でも味噌蔵に
 山本先生が」恭「黙つて這入らぬか、嫌と云つて
 も其儘に歸しはしない、這入れと云つたら這入
 れ」亭「喝かしては困ります、寺の味噌蔵へ這入



る積りで来たのではない、山本先生に
 用があるので」恭「まだ愚圖々々云つて
 居やアがるか、面倒だッ」恭念坊突然
 亭主の横ッ面をボカリッ 亭「アッ」と
 云つて踰躑する所を、腕を延ばして右
 手を取ると、ズル／＼と：：：清「こ
 れは」と驚いてバラ／＼逃出す後を、
 傍らに立掛けてあつた天秤棒を取つた
 恭念、視ひを定めてバツと投げると、
 清三郎の駈出す股の間へ件の天秤棒が
 飛込んだ、足に搦んでバツタリ倒れる
 ところを、恭念坊、足を上げて亭主を蹴返し 亭「ウム」と氣絶したのを見もやらず、其儘飛
 つけて轉んだ清三郎を取つて押へる、假令相手は町人にもしろ恭念坊が此働きは流石豪轉和
 尚の腕と頼まれた甲斐がございます、清三郎を引立つて来て味噌蔵の中へ叩き込み、亭主の
 氣絶したのを可哀さうに、其儘これも同じく味噌蔵へ投げ込んで大戸をガラ／＼とビーン



勘助を引出して殺さうと云ふ、其企みを注進に來て此始末となつたのだ、助けられるものに事を缺いて敵の張本人に助けられたのだ、驚くのも尤も千萬、典膳も不審がつて、典全體貴様達は何のため這處ところへ入れられた」亭別に仔細なものもある譯のものぢやありません此のお寺へ今日山本勘助先生が來て居ます、先生に用があつて來ると突如這處目にあつたので」典「ウム山本勘助に用事で來たのか、貴様は一體何者だ」典「手前は宇都宮の御城下で旅籠渡世をしてをります鶴屋淺五郎、これは番頭の清三郎でございます」典「何ッ鶴屋淺五郎に番頭の清三郎か、イヤ夫ならば此處へ押籠められるは當り前だ、悪い奴を生かした、寧ろ殺して了つた方が可かつた」亭「エッ手前は殺されるのでございますか」典「ウム殺すと極つた譯ではないが、死んだものなら生すではなかつた」亭「情ないことになりましたなア、全體何で其變に手前をお憎みになるので」典「分らん奴だ、貴様はお阿喜といふ美しい娘をもつて居るだらう」亭「へエお阿喜は娘でございますが、是なる清三郎と夫婦にしました」典「夫だから不可ん、お阿喜は當寺の豪轉和尚の思ひが懸つて居るではないか」亭「夫は山本先生が這入つて立派に思ひ切つて下さつたのでございます」典「夫は表面だけだ、物には裏と表がある、表は思ひ切つても裏は思ひ切らない、今夜は勘助を一同で斬つて了ふ、勘助を殺しておいて和尚が初一念を遂げ様といふのだ、イヤ勘助は殺さなくても其前でも構はん、此處へ貴様が這

入つて來て、死んで了つたのを拙者が助け遣はしたのだ、再生の恩人と云ふことだ、速かにお阿喜は和尚へ進上しろ、宇田川典膳が媒妁人になつて遣はす」亭「夫は御無理でお阿喜には最う清三郎と云ふ亭主があります、亭主のある者を人のところへやれますか」典「其亭主が此處に居るのだから譯がない清三郎お阿喜は諦念めて了へ、諦念めて夫婦分れをして、潔く和尚に熨斗をつけて差上げる」清「ト、途方もない、女房に熨斗をつける何んてえ事は出來ません」典「出來ぬか、出來ぬと云へば首をブツ刎ねるぞ」清「エッ首を刎ねられては生命はありません」典「極つた事だ、首が失くして生命のある奴が何處の世界にある、覺悟をしろ」清「エッマツ待つてお呉んなさい、さう氣の早いことを云はれては困ります、少し考へます、考へてお返事を致します」典「考へるも糸瓜もあつたものぢやない、お阿喜は離縁して最う關係はないと言申せ」清「一言でも考へなくては……」典「迂奴強情を申してをるな、我等山本勘助を打つ爲、當寺の和尚には一方ならぬ世話かけた、何か土産をもつて來なくてはならぬところを何一ツ持つて來なかつた、今宵は此味噌蔵の二階で勘助を討つ時刻を待つて居た、幸ひ清三郎から三下り半を取り亭主からお阿喜を和尚へ差上げるの一札を取れば、是に上を越した土産はない、サア清三郎三下り半を書け」清「どう仕りまして爾うしたら貴下の都合は可いでせうが、手前の勝手は甚だ悪うございます」典「何、書んか、二階には恰度硯もあれば

筆もある、磯田々々二階から硯と紙と筆を持つて来て呉れ「アッまだ二階に誰殿がお出でございますか」典居るとも、拙者の門弟で屈竟の若者が十四五人居る、貴様達が何をいつたつて藏の中を逃出すことも出来ねば手向ひも出来まい、勘助を撃殺す血祭り、四の五の云へば生命はないぞ」大刀をスルリ引抜いた。

(第二十一席) 雀の宮に勘助大敵と戦ふ事、并に勘助豪轉和尚と典膳

を討取る事

勘助は既に轉得寺の和尚豪轉の手の内に這入つたが、殺す迄には却々手数が加ふる、飽迄酒を強ひた、人に強ひるには自分も飲まなくてはなりません、勘助も酔つたが豪轉和尚も心を締めて飲みながら大きに酔つた、鳥ゲーブ、先生チア一ツ献じやせう「鳥ウムこれは大盃だな、此盃には銘があるか」鳥ありますよ「何と云ふ銘だ」鳥武藏野と申すのでなア、武藏野の大杯と「鳥扱も床しき銘である武藏野か、古歌にも草より出で草に入る月とある、其廣原になぞらへて大なる意味で武藏野と銘打つたるか」鳥あは、い、い、イヤ此大盃に酒をうけたる時は、飲み盡されぬ、野が見つくされぬに掛けた謎の銘でござるて「鳥イヤ銘は謎か：：飲み盡されぬとは面白い、併し勘助は此大盃を飲み盡して、盃の銘を改めさせよう、ウ

ウム」二升も這入る大盃に、両手をかけると「鳥グツ、グツグッ、グッ」三息四息の間に忽ち飲乾し「鳥サア和尚參るぞ」鳥アッお美事、一ツ、お押さへ下さい「鳥これは卑怯だ、飲み盡されぬ大盃を飲み盡した、和尚には飲み盡されぬと云ふのか」鳥イヤ愚僧とても飲み盡されぬとは申さない「鳥されば美事に受けさつしやい」鳥ウム是れは：：「豪轉和尚も却々負るが嫌ひだ、件の大盃を取つて充分に酌がせ、是も「鳥グツ、グツ、グ、グ、グ」と飲乾す「鳥出来した和尚」鳥何とか銘が改まりますかな此盃は「鳥されば今日から龍田川としては如何に」鳥龍田川、それは何う云ふ心で「鳥これで飲めば聊か酔心地が致す、顔に紅葉ちり敷くと心の心だ」鳥ヤッ聊かの酔心地、顔に紅葉ちりしく、夫で龍田川：：如何にもよい銘でござる」恐ろしい連中の寄合だ、一杯の酒が二升、夫で紅葉ちりしく龍田川、聊かの酔心とは、全體幾ら飲んだら大酔に及ぶのでございませう、斯様な次第で勘助も飲むことは飲んだが、豪轉和尚も勢ひ飲まざるを得ませぬ、勘助と豪轉との酒戦は前にもあつたが尙且勘助の方が聊か強い、豪轉も次第に酔つて来た「鳥サア今日は誰か酒豪が来て居ると云はれたが其酒豪を出さつしやい、御坊は最うチト參つた様だ」鳥まだ、愚僧其程ではない人を出す程とはならぬ様だ「鳥強情をいはずと出したら如何だ」鳥イヤ潰れ込むまでは人は頼まぬ「鳥ハ、ハ、ハ、よい覺悟だ、酒と討死だな」鳥ナニ討死なぞは致さない「豪轉實は別に

酒豪を頼んで来てある譯ではなかつたのでございませぬ、彼是する内に主客とも大酔に及んだ、勘助よりは豪轉の方が餘程酔つた位だが、今夜は一大事を控へて居る、勘助の歸り路を雀の宮の神社附近に要して撃取らねばならぬ、勿論人数は五十人から、中に大將分が壬生の宇田川典膳と豪轉和尚、手筈も悉く調つて居るのだから酔つては居られませぬ、勘助和尚相手は何うした、酒豪を出せ、豪は我等の事で、外から頼んで来る程弱い豪轉ではござらぬ、只酒豪が別にあると云つて置かなければ先生が張合がない、夫がため別にお相手役がある様申したが、全く外にはない、今日こそ酒で降参した、悉く兜を脱いで了つた、勘助あは、イヤ強情な和尚、そんな事と思つて居た、降参とあらば夫迄、拙者も聊か酔心地が可い、是で戻らう、豪、今夜は敢てお止め立は致さぬ、此通り愚僧も参つたのだから、勘助イヤ弱いな豪轉、サラバ暇とするであらう、三刻以上の酒戦夜に入つて相果てました、勘助酔歩踟躕として、轉得寺の印のある弓張提灯若い坊主が先に立つて宵暗の夜を轉得寺の山門を潜つて雀の宮の神社の此方、夜寒の風に顔を吹かせてやつて来る、是より先豪轉和尚は勘助の酒の相手をしながらも、チヨイ座を立つて此方へ来ては壬生の連中と打合せをする、座を外すには外したが、勘助格別怪しみも致しませぬ、元々一寺の主人客の前で話せぬ用も多くあらうと思ふからの事でございませぬ、

前からの相談は雀の宮を行過した彼方の藪だ、み、此藪だ、みは一丁も續いて居る、其藪だたみの中へ一同隠れて居て、勘助が来たならば名乗つて討つて出ようと云ふ譯、宇田川典膳は萬一人目に付いてはならぬと云ふので、味噌藏の二階に三日許り閉籠つて居る、この方へは弟子の恭念が萬事お使ひ番、愈々勘助が座を起つた時、恭念坊は味噌藏へ飛んで来た、錠を開いて、恭念先生々々、宇田川先生愈々時刻が参りました、典助、時刻が到来したか、恭念、只今山本の眇目、座を起つて玄關へ出ました、典助それは遅れた、何故もつと早く知らせん、恭念まだお起ちとは思はず、師匠は眇目に飲ませようとした、却つて酔つて了ひました、お知せの後れたのは此譯、直に御出張願ひます、典助よし来た、一同繰出せ、と云ふと二階からゾロゾロ、十五六人の若侍が、何れも襷をかけ刀に反を打たせ、鉢巻嚴重に力足を踏んで、ドタ／＼と降りて来る、味噌桶の隅ツコには鶴屋淺五郎と清三郎、青息吐息で是等の様子を聞いて居たが、亭、殘念だなア清三郎、先刻は宇田川典膳と云ふ奴に無理往生で、娘のお阿喜を進せるとの書付を取られた、先生は既に殺されなすつたと思つたが是から殺す所と見える、何とかして此雜藏を逃出さなくてはならぬ、清、手前も女房へ三下り半をやつては生て居られませぬ、典膳の足へ食ひついても、と小聲、其内にドシ／＼一同は出て去つたが恭念坊少しも拔りはない、跡に残つて大戸をガラ／＼と建て、ゴトリツ、

・ピーンと錠をおろして往つて了ふ。亭「オーヤオヤ、尙且錠をおろしやアがつた、清三郎何と加して出なくちやならない」清「最う斯うなつては生命がけ、二階に人が居る氣支ひなし、寺にも山本先生を追つて出て無人と思はれる、網戸を叩き毀す外はありませぬ」亭「さうだ叩き壊せ」再び兩人が漬物の押石をもつて来て、ドン／＼……一生懸命は恐ろしいもので、金網は剝れる、十文字に打つた檜の格子も一本折れ二本折れ三本折れて、穴は次第に大きくなり一尺五六寸四方もある大穴と廣がつた。亭「占たツ、この穴から抜け出せ」清「マアお待ちなさいまし、臺をなくちやア」亭「さうだ清三郎手を貸せ」清「長りました」穴が明いたので勇氣が出て来た、兩人で澤庵が一杯詰つた漬物桶を運んで来た、夫を踏臺にして亭主の浅五郎が網戸の穴から出る、續いて清三郎も出て来た、怒る大騒ぎをして抜出しても、浅五郎察しの通り山本勘助を討たんがため、大きな寺でも人数總出で人ツ子一人見えない、亭「マア誰も居やがらねえ、どうしよう清三郎」清「どうしよう」と云つて私共は町人の事で劍術のケの字も知りませぬ、山本先生をお助け申さなくてはならぬのだが、助ける方法もない」亭「逆も腕づく力づくではしようがない、話の様子では先生は大層酒に酔つてお出なさる敵は大勢味方は一人、これは最う十の八九と云ひたいが、九分九厘まで先生は殺られる、困つたなア」清「さうです何とか法はないものでせうか、一ツ釣鐘をゴン／＼鳴して驚かしたら

先生の方に、何か利分の事はあるまいか」亭「鐘を鳴らすと火事と思ひ村中の者が押出す、出たところで先生は旅のお人、和尚は土地の者、先生の害になれば益になることはあるまいナ……オウ／＼巧いことがある、寺へ火を放けて焼けば、驚いて先生を棄て、消に戻るだらう」清「ヘエツ放火をやるんですか」亭「驚くことではない、放火と知れても生命を棄て、先生に加勢する以上は首を投出す分のことだ」清「さうですなア、手前はお庭の井戸へアノ時お阿喜さんと二人飛込んだと諦念れば今日迄生て居たのは徳だつた位のもの、可うございます手前が一番放火になりませう、お上のお眼に止つたなら手前一人で背負て立ちます、放火は清三郎でございませすと云へば、旦那様の御迷惑にはなりません、手前がやります、ドシドシ放けて了ひます」弱い町人でも斯様な場合には随分勇氣が出る、雀の宮神社の藪だ／＼みへ駈付けたところで、何にも知らぬ兩人では一向に役に立つ譯のものでないが、人ツ子一人居ない場所火を放けるのだから之れなら誰にも出来る、庫裡の圍爐裏の傍には、松葉の枯れたのだの、下枝の風折になつたのだの、焚き草は山と積んである、夫を運んで来て本堂へ一ヶ所火を放けた、忽ち黒煙りが渦巻き立つたのを認めて、今度は奥の書院へ一ヶ所、夫から土蔵にも放ければ、庫裡にも放ける、廣い大きな寺だが都合八ヶ所と火を放けました、何處もか可い鹽梅に燃え上つて、既に先につけた本堂は高い天井も燃え抜く位と相成る、火事の方

疾風の如く横合より飛出したのは轉得寺の豪轉和尚、坊主頭に大鉢巻をして目方十八貫目ある鐵才棒を軽々と打振り、豪「ヤア、勘助、よくも我等の戀の邪魔を致したな、壬生の宇田川に加勢して、今宵こそは引導を渡すに依つて目を瞑つて念佛でも申せ」勘ウム豪轉坊主か扱は性懲もなく我等を計つて酒を多く飲ませたのだな、勘助不肖と雖も酒のために腕前の鈍るものにあらず、覺悟をしろッ「何を小癩な」ブーン：：振込んで来た鐵棒を、ヒラリ飛んで空を打たせ、隙なく繰出した槍は稻妻の閃きに異ならず、此時宇田川典膳も勇氣を鼓し大刀を打振り、切込む、右には豪轉左りには典膳、前後から磯田、羽黒、石山扱は轉得寺の番僧恭念なぞの面々、こゝを先途と踏込み、突いてかゝる、勘助苛つて突込んだ一本は磯田丈之助の首筋を美事に貫いて、餘る穂先が其背後に突立つた二才坊主を田樂に刺した、宇田川典膳此の隙と大刀を振つてバラリ斬込んで来たやつを、槍を返してガチリッ、石突きをもつて受流したる其手練、ヒラリ飛ぶかと思ふと、



羽黒甚兵衛は哀れや胸中を貫かれ甚「アッ」と云ふと打倒れた、苗字が羽黒と云ふだけにドテツ腹へ洞穴を明けられ、羽黒の山に猪の棲所が出来上つた様なもの、豪轉坊に於ては三十人力の力量を遺憾なく出すのは此時と、例の鐵棒を水車の如く廻す、縦横無盡に飛込み飛退く勘助の早業に打込む隙もなかつたが、斯くては果しと喚き叫んで打つてかゝる、勘助に於ては一人を槍玉に上げて、跳ね飛ばし、一人を石突をもつて急所を突き、進んで典膳と槍を合せ様と云ふところへ、ブーン、鐵棒が来たから、ヒラリ飛退きながら、ガチリッと槍で受流した、何しろ十八貫もある鐵の棒、勘助手練で受けるには受けた、鐵棒もするり流れるには流れたが、三十人力の力と十八貫の重味のため、槍は千段巻よりポキリッと二ツに折れる、勘助手早く其槍を典膳に向つて投付けて置いて、大



刀をスラリ引抜く、典膳槍の折れが飛んで来た……不意に飛んで来たから身を躲す間もなかつたと見え、石突きが横ッ面を擦過つて飛ぶ、只擦過られただけだつたが浅傷と雖も血がダラダラ〜と止度なく流れ出る、そいつを氣にして横に摩擦つたから面中が血だらけになつた、乾いて来るとビリ〜引釣つて、顎と顎との間へ突張をかつた様なもの……夫には構はず典膳も一生懸命の場合、大太刀を振つて大喝一聲「典膳おのれッ」と切込んだ、豪轉和尚も同じく鐵棒を打込む、勘助愈々勇氣加はると雖も、此時までに十五六人を或は突き伏せ、或は切つて落した、手足は二三ヶ所の淺傷を負ひ、多勢に無勢は致し方がないもので動ともすると受太刀〜と相成る、勿論一人と一人とならば左様なことはないが、相手は卑怯千萬にも背後へ廻ることばかり考へて居る門弟共、正面には豪轉と云ひ典膳と云ひ其外腕ッ節の可い奴が立つて居る、隙を覗ひ不意を喰はせ様とワイ〜連が後尻ばかり付ける、青蠅の何のぢやありません、元來多數の人を相手に戦ふのには、是非とも何か小楯に取るものがないと敵ひませぬ、大木があれば大木、塀なぞがあれば塀、何か背後を圍むものがないと充分の働らきは出来ませぬ、人間と云ふ奴眼は前にあつて背後にはない、私に敵に背後へ廻られれば如何に英雄でも豪傑でも致し方がありません、戰場の場合でも良將は必らず背後に心を致す、敵に背後を取切られて前後さし挟んで討たれては難戦に陥るからの事、況て只一人

の勘助と多數の相手の場合どうしても、小楯を取つて置いて前の敵に當るのが當然……、夫は勘助充分承知して居るが、今夜出會の場所は背後に小楯を取つて戦ふ様な都合のよいところではありませぬ、一方は田や畑ばかり木と云ふものがない、一方は敵が巢にして居たオツ掩さる様な藪だ〜み……小楯に取れば藪だ〜みだが、藪を背後にして敵に當ることは危険千萬、さうでなくても卑怯未練な宇田川の門弟共、藪の中からニヨキ〜と槍を突き出す、何分小楯に取るものがないから、憑所なく東西南北と跳廻り駆廻つて戦つて居たのでございませぬ、多數を相手には是が頗るの弱身、流石の勘助も三度に一度は背後へ氣を配る爲に受手と相成る、豪轉坊大きに氣を得て「勘助の眇目を殺すのは此時だぞ、一同モツと勇氣を出せ」宇田川典膳も又「自分の生命を大事がるな、捨身で往け、敵の勇氣は衰へたるぞ、ソレ突けヤレ突け」天の岩戸の見世物見たやうだ、兩人大將氣取り采配を振らんばかりに差圖をしてをりましたが、今や豪轉坊主は鐵棒を眞向上段勘助眼かけて「豪ヤッ」と振おろした、バツと飛退つた「此糞坊主ッ」飛込みざま横に拂つた大太刀、蝸入道眞二ツと思ひの外、豪轉もシレ者ヒラリツと體を躲し、再び棒を振上げた途端に典膳「此眇目ッ」と切込んで来る「勘心得たり」身を開いてカチリツ……時に背後より忍び寄つた恭念坊「恭ヤッ」と槍を繰出したが、兎も角も恭念は豪轉坊の片腕槍先も聊か鋭い「勘ハッ」と振向きながら、危

く槍を切つて落したが、此時勘助股の着け根を聊かやられた、實に其危うさと云つたら風前の燈火、さしもの勘助も此處雀の宮の藪だゝみに於て兇刃のため斃れるかと怪しまれる位、然るに此時轉得寺の方角に當つてポーボツと火の手が上がる、是は前申上げた鶴屋淺五郎と清三郎とが寺内八ヶ所へ火を放ちました、其火の手が漸やく上つたので、此藪だゝみから寺迄は彼是十町ばかり隔たつてをります、暗夜ならば疾くの昔火の手が知れたのだらうが、最前より月は中空にかゝつて皎々と照らして居る、遠く離れた一軒家の轉得寺、少し位の黒煙りでは誰も知らない位のもの、八ヶ所一度に燃上り、屋根へ燃抜け火の手が空に上つて始めて近所のものも火事と知れた、甲「火事だよう」乙「火事だッ」丙「火事なら何で坊主め鐘を撞きやがらねえのだらう」丁「自分の寺の火事だから、人を騒がしちやア氣の毒だと鐘を遠慮したんだらう、仕方がねえ法螺の貝でも吹いて人を集めるだア」ポーウ、ポーウ、ポーウと百姓共法螺貝を吹き始めた、火事の知らせには法螺貝が適當して居るかも知れませぬ、火事がポーと燃上る、法螺の貝がポーと音を出す、執方もポーと、同士だから：：此法螺を聞いて村内の百姓が集まる、と共に貝の音は雀の宮神社の傍ら藪だゝみ迄も響いて来る、○「火事だッ」△「火事に違ひない」×「何處だッ」◎「方角は轉得寺だ」○「アッ寺から火事が出たか」|△「そりや大變ソレ往け」□「駆つけろ」豪轉の弟子共は大狼狽、淺五郎の考へ圖に當つた、

野夫にも功の者とは此事か、大坊主小坊主ドン／＼駈戻る、此體を見た豪轉和尚、豪「者共何を騒ぐ、騒ぐな最う一ト息だ」ブーン／＼と鐵棒を打振る、時に一人の坊主が、坊「和尚様大變でございます、寺は丸焼けあの通り火の手が上つて居ります」豪「寺は丸焼け此方は糞焼けだ」坊「冗談云つて居ては困ります、最う本堂は焼落ちたと一同が騒いで居ります」豪「ナニ本堂が焼落ちた、夫は本當のことか」坊「洒落どころの騒ぎではありませぬ、あれ／＼アノ通り火の子が天を蔽つてをります」勘助に氣を取られて居た豪轉、此の時始めて空を仰ぐと、皎皎たる月光を遮つてチラ／＼火の子が飛ぶ、豪「ウーム何處が火事だ」坊「まだ其處ことを仰有つてお寺が焼けてをります」豪「何處の寺が焼けて居る」坊「貴下のお寺でございます、最うお歸りになるところが無くなつて了つたので」豪「エツ轉得寺が焼けた、夫なら夫と早く云へば可い、大變なことになつた」坊「先刻から申して居るではありませんか」豪「夫では：：」流石の豪轉も我寺院を焼失つては大變と思ふから、其儘引返さうとする、と宇田川典膳が、典「御坊、大分勘助が疲れて来た、一同今少しの骨折りだ、御坊に今行かれては困る」聲を掛ながら必死となつて戦つて居る、勘助心中大きに喜び、勘「道理で坊主めら逃腰となつた、其儀ならば：：」勇氣は更らに百倍した、此時までに轉得寺の徒弟と、壬生の武士とを既に二十五六人を切倒した、今ブーンと豪轉が振込んだ鐵棒の下を掻い潜つて、勘「ヤッ」と云ふ



と豪轉の右の腕を一本バツと斬つて落す。『これは』と驚いて豪轉、二三步後へ退いたが強情の坊主で、左りの手で一刀をスラリ引抜く、切られた腕は鐵棒を持つたなり飛んで往つて壬生の武士の胸板へドンと突つかる。武『アツ』と叫んで頭顛倒真逆さまに倒れると、夥多しく血を吐いて絶息、是では味方同士の戦ひも同じ事、勘助のために同士討をやつて了つた、其處へ付込んで宇田川典膳が、眞向微塵と切込んだ一刀、ガチリツと鏢際に受止めるが早いか、其刀をボンと跳返しておいて一足飛込み。勘『エイツ』右の肩から胸元をかけて只一刀に斬下げた、宇田川典膳も此深傷では仕方がない。典『アツウーム』と打倒れた、豪轉最早敵はぬと思つたか、バラ／＼と駈出すところを。勘『迂奴卑法なり惡黨坊主ツ』と追蒐ける、大將討たれて殘兵全たからず、殘つた壬生侍の二十人足らず、轉得寺の坊主共十二三人、何れも蜘蛛の子を散した様なもので、四方八方へ逃散つて了ふ、豪轉和尚只一人逸足出して逃げたが忽ち勘助に追つかれた、餘事の様でございませう、此手足の働きは天然の妙で、駈出すのには是非手を振つて身體の調子を取らなければなりません、足で駈けるのだから足だけ出たらば可さうなものだが爾でない、駈けるには何うしても手が必要であります、勿論足で駈ると云ふ様なものゝ足と一處に身體も運ばなくてはならぬ、身體の重味を加減するのには手の働きの要る譯なのでございませう、手錠をはめた罪人などが逃足を幾ら早くしても忽ち、捕まつて了ふのは、此理でございませう、豪轉和尚手を一本切落されたから逃足が遅れ、勘助に於ては、勘『坊主覺悟ツ』豪轉も最早是迄と。豪『迂奴よくも右の腕を切つたな、右の腕の仇敵』そんな事を云つてる間はない、飛込んだ勘助の腕の牙は、勘『ヤツ』との一聲と共に大坊主の豪轉眞向梨子割を喰つて、血煙りバツと立つて打倒れる、勘助高らかに、勘『東路やおほくの夷たひらげて、反けば宇都の宮とこそ知れ』と唄ひ、突立つた儘ホツと一息、莞爾として喜びの色を禁じ得ないのは尤も至極、英雄豪傑の快事は憚る大敵を討平げた刹那にあるものでございませう、此時火の手は天を焦さんばかり……。

(第二十二席) 鶴屋主従勘助の危きを救ふ事、并に清三郎放火の罪にて入牢の事

宇田川典膳と豪轉和尚は、雀の宮神社傍の露と消えて了つた、勘助は身にうけた疵が都合十ヶ所餘り、深傷はないが敵を討つてヤレ安心と思つたため俄かに身體が痛み出した、夫のみならず張つめた氣が急に弛んで來たから思はず其處へドツと倒れた、斯様な場合に安心ほど不可ぬことはありませぬ、幸ひに壬生武士も轉得寺の徒弟等も残らず逃散り、或は火事場へ飛去つて一人も様子を見て居るものがない、藪だゝみに身を隠して居たものもなかつたから

可いが、甚麼弱い奴でも其處らに忍んで居たなら、勘助を討つに何の苦も要らぬ程勘助はグツタリとなつて了つた、流石の豪傑でも寢鳥同様の姿となり、恍惚として草原の中に横はつて居ります、此方は鶴屋の淺五郎と番頭の清三郎、轉得寺に火を放つと八ヶ所とも燃上つたから遠く退いて様子如何にと見て居ると、大坊主小坊主とも驚いて飛歸つて来る、甲「何處から火が出たのかなア、焼けるは焼けるは美事な焼方だ」乙「手前の寺の焼けるのに美事は餘計なことだ、乃公の部屋は如何なつたらう大切なものが藏つてあるのだが」丙「何が藏つてある」乙「何がつて生命から二番目のものだ」丁「生命から二番目、ハ、ア判だらう、印形は首と釣替へと云ふから」乙「そんなものぢやアない」甲「ハテな、何だ、あゝ金だらう、偷盜戒を破つてお布施を胡麻かした其金に相違ない」乙「飛んでもないそんなものぢやない」丙「分らんない、印形でなし金でなし、夫で生命と釣替の物とは、全體何んだ」乙「當てて見な」丁「サア分らぬから聞くのだ何んだよ」乙「エへへへ、エ」甲「厭な笑ひをしやがる、何んだか云へよ」乙「夫ぢやア云はうか、世間へ吸聴しちやア困るよ」丙「よし〜世間なぞへ吹聴はしない、誰も喋舌りはせんサア云へ」乙「へへへ、エ、實は豆腐賣の娘のおさと、約束した、末は夫婦との約束の書付があるんだ」丁「此坊主め頭頭邪淫戒を犯しやアがつたか、迂奴お里なぞと」甲「アハ、ハ、何んだ火事の最中に惚氣なぞ吐しやアがつて」乙「又火事の最中に、何だつ

て人の惚氣なぞ聞いて居るのだ」丙「アッ此坊主仕様のない奴だ、早く消さなくちやアならぬい」氣樂な坊さん達だ、壬生武士の逃げた面々、〇「どうだ大火になつたなア」△「大火は人の寺だ、焼けたつて構ふことはないが、宇田川先生は實に氣の毒だつた」×「氣の毒と思ふなら逃げて來なければ可い」◎「さうだつたなア、火事に氣を取られて我知らず足が此方へ向いた今時分は何うなつて居るだらう」甲「併し踏止つて居たものもあつた様だ、何を云ふにも山本勘助と云ふ奴、強い強くないのぢやアない、彼れ程の働らきを仕様とは少しも思つて居なかつた」乙「宇田川先生はあれ丈の疵をうけて見れば最う逆も助かるものでない、此上は我々は何としたものだ」丙「サア壬生を出る時、既に生死を共にすると誓つたが、夫は磯田が餘り熱心に勧るからの事、斯うなつた上は少しも早く壬生へ歸らうぢやないか」丁「馬鹿を云つちやア不可ない、宇田川先生は山本に殺された、磯田をはじめ重立つたものは皆殺られた、我我共ばかりドノ面提げて歸れる」甲「成程是は歸れない、夫では四人一處に浪人で何處かへ高飛びしよう」乙「高飛びと云つて懷中無一物だ、宇田川先生は殺されたが懷中には大分金があつた、取つて返して様子を見て皆退散して了つたら先生の懷中物だけ借用して退散しようではないか」丙「可い所へ氣がついた、立ち戻つて先生の懷中物を取つて來るが可からう」丁「夫がよい〜」四人の若侍は立戻つて來る、道端には勘助が性體なく倒れて居る筈、見付か

つたら大變……併し四人の若侍は勘助が道端に倒れて居ようとは夢にも思ひませぬ、取つて歸して來ると向ふから二三人バラ／＼拔身を提げて飛んで來る。甲「仲間の奴等だらうがカラ意氣地がないな」乙「意氣地のないのは此方が餘計だ、兎も角も先生の懷中物を浚ひに往くのだ、假令仲間のものでも夫と悟られてはならぬ、少し蔭へ這入つて隠れて居よう、遣り過して置いて戻つた方が可い」丙「イヤ可いところへ氣がついた、如何にも隠れよう」四人コソコソと傍らへ這入つて了ふ、向ふから逃げて來たのは案の定壬生武士だか逃足が早いから傍目もせず往つて了ふ、四人連は再び往來へ出て歩き始めると、又バラ／＼二三人來る、四人は草叢へ藻線込む、行過ると又出る、斯様なことをして居るから藪だゝみへ取つて返すのに餘程手間が取れた、鶴屋の淺五郎と清三郎は是等の様子を聞いて「淺」どうも山本先生は全く羽黒山の天狗か知れない、今夜も大勢に取巻れて確乎にお勝ちになつた様子、宇田川典膳の殺されたのは今の話して確乎なものだ」淺「さうです、私しは這變嬉しいことはありません」淺「そりやア乃公だつて嬉しい」淺「旦那様の嬉しいなりと手前の嬉しいなりとは形が違ひます」淺「妙なことを云ふな乃公の嬉しいもお前の嬉しいも同じだらう」淺「ところが違ひます」淺「何處が違ふ」淺「手前はアノ典膳の悪侍にお阿喜さんの三下り半を取られて居ます、逆もあれを豪轉坊主にやるだけの隙はありますまい、三下り半が坊主の手に這入つたでは大

變ですが、這入らぬうちに殺されば安心、這變嬉しいことはありませぬ」淺「何を詰らぬことを云つて居る、兎も角も山本先生が御無事ならば早く往つて次第をお話し申さなくてはならぬ」淺「ほんにさうでございました」兩人は其儘スタコラ藪だゝみの方をさしてやつて參つた、尤も兩人は此邊の地理に委しかつたと見えて田の畔道を辿つて來た、眞的に往來から行けば壬生武士、或は轉得寺の坊主共に出會はないとも限りませぬ、夫故横道を辿つて來たのが大きに可かつた、今横道から本道へ出て來て見ると、其處に打倒れて性體のない有様で居るのが山本勘助でございます。淺「アッ大變だ先生がやられなすつた」淺「エ、ッ先生がやられましたか」淺「オ、まだ身體が暖かいが、倒れて居るところを見ると殺られたに違ひない」淺「ア、ッ旦那、こゝに豪轉和尚が殺されてをります、眞二ツになつて死んで居ります」淺「ナニ蝟入道も死んで居る、そんなものは死なうと如何しようかと構つた事はない、山本先生を御介抱申さなくてはならぬ、清三郎手を貸せ」淺「如何するのでございます」淺「マア可いから其方を確乎抱きな」淺「足の方には血が幾とこからも流れて居ます、オ、ッ氣味が悪い」淺「馬鹿め放火が知れば貴様の生命はないものだ、死ぬだけの覺悟をして居ながら氣味が悪いもないものだ、早く持上げる」淺「持ち上げたつて此儘御城下迄、提げて往かれるものぢやありません」淺「御城下へ提げて往けとは誰が云つた、おかれては何にもならぬ早く持上げ

ねえか「清」左様でございますか「浅五郎は清三郎に手傳はせて勘助の身體を持上げたところへ向ふからガヤ／＼と話しながら来るのは、最前の壬生武士四人：「浅」ソレ見ろ愚圖愚圖して居やがるから最う彼方から来た、之が眼に留つて見ろ、夫こそ山本先生の身體はズタズタにされて了ふ、早く横道へ這入れ」清「ナル程、夫で分つた」勘助の身體を傍道へ擔ぎ込まんとした時、月の光り火事の明りで早くも認められた四人の武士。〇「何んだ、待て、待て」と押取り巻く：「勘助の運のよかつたのは壬生武士が。〇「待て、待て、待て」と口々に叫んだ其言葉の餘り鋭かつたのでございます、さなきだに武士は轡の音にも眼を覺すと云ふ、餘りの疲勞に勘助ヤレ安心と思つて一時は恍惚として了つたが、此鋭い言葉が耳に入ると我破とばかり跳起きた、機會に頭と腰を抱いた清三郎と浅五郎は跳飛ばされた。清「ヤッ先生が蘇生つた」浅「ウム先生



五郎でございます、鶴屋の浅五郎でございます」と云ふのを耳にも掛けず、持つて居た血刀を取直し、勤何者だ察する所宇田川の同類だな、山本勘助これにあり勝負ツと飛出すと驚いたのは壬生武士、甲「アッ山本が出た」乙「天狗が出た」と云ふと、スタコラ／＼元來た道を取つて返す。勤「アハ、ハ、弱蟲めが」浅「先生先生浅五郎でございます」勤「清三郎がお迎ひに出ました」勤「ウム鶴屋主従か、イヤ今日は飛んだ災難にあつた、アツ痛い、どうも聊か手を負つた様子だ」浅「早くお手當をなさらなければなりません、手前共兩人お供を致します直にお歸りを願ひたうございます」勤「イヤ勿論



歸る、貴様達は全體何のために此處へ来た「さ」お迎ひながら今日の椿事が分りました故早くお知らせ申さうと思つて來ましたところが、豪轉坊主のために捕虜にされて漸く今逃れて來たのでございませぬ「勤」ウム橋になつたか、借々氣の毒大層大きな火事が始つた様だな「さ」其火事は手前共兩人が放けましたので、敵は大勢貴下は一人、寺でも焼いてやつたら驚いて坊主達が飛び歸り、貴下が幾らかお樂にならうかと思ひまして「勤」ウム夫は感心な働きぢや、全く火事が起り坊主共驚いたので大きに拙者の方は助けになつた、町人には似合ぬ巧みな考へだつた「其處で勤助は宇都宮へ引揚げようとしたが、手傷が痛んで歩行充分でございませぬ、淺五郎と清三郎が肩にかけて漸々と御城下鶴屋へ立戻りました、家内の者も大心配の最中、早速竹田鳳益と云ふ外科にかけては其頃名醫だと評判のある醫者を招いて手當を致しました、鳳益勤助の身體を改めると此時にうけた傷が大小十二ヶ所あつたと申します、早速充分に手當を施し鳳益が晝夜付切りの姿で療治を致しました、と云ふ中には左りの足の筋にかゝつたところの傷が一番の深傷、雀の宮から御城下へ出て夫から夜中ながら鳳益を頼んだので何しろ相當の時間を要し幾分手おくれの姿、折ふし雨が澤山あつて疵口に膿を持つた様子、發熱も甚うございませぬ、夫がため醫者は付切り勤助はドツと病ひの褥に就いた、一方轉得寺は本堂、持佛堂、客殿、庫裡、經藏を始めとして全く一物一什も残らず綺麗に灰になつて、

さしも大きな寺も一夜に野原と變つて了ふ、藪だゝみの傍には武家と坊主の死骸が二十九人、算を亂して横はつて居る、翌日に至つて御領主から御檢視が下つて一々調べて見ると是だけの死骸に一ツも刺息をさしてございませぬ、中に蟲の息で居るのが三人あつた、夫には手當を加へ、他の死骸はお取棄てとなる、呼吸の通つて居る奴は手當の結果で段々恢復して來ました、何故斯く多數のものが殺されたのが御領主にも分らない、其處で傷手當をした奴を段々にお取調べになると前申上げた徑路が始めて分つて來た、殺されたのは宇田川典膳、始め壬生の家來……壬生は當時宇都宮國綱の旗本に屬して居たのでございませぬから、宇都宮家の役向より壬生の御家に對して如何致したものであらうとお聞合せになる、殺した奴は山本勤助、其勤助は御城下に居る、假令事の起りは如何にもあれ勤助を召捕つて夫々罪を糺すが可からうとの心算……打てば響く雀の宮の一條は忽ち壬生に聞えた、宇都宮家から問合はまだ來ぬが何れ何とか云つて來るだらう、來た時には城主壬生上總介義雄、老臣松崎右門と高田左門と評議があつて、返答の仕方は定つて居りました、其處へ宇都宮の使者が來たから、高田左門使者に面會して、左「宇田川典膳は當方の家來には相違なかつたが、僅かに山本勤助に恨みがある逆許を受けず當城を出奔致した、其餘のものは壬生の家來にあらず、典膳とても其通り御暇の出たものであるに依つて、聊か差構へこれなし」との返答、使者立返

つて其趣きを申上げる、轉得寺の方を調べて見ると是れは豪轉和尚が悪い事は界限の評判でも分りました、殊に宇田川典膳と計つて欺し討ち同様に數だゝみへ引出し、多數徒黨して勸助を討たんとして返つて殺された、謂はゞ自業自得、それに就ても山本勸助は聞ゆる豪傑だけあつて腕前天晴至極、其勸助を一度見たいとの國綱公の思召、早速其趣きを鶴屋淺五郎方へ御達しになつたが、此時勸助は足に膿を持ち寒熱の往來激しく何分御答へする事が叶ひませぬ、追つて病氣全快の上御目通りを願ふと、挨拶して専ら療治に手を盡してをります、ここに雀の宮の一條は落着致した様なものだが、一つ残つて居るのは轉得寺出火の一條、幾棟かの寺が一ツ残らず焼けて了つた、實に見るも無慘の有様となつたが、是れは放火であらうか、又は過失であらうかとの疑ひ、只今は警察力が行届いて居る様だが、其實隨分手ぬるひのものもある、隨分重大の事件で犯人の上らないのは却々ございます、只今より四百年も前の此時代には、警察力なんぞと云ふ行届いたものはありませぬが、其割合には犯人はよく上つたもので、舊幕時代の大岡政談などを見ましても、難件大事件といふものが能く調べ上げてある、政治のやり方は違つて居ても、割合によく犯人が上つたと云ふものは大體がチョット違つたことがあります、昔は御用聞きお縄預りか云ふものが何處にもあつた、これは町家の住居で親分とか親方とか云はれて下層社會の交際がよく出來て居た、今日の巡查：警察官と

云つた風に官の權威をもつて人民に接しない、巡查とか探偵とか云へば人々が先其名を聞いたゞけでゾツとする、通常のもものは決して親しく話しをしない、巡查は豪いもので我々人民の上立ち、保護して下さるから冗談なぞ云つてはならぬ、敬して遠ざけなければ宜しくない、夫は心得違ひかも知れないが、十人が十人此心得で居る、従つて犯罪なぞのあることを知つても迂濶に口を利かない、利けば係り合になつて警察へ呼出され、狼狽すると留置さくひ、云つたことが間違つて居れば偽證罪だ等と大變なことになる、君子は危うきに近よらず、障らぬ神には崇りなしと口を噤んで知つたことも云はない、夫は國家に對する觀念が薄いと云ふ様なものだらうが、自分の身に暇潰しと危険とを冒しても聞嚙つたことを云はなくてはならぬこともありませぬ、言はない方が先づ普通の人情の様にも考へられます、其處へ行くと昔は大きに趣が違つた、御用聞きは町家の住居で交際が廣い、聞及んだことを話しても別に奉行所へ引張られることはない、況て偽證なぞで自分が牢へ打込まれる恐れはない、皆御用聞きの場合一切をやつて呉れる、夫がために犯人はすん／＼上つたのでございます、御用聞きは秩父屋久太郎が、轉得寺の出火は鶴屋の番頭と亭主が放けたものだと言ひ聞込んだ、ほんの噂話の様に聞込んだのだが、勸助と鶴屋主従の上を聞糾して見ると、如何にも火をつけたのは兩人らしい、其處で手配りをして或夕方久太郎が乾兒を三人連れて鶴屋の家へ乗

込んで来た。久「亭主居つたかえ」番「あゝ是は秩父屋の親分、サアどうぞ御上りなすつて下さい」久「御免よ、浅五郎どんは何處に居るね」番「只今山本先生のところへ竹田鳳益さんが来て居ます、其處へ參つて居りますから」久「あゝ爾か鳥渡内々で話がある、何處か内證話の出来る座敷を貸して呉んな」番「畏りました此方へ」久「あゝ是れは閑寂して好い座敷だ、何かえ山本先生の御病氣は可い方かね、豪いお強い方だね」番「難有う存じます、段々熱も下つて来たさうで、此分ならば氣分だけは三四日で快くなる、足の方は是れは容易では癒らない事に依つたら跛者になるだらうと申してをりました」久「跛者に、夫は大變なことだ」番「臆をもつた場所が悪い、是非切らなければならぬが、其關係から元通りの足にはなれぬとの事でございます」久「イヤ氣の毒千萬な話した、夫では鳥渡浅五郎どんを遣して……」番「畏りました」番頭が二階の勘助の部屋へ来て、浅五郎に此話をすると、浅五郎は忽ち顔の色が變つた。淺「エッ、秩父屋の親分が……」と云つたが素より覺悟の前、其儘二階を下りて小座敷に来る。久「オ、浅五郎どん、忙がしいところを呼んで氣の毒だつた」淺「これは能くお出なさいました、別段急がしい譯でもありませんが、山本先生の御病氣には例も立合つて居りますから、遂ひ失禮仕りました」久「さて浅五郎どん外の事であつたのではない今日はお役筋だ、お前も知つての通り雀の宮轉得寺の大火、柱一本も残らず皆焼けて了つたのは實に不思議、

お上で種々お調べになつて見ると、あれは過失の火事ではなく誰か放けたものらしい、放けたとすると誰がやつたのか、差向き娘のお阿喜さん、夫から番頭の清三郎と、豪轉和尚の關係もあつてお前のところへ疑ひがかゝつて来た、勿論夫には夫だけの見知り人もあるが、事を大きくしたところで爲様がない、私しは役目の表さうと知つては棄置けない、と云つて大きくする積りは少しもない、お前の方で一つ下手人を出す様にしては如何だ」實に物柔らかな申分でございます、只今は○コラツ其方は何の某か、豫審判事の發した令状を執行するこれに捺印せい、最上お上の身體だ身動き一つすることはならんぞ」と無遠慮に直ぐ捕縄を出すなぞは昔とは大きに違つて居る、現在の犯人でも斯う穩當にやられると恐入らずに居られませぬが、權柄づくで来ると糞を喰へると云ふ氣の出るのは、所謂一寸の虫にも五分の魂……浅五郎思はず久太郎の前に兩手を撲いた。淺「親分恐れ入りました、全く手前の心得違ひ山本先生は六七十人の人に取巻かれて居る、轉得寺の坊さん達も向ふ鉢巻繩棒で向つて居る先生をお助けしなくてはならぬが我々は劍術も知らず、其場へ駆つたところ何の役にも立ちませぬ、フト考へたのは寺を焼拂つたらば、坊さん達驚いて駆つけるだらう、スルト山本先生のお手許も幾らか樂にならう、斯様に考へて轉得寺へ火を放けました、此上は御法通りになすつて下さる様に……」久「天に口なし人をもつて言はしむ、全くお前達の業だつたに

違ひなかつた、夫はお前一人でやつたことか「淺」何を隠しませう、清三郎と兩人でやりまし
 た」久「兩人ぎりかえ、夫では二人罪人を出したところで仕様がな、氣の毒だが何方か一人
 で背負つて行くが可い、やつた事は仕方がないから」淺「左様でございますなア」久「其事が分
 明して居れば今直でなくても宜い、私の顔を潰すやうなお前さんではあるまい、今日は緩々
 と相談をして家内中にも言ひ置かなくてはならぬ事もあるだらう、悉皆支度をして明日の晩
 方まで私しのところへ来てお呉れ、下手人は一人で可いからな」花も實もある秩父屋久太郎
 の言葉、目明し御用聞と云つても此時分の人は違つたもので、淺五郎嬉し涙に呉れ、久太郎
 の歸つた後で家内中の相談となりました、第一番に此事は山本先生に申上げたものか、御病
 中殊に熱も大層出て居る、心配事を申上げて病氣に障つてはならぬとの斟酌でございます、
 番頭の清三郎が「清」偕旦那様、轉得寺
 であの節萬が一此事露顯の曉には、
 手前が一人でお引受け申すと申上げて
 ございます、其節も申上げた通りお阿
 喜さんと手前が裏の井戸へ身を投げる
 ところを先生に救はれました、其時ド



ブンと飛込んで了つたと思へば今更世
 の中に残り惜いことではありません、此
 事は手前がやつたに相違なく、旦那様
 には手傳つて頂いたゞけの事、放火の
 罪は素々手前にあるのでございますか
 ら背負て往くも往かないもない、手前
 が名乗つて出ます、斯う覺悟致しまし
 た以上は御病氣に障る障らないに拘ら
 ず、先生にはお話しなく願ひます、放
 火は火あぶりの御所置に逢ふと云ひま
 すが、まだ火をつけたものが火焙りになつたのを見ることがありませぬ、大方首を切られる
 のでございませう、先生も後でお聞きになつたら可哀相だと一本位の線香は立つて下さるこ
 と、思ひます、旦那様御新造様お阿喜...名残は盡ないが手前は死に參る、御所置になつた
 と聞いたら一遍の御回向を願ひます」勘助の恩に感慨の餘り斯様な町人にも此の志しを現
 したものは大層なもの、お阿喜の悲しみは又格別ワツとばかりに泣入つて、阿晴れて添つた



のも昨日今日、嬉しいと思ふ間もなく、生死の別れ……とは云へ先生のために重き罪科を犯したのだから、私は溫柔に断念ます」と傍の見る目も健氣な覺悟、涙のうちにも夫々の支度をして翌日に相成ると心ばかりの別れの盃、遂に清三郎は秩父屋久太郎の許に赴き、轉得寺の放火は自分で外には同類はないとのことを申出で、宇都宮の御牢内へ打込まれて是れはお取調べと云ふことに相成りました、勘助に於ては左様なことは聊か存じませぬ、四五日経つて「勘御亭主」淺「へエ」勘今日は大分心持が可い、チト其處らを歩いて見たいが……」淺「まだ熱も悉皆取れたとは鳳益老も申しませぬ、お歩きなすつてプツ返す様なことがあつては……」勘「イヤ、心配はない、根が内から起つた病氣ではない、外からうけた傷のため發熱したのだ、傷も大分快くなつた様子、殆んど痛みが取れた、傷さへ癒れば何ともない久しく寝て許り居て退屈した、今日は出よう」淺「左様でございますか」勘「御亭主は定めし忙がしいだらう、氣の毒だが清三郎を貸して呉れ、清三郎を供に連れて歩かう」淺「エ、ッ清三郎……」勘「毎日顔を出す清三郎が此三四日見えないな」淺「へエ少々他へ参りました」勘「傍とは何處へ往つたな、遠方か」淺「へエ、チト遠方でございますして」勘「遠方へ参つた、さうか夫は仕力ないが今日にも歸るか」淺「イエ今日はチト」勘「明日は何うだ」淺「明日もチト」勘「明後日は」淺「明後日もチト」勘「明々後日は」淺「明々後日もチト」勘「ハチ何時頃歸ると申すのか」

淺「夫がチト分り兼ねます」勘「夫では餘程の遠方と見えるな」淺「へエ大變遠方でございますして」勘「大變な遠方……少しも知らなかつた東北の方か、夫とも京大阪又は四國九州と云つた様な方角か」淺「左様でございます、追々には冥土黄泉に近寄つて参りませう、十萬億土の方へ」勘「何を莫迦を云つて居る、死んだものぢやあるまいし、十萬億土なぞへ参る奴があるものか、全く何處へ参つたのだ」淺「全く其の方角でございます、十萬億土の」勘「どうかしたな亭主氣を静めて物を云へ」勘「勘助も返答の可怪しいので呆れた顔をしてゐる。」

(第二十三席) 宇都宮國綱公勘助を御賞美の事、并に勘助安住隼人助

と問答の事

頭隠しても尻が現はれる、亭主の淺五郎、清三郎が入牢の一條は勘助には言はぬ積りであつた、勿論何處までも隠し通す氣もない、病氣全快となれば何かの拍子に話さうと思つて居た夫がため物を喋舌るに用儀を缺いてツイ十萬億土なぞと喋舌つて了つた、最う胡麻化しが利きませぬ、淺「實は今日迄申上げませんでした、轉得寺出火の一條に付き、罪を身に引うけて只今入牢の身と相成りました」これを聞くと勘助病床からムツクリ跳おきた、勘「そんな事なら何故其節一應の相談をしなかつた、なした罪は消え様はないが、火を放つたのも自分

の徳徳づくでした譯ではない、大勢が、りで拙者を殺さんと致す、夫を救ふための仕業であつて見れば、罪の定まるまでは入牢なぞさせんでも、又當り前の放火と同様の扱ひは役人も其心を得ぬ、幸ひ宇都宮國綱公からのお召もある、拙者之より登城致す、勤助思はず立上つた、ところが斯は如何に左りの足が千切れるばかりに引釣つて流石の勤助も勤「これは」と云ふと尻居に挫と打倒れた、其處へ醫者の竹田鳳益が何心なく這入つて来る、勤「ヤア鳳益これは如何したものだ、今立上つたところが左の足の筋が怪しく引釣つて堪られぬ」鳳「夫だから必らずともお立ちは御無用と申上げてある、槍の突傷のため膿を澤山に持ち切らなくて全治覺束なきため切つて療治を、仕りました、全快したところが貴下は跛者たることを免がれませぬ」勤「ウム、傷のために跛者となつたのか、今迄の跛者で澤山だ、此上の跛者は酷い」鳳「左様でございます」勤「さうか生れもつかぬのに既に片眼を失ひ、今又左の足が満足ならぬこととなつた、イヤ武藝者として片眼跛者も變つて居て面白からう」氣樂な人間だ、何で面白いことがあるものか、鳳「まことに何うもお氣の毒千萬」勤「何しろ城中へ急用出来、今直に參らなくてはならぬ、片足が釣つて仕方がない、何とかならぬか」鳳「まだ能く固まりませぬ、今暫く御辛棒なさるが可うございます」勤「イヤ一刻も猶豫は出来ぬ、直に參らなければならぬ」鳳「そんな性急なことを仰有つても致し方がありません」勤「夫がための醫者ぢや

ないか、應急の手當をしたら可さうなもの」鳳「幾ら醫者でも其慶譯には參りませぬ」勤「不可ぬとなら仕方がない、痛くても我慢する分のことだ」再び身を起して立つたが、一方は二寸も低く片ツ傾りに立つの外はありません、夫でも立つには立てたから、其處で衣類を着換へ直様御城中へ出ることにになりました、太守備後守國綱公は疾よりお待兼のところ直にお目通り仰せ付られた、勤助が出て来る姿はどうも大變な譯、六十人も相手に抜群の働らき、人死が三十人足らずも出来た、定めし威風四邊を拂ふ堂々たる人物と思ひの外、極の小男で而も片眼跛者と来て居るから、歩くところを見ると階子段でも駈上る様な案排、不具の上に御叮嚀に不具を加へたのだから風采が上るも上らないもない、左右に居流れたる御家來方可笑の可笑くないのぢやアありませぬが、流石は宇都宮家の制度が嚴肅であるから笑ひ聲を發するものはありませぬ、太守國綱もチト意外であつた、國「汝が雀の宮に於て大層な働らきを致したる山本勤助であるか」勤「左様手前ことは三州牛久保の住人山本勤助、今回は又お目通り仰付られ勤助身に取り此上の大慶はありませぬ」國「承はつた働らきによれば却々の手練、諸國修行は槍か劍道か」勤「恐れながら手前は御覽の如き不具者でございます、勿論此傷は皆武道で得たものではあります、不具者には不具相當の修行があります、槍劍等で諸國を歩くのではありませぬ」國「ホ、ウ、槍でもなく劍でもなくと云へば、馬術弓術の類か」勤「馬術

も弓術も不具者に相當の藝道ではありませぬ、手前の修行は軍學兵法でございませぬ『アツ
 成程、軍學兵法：：如何にも軍學兵
 法は居ながらにして百萬の大兵も動
 かし得る、あゝ左様にてありつるか、
 夫にしては雀の宮の働らき誠に天晴
 れ、其働きによつて見ても槍なり劍
 術なりで立派に世に立るものである
 今日初對面盃を取らするであら
 う』勘助 忝なき仕合せにございま
 す』勘助酒と来ては眼がない、勿論
 片眼は既にながはれは酒のためで
 はない：：引受け／＼頂戴致しまし
 た、身分の高い人の前では下さつた
 酒は飲む眞似をする：：只お 忝頂
 戴と云ふことが頗る名譽として居た、呉れる方でも呉れる眞似をし、貰ふ方でも貰ふ眞似を



をして、只々戦々競々として此のお 盃 頂戴の時に、何か疎忽のなきことのみを氣にして居
 たのは、徳川時代になつてからのこと、ホンの御酒下されが形式だけに流れて了つたの
 は、天下泰平になつてからでございませぬ、戦國時代には英雄豪傑も澤山あり、其形式だ
 けで喜ぶものは誰もない、左れば御酒下されと云へば、如何な高貴の前でも遠慮會釋なくガ
 ノガブやつたもので、斯うなると呉れる方でも呉れ心が可ければ貰ふ方でも貰ふ心が可い、
 備後守國綱公も却々の酒豪であらつしやる、勘助の姿容儀は醜いが、類は友とやらで豪酒が
 大層お氣に召した、主客は全く酒を戦はすことゝなつた、勘助は傷療治の手當中で醫者から
 も堅く酒は止められて居た、傷み所に熱をもつて来て飲めば飲む程痛むが勘助には思惑があ
 る、清三郎を助け出さねばならぬ、都々逸子の云ふ、酔はして聞きたいことがある、酔つて
 云ひたい事がある、これは人情をよく穿つて居る、人情の急所は斯様な場合にある、勘助敢
 て酒に力を借りる程心の弱い人間ではないが酔つた紛れに云つた事は、假令事柄が拙くても
 其咎を酒に科せられるから、大いに酔つて大いに吹立てようとの積り、後年甲州家の大軍師
 となる位だからチャンと計略を描いて、傷所の痛みを堪え／＼大いに飲んで居る、備後守は
 御機嫌斜ならず、備後守様な豪傑が我城下へ参つたのは予の満足するところだ、澤山飲め、予
 も大きに過したい』勘助 忝なき仕合せ、殿は遠來の客として某を斯くお待遇下さる、勘助

の大悦何ものか之れに加ふる事がありませう、去ながら此處に勘助胸に落ちぬことがござる。『國』汝の胸に落ちぬとは何事ぢや。勘助のお心に引替へて御家來方：イヤ御家來方の皆が爾ではござるまいが、其内の或る方には或は壬生に御親類でもおありなさるか、此勘助を憎むこと甚しい、某過言かは存じませぬが、夫君臣の心が常に一致するをもつて兵法の第一義と致す、君の心と臣の心と別れくと相成つて居る時は、戦ひ合期せずして勝つべきに負を取るは古今に其例し尠しとなさず、是は事新らしく勘助が申上げずとも賢明なる殿には御承知でござらうが、其上下心を一にするに云ふ事は當に合戦の時ばかりではありますまい、然るに殿は斯く御歡待下されて御家來の内に勘助を憎むものがある、まことに勘助の胸に落ちざるところでござる。『御家來方一同は眼と眼を見合せた。』〇どうも勘助大變なことを云ひ出した、誰も彼れを憎むものはない、併し多くの家中だ、中には憎んだ奴があつたかも知れぬ、殿は御氣象潤達のお方、心に合はぬとならば何を仰せ出されるかも知れぬ、勘助に其名を指されるのは災難』と驚いてをります。『ハ、ア予が家來に汝を憎むものが、左様なものはない筈だが憎んだとは何う云ふことであるか』勘左れば勘助申上げます、雀の宮に於て壬生の者と轉得寺の坊主共合せて六七十人、某を取巻いて討たんと致し、某必死となつて戦ふと雖も多勢に無勢、最早討死と覺悟しましたる時、俄かに轉得寺に失火起り炎々とし

て燃上ります、此火災に少しく坊主共氣を取られて亂れ足になつた、其處を付込み辛うじて敵を討ち靡けましたのでござる、勘助に當夜の働らきを充分にさせたものも、御賞美下さることは勿論の儀と心得をります、殿には其思召があるのでござらうが、御家來方の内には殿の思召を知らぬか、又知つても勘助を憎むの餘り態と面當てに致すのでござるか、此の御賞美ある可きものを轉得寺出火の罪に問うて入牢申付けられ、只今御牢内に呻吟致してをります、斯くては殿は勘助の働らきを御賞美となり、御家來方は勘助の働らきを喜ばざること、相成ります。『國』ウム成程汝の働らきを助けたものを罪するはよくないな。勘サア其罪に落ちたものは町家の卑い奉公人、勘助に於てそれを免や角申すのではありませぬが、宇都宮の御家のため君臣心を一にすることがならぬとは嘆はしき次第、關東表に權威を振るひ出羽奥州も睥睨する御當家には斯様なことは一つの不祥事ではござるまいか。竿の頭に鈴と云ふが理窟は何うでもつくものでござります、勘助形容は悪いが辯舌は滔々たるものだ、軍學の智を應用して表向きに助けて呉れと云はず、助かる様に持ち込んだのは巧者なものだ、殿は暫く考へて居られたが、國、勘助その罪に落ちたものは何と云ふ名だ。勘これは手前の旅籠屋鶴屋の奉公人で清三郎と申す者、手前の供をして參つたが町人の悲しさに助太刀も出來ず、切ては敵の氣勢を挫くの心をもつて、轉得寺に火を放ちましたので。』國、ウム清三郎と申すか、

よし／＼……是れ刑部』刑ハ、ツ津村刑部これは奉行だ、此座に列して居たが一ト膝進んで、頭を下げた。國轉得寺を焼いた清三郎なる者は、牢舎申付けてあるか』刑如何にも』
 國只今山本勘助の申すところと同じ次第にて牢舎させたのか』刑その通りでございませう。然らば清三郎は勘助へ褒美として取らせよ、其儘勘助へ引渡してやれ』刑畏りました』と云ふと、此時傍らに控へたる安住隼人助……これは壬生方の縁者であることは前にも申上げてございます。隼アイヤ清三郎を許す儀は暫らく』國何ぢや隼人』隼ハッ其儀はよろしくございませぬ、清三郎お許しの儀は隼人助強て御諫言申上げます』國フ、ン夫は何故』
 備後守國綱は却々の人物で、此の人よく家來共の諫言を容れた、何れの世何れの時と雖も諫言を容れる程の太守に愚物はありませぬ、幾ら豪い人間でも人の意見を用ぬ人物は逆も名をなす程のことは出来ない、尤も諫言を用ゆると云つても用ゐて可いか悪いかの鑑別を付けるが明君で、同じく諫言でありながら、甲は右と云ひ乙は左りと云つた場合には、兩方用ゆる譯にはなりません、夫をよく鑑別して用ゐるが明君でございませぬ。隼手前は壬生の家の中に所縁のものでありますが、所縁があるために斯様なことを申すと、御聞取あつては甚だ心苦しい、去ながら知つて言はざるは臣として其君に忠ならず、依つて腹藏なきところを申述べます、清三郎は國法を犯して轉得寺を焼きましたもの、これを故なくお許しに相成りまする

時は、此後放火の罪人が出ました時如何になさるゝ思召でございませうか、大義には親を滅すことへ申す、勘助の手柄御賞美の餘りとは云へ清三郎を許す儀は政道の妨げと存じます、此儀は隼人助何處までも不服でござる』四邊を屹と睨んで切諫に及ぶ、流石の山本勘助もコリヤ堪らぬと思つたのか俄かに盃を下におき、勘アイヤ安住殿とやら暫らくお待ちなさい、今の御一言は甚だ其心を得ぬ、清三郎を某に下し置かるゝは一國の政治の障りと仰せられたな』隼如何にも』勘夫は一を知つて二を知らぬと申すもの、成程大罪人を私に助けるのは宜しくない、大義は親を滅す罪あるものを罰するのは國の掟、それは立派に其通りだが、同じ罪ありと云つても其處には二様の別がなくてはならぬ、こゝに盜賊があつて我父を殺さんとす、父を殺されてはならぬからと其子が盜賊を切棄てた、此子は全く人を殺したに相違あるまい、役人召捕つて調べたら其通りの次第と分つた、サア此子は尙且人殺しをした所置をすれば政道が立ち、親の危急を救つた孝子として助ければ政道が立たぬか、惻口さうなことを云ふ安住殿、これは如何でござるな』隼ウム夫れは……』勘サア此返答は巧く出来まい』隼イヤ出来ぬことはござらぬ、山本氏の積りでは盜賊を殺した孝子と、火をつけた清三郎と同じ事だと云はれるだらうが、それは場合が違ふ、火を放つて轉得寺を残らず焼き拂ひアレ程の大きな寺が和尚は殺され殆んど廢滅に及ぶ仕儀、火を放つなければ山本氏を助けら

れぬ譯でもなし、夫と是れとは場合も違ふ、殊には他國のお方で御當家に所縁もない、某の諫言に邪魔を入れられるとは心を得ぬ、お黙りなさい」勘助グツと一と膝進め、勘助これは怪しからぬ、全體罪人の清三郎は殿から某に下しおかれたものだ、某喜んでお受けに及ぶ、既に某に下し置かれた清三郎、其許が百萬言を費すとも某の承知しない時は、清三郎を漫りに罪に行はふ譯にはならぬ筈、されば清三郎一條に就ては勿論某が口出しをする所以は充分ある、黙れとは何事でござる、是れでも清三郎には關り合がないと思はつしやるか、奇怪千萬のお言葉、黙れとは何事でござる」隼人助これは失策た少し言葉が過ぎたとは思つたが、馴も舌に及ばずで仕方がない、勘サア黙れと仰せられた譯を聞かう、加旃、其許なぞはお心得なきかも知れぬが、論言は汗の如しと云ふ、されば殿の一言は風の如きもので一ト度出ては戻らず、一ト度吹去つては復還るべきものにあらず、これを軍中のこととすれば、大將の一言は善惡に拘らず守るをもつて軍令の第一義とはするなり、漫りに大將の軍令を批判するものが合戦に於て勝たる可き謂れはあるまい、其許の諫言立ては師匠の出しおくれで役に立つものでござらぬ、夫ともまた御意見がござるかな」辯者の勘助一言は一言より鋭く突込んだ、安住隼人助の諫言は諫言として立派なものに違ひないが、全く時機を得なかつた、夫のみならず黙らつしやいの一言が云ひ過だつたから立派な諫言でも

通す譯にならなくなつた、時に大守の備後守如才ないお方だから、莞爾として「ヤヨ隼人助、汝の諫言まことに當を得たことと思ふが、今更山本勘助に褒美として取らしたものを取戻す譯にはならぬ、イヤ勘助天晴の辯舌、口も八丁手も八丁とは汝のことだな、隼人助盃を取らする、勘助モ些と飲め」御機嫌の體だ、勘助も備後守殿の御器量に感服して、猶も御酒を頂戴して御暇を申上げ、漸く旅籠屋鶴屋へ立戻りましたが、病氣揚句如何に豪氣でも斯様に大酒をしたのだから堪りません、戻ると其儘落膽して横ッ倒しに褥に倒れると其儘鼾聲雷の如く寝込んで了ふ、其日の暮方になつて清三郎は出牢、嬉し喜んで立歸つて来る、淺五郎夫婦の喜び、別けてもお阿喜に於ては死せるものが蘇生つた様に取籠つて嬉し涙に暮れたのは當然、濕り勝の鶴屋の一家は俄かに春風が吹いて来た、扱山本勘助に於ては翌日に至つて熟々考へた、安住隼人助を始めとして壬生のものに縁故ある人物は御當家に尠なくない、幸ひに備後守殿大量に在ませば何事もない様なもの、萬が一我身が永く此城下に在つたならば、内心快からず思つて居る連中がありとすれば、再び間違ひが出来ぬとも限らぬ、足許の明るいうちに立出した方が可い、豪傑でもあるが素より事を好む勘助でございませぬ、醫者の竹田鳳益老も幾分氣支つたが先々負傷の方も跛者になつたゞけで其外は全快となつた最う立立しても差支へない、殊に清三郎を助け出してやつた上は心に懸ることは少しもない

と、其處で支度に及んで愈々宇都宮の城下を出立に及びました、鶴屋夫婦清三郎夫婦も途中迄送つて来たが、是れは途中で別れ、相變らず振分の荷物に一本の鐵扇を携へ、日ならず常陸國水戸の御城下へ這入つて来ました、此時は此處は佐竹の領分五六日逗留をして諸所を見物致し、夫より下總上總安房を經巡りましたが、此間には別段取立て、お話を申上げる様なことはありませぬ、恰度上總國北葛飾の真間の里へ差掛つて来たのが秋の中ば、空定めなき秋の日和癡、今迄一天拭ふが如き快晴であつたのが俄かの雨模様、薄墨を流した様に雲の往還りが激しくなると、見る間に最うポツリポツリと降出して来た、途中で雨に逢ふのは旅をするものに於いては覺悟の前でございませぬ、荷物の中には合羽の様な雨を凌ぐものが用意してある、笠は常に頂いて居るから差支へはない、雨に合つた逆格別驚く次第ではないが、併し大雨には甚だ困る、況て大風が吹く、風に雨…雨風が一所と云ふ譬へにある位で大風大雨一時に來たるのは困らぬ譯には參りませぬ、勤あ、甚い雨風だ、これでは如何することもならぬ、何處か雨を凌ぐところはないか、勘助跛者ながら足は早い、チヨキンチヨキン、チヨキン殆で蝗蟲の飛ぶ様だ、急いでやつて來て見ると此處に軒の傾いた一ツの庵がある、是幸と軒下へ飛込んで濡れたる衣類の袖を絞り、空打眺めて暫く休んでをります、雨は愈々降りしきり風は益々加はつて如何とも致し方がない、稍一刻許りも立つて居たが庵の中は尼

寺でもあるか、鉦を打鳴らし女の聲で經を讀んで居る様子、然るにこの女の聲が陰に響いて何となく物凄く聞こゆる
 勤ハテ變な聲だな」と
 思つて居るうちに、經が濟むと庵の戸が開いて顔を出したのは、年の頃三十前後頭を圓めた跡が青青として而も其顔形ちが田舎に珍しい善い標緻尼、あ、旅のお方、其處は雨が吹つけて御難儀であらう、穢苦しいが此方へ這入つてお休みなされませ」勤イヤ、忝なうござる、偕て斯様な大雨で難儀を致す、御言葉に甘へて暫く御厄介に相成るでござらう」雨を



ブル／＼と振り、笠を脱いで勘助中へ這入つて来た。尼「今火を焚いて進せる濡れたものを乾かしなさるが可い」勘「イヤ其儀には及ばぬ、決してお構ひ下さるな」云つてる内に、尼は圍爐裏へドン／＼枯枝をくべて火を焚き始めた、勘助四邊を見廻すと此庵の中は尼の顔と反對に穢苦しいの穢苦しくないのぢやアありません、どうも不思議な尼だ、若い身空で髪をおろし讀經回向に餘念のないのは賞む可きだが、何となく其物ざしが怪しい、殊には家の中が亂雜の何のつて物の置場も一向定まらぬ、タツタ一人の住居だから最少し掃除でもして置いたらよさうなものだと思ひながら、火に當つて居る、雨風は何時熄むとも見とめが付きませぬ、勘「此邊に百姓家でも何でもよいが、一泊頼む様なところはあるまいか、最うソロ／＼日も暮かゝる様子だが」尼「是より三丁程先へ往くとおしげ婆アさんと云ふのがある、此家なら人を泊めます」勘「こゝから三丁、イヤ夫は何より難有い、假令尼殿とは云へ女一人のところへ、夜に入つては厄介になつて居られぬ」尼「まだ日は暮れませぬ今に小熄みになるでせう、少し小降りになつてからお出が宜しうございませう」此時表の方へバラ／＼と二人の男が駈込んで来た様子、軒の下に立つて袂を絞りながら 甲「太平さん甚い降りだな、一生懸命一里の途を飛んで来た、一里の間に此尼寺より外家がねえのだから堪つたものぢやアない」乙「さうよ這麼降りには何年にも出會したことがないな、家まではまだ一里半、三十丁

行けば那の半左衛門とこで雨具を借りるだ、此尼寺には空俵一つあるではなし、情ないなア」
 甲「オ、情ないと云へばおしげ婆アのとこのお糸だ、何に崇られたものか段々瘦けて来て身體は名前の糸の様に細くなり、血の氣のねえ色をして居るさうだ、病むでもなし病まないでもなし、細つて往くところから考へると瘦せ死に死ぬのだから氣の毒なものだなア」
 乙「ウムおしげ婆アさんと云へば此頃ヒヨナ評判を聞いたが、お主は知らぬか」甲「甚麼評判だなア」乙「何でもあの家には不思議なことがある、お糸が十八の娘盛りで彼塵仕末になつたのも不思議の内だが、あの家は乃公が様な傍道でない武藏野へ出る街路傍、時々旅の人が一夜の宿を借るが、あの婆アさんの家へ這入つたが最期、出て来たものはねえとのことだ」
 甲「フンすると婆アさん旅の人を殺してもするのか」乙「馬鹿を云つてる那婆アに何で人なぞ殺されるものか、あれは人殺しの方ぢやねえ人殺されの方だ、其婆アさんと娘一人の家で這入つたものは出た例しがねえと云ふのだから不思議ぢやアねえか」甲「成程不思議だなア、そんな事が全くあるのかなア」乙「全くどころぢやアねえ、其の通り少しも違ひはねえのだ」
 田舎の人は聲が高い、此の立話しを聞くともなく勘助の耳に這入つた、尼の眼は異様にかゞやいて外の方を凝と見詰めて居たが、其内に雨熄をして居た二人の百姓は、小降りになつたと見たのかスタコラ飛出して往つて了ふ、勘助は素知らぬ顔で 勘「大きに衣類の濡れが乾いた

様だ、ドレ徐々と出掛けようか、其おしげ婆アさんの家へ往く道は……」尼「茲は四ツ辻、右の道が本道、これから三丁ばかり先に大きな榎がある、其の下の一軒家がおしげ婆アさんの家」勘「秋の日脚とは云ひ乍ら、何となく薄暗くなつて来た様だ、大きにお世話になつた夫では……」尼「今夜はおしげ婆アさんのところへお泊りが宜しうございます、其先には三里も往かねば家はありませんぬ」勘「あゝ夫へ御厄介を頼む積りだ、左らば……」と勘助尼寺を出たが今の尼の様子は何う考へても分らない、又百姓の立話しの模様ではおしげ婆アと云ふ奴も安達ヶ原の一ツ家の鬼婆アでもある様に思はれる、何でも構はぬいろ／＼な者に出會するのが修行、一つ様子を探つて見よう、萬が一婆アが不審な奴であつたら打殺して後の憂ひを拂ひ旅人の往來を易くせねばならぬ、再び大雨の中をボツ／＼歩みました、三丁ばかり来たと思つたから四邊を見るが榎の木もなければ百姓家もない、又三丁も来たがまだ見當らない、ハテな尼が云つたばかりでなく庵の外に休んで居た百姓もおしげ婆アの話をした、ない筈はあるまいにと又スタ／＼、雨はドン／＼降る日は暮れる、四方を見廻しても小さな木立はあるが雨を凌ぐ可き大樹は見えません、大きに焦慮て又々四五丁、到頭半道ばかりも来たと思ふ頃、向ふの方にチラ／＼と火が見えた、是ならんと来て見ると成程門に大きな榎がある、其下の壊れかゝつた一軒家、中では六十位の白髪婆が焚火をし其上に鍋を掛け何か煮て居る様子でございます。

様子でございます。

(第二十四席) 勘助真間の一ツ家に宿を求むる事、并に勘助再び妖怪

に出會の事

鴻の臺寄りの往來端、おしげ婆アの表戸をガタガタと開けた山本勘助「勘許せよ」婆アさん鍋の蓋を取つて長い箸を突込うとして居た途端に、ガラリ戸が開いたから驚いて「誰だえ」怪訝な顔をして表を見た「勘、あゝ行き暮れた旅の者だ、雨と風に頼まされて難澁致す、一夜の宿を頼みたいが」夫は定めしお困りでございませう、斯様な汚穢しいところでも好ければ……と申し上げたいのでございますが、お宿の儀は御免下さいませう、少し仔細がありまして「勘、ハテ泊めることはならぬ、仔細があると申すのだなア……併し見らるゝ通りの雨と風だ、最う一寸も出るのが難儀、どうか爾う云はずと泊めては呉れられまいか」し「お氣の毒だが、仔細がござるから」勘「仔細々々と云ふが其仔細は如何云ふ事か、仔細を聞いて成程と台黙すれば強つてとも云へぬ譯、幾ら困つたから連不可ぬものを泊るは没分曉どうか其仔細を話しては呉れまいか」勘助はチト見當が外れた、草庵の尼の言葉では此しげ婆アさんは旅の者を泊めて呉れるとある、百姓の間はず語りには此家へ這入つたものは出た

ことがないとある、左れば是れは餘程の悪婆で旅人を何とかして殺してもするのであらう、宿を求むれば無論喜んで泊めて呉れるに違ひないと思つて来た、ところが泊めては呉れぬ、仔細あつて泊められぬと云ふ、併し何れにしろ此吹き降りでは外へ出られませぬ、泊めぬと云つても是非泊らなくつてはならぬ、其處で斷はる仔細はと突込んだのでございます、婆は奥の方を振り返りながら、「仔細と云ふのは外ではありませぬが、此頃人の噂にはおしげ婆アの家へ泊り込んだ旅の者は満足に立つて行つたものは一人もないと専ら云ひ囃します、如何にも此婆アが悪黨の様で、何か旅のお方を何うかして了ふ様に云はれます、左様なことを云ひ觸らされるのが残念さに私は旅のお方は一切泊めぬと思つて居るのでございます、又實際お泊りなさるお方はお身が危うひに違ひありません、どうか斯う云ふ譯でございませぬ、直にお立出でを願ひます、泊つて下さらない方が貴下のお爲であり私のためでございます」勤ハテ分らぬことを云ふぢやないか、泊れば我等の上に悪いと云ふのは一應分つて居るが、お前のために可いとは何う云ふことだ」世間の人の口うらに乗らないから可いと申すのでございます」勤愈々何うも分らない、シテ見るとお前の家へ泊り込んだもので、災難にかゝるのはお前達がやるのではなく、外にやる奴があると云ふのらしいが、さう聞く上は尙更のことだ何んでも泊めて貰はなければ……」云つてゐるところへ奥からヒョロ／＼しながら

ら娘が出て来た、見ると細い細くないのつてよく骨と皮ばかりと云ふことを申しますが、全く骨と皮ばかりとは此の様なものゝことで箸に薄い衣をかけた様な女だ、骸骨が剩餘でも持つて来なくてはならぬ様な鹽梅式、しお糸お前また出て来たね、這入つてお出で」阿母さんお客様を泊めて上げて下さい、さうでないといふさんがブリ／＼して私しやア悲しくなりますから」我慢おし／＼旅のお方に間違ひがあつては、私達親娘は評判のため此土地に居られなくなりませぬ」糸ダツテ阿母さん、そんなことを云はずにねえ」瘦せこけた十八の娘が阿母に取絶つた、此娘の口から出た久さんの一言は勤助の胸に突込む様に響いた、偕は久さんなる者が此母子を玉に使つて旅人に害を加へるのだな、よし其久さんは如何なるものか是れは其奴をトツ捉まへなくてはならぬと勤助忽ち決心した、勤御老婆御心配なさるな、お娘御が云はれる通り、今宵は是が非でもお宿を願ひたい、豈夫に取つて喰はれる様な拙者ではない」エ、ツ取つて喰はれる……」何故か老婆のおしげは驚いた様子、勤助が取つて喰はれるものでないと云つたのは何の意味もなかつたのだが、老婆が驚ろくところを見ると、久さんなる者は人を取つて喰ふ奴かも知りませぬ、勤さう吃驚せずとも可い、拙者は只の修行者ではござらぬ、如何なる者が来ようとも更に恐れは致さぬ、拙者が泊ればお娘御が其久さんに顔も立つ譯だ、マア／＼厄介でも泊めて貰はう」圍爐裏へドン／＼踏込んで濡れた草鞋

を手早く解くし、あゝ旅のお方、貴下が幾ら強くても久さんに敵ふものではありませぬ、悪いことは云はない、早くお立ちなされて下さい、四刻となると久さんが屹度来る、三里此道を往けば人里もあり、大きな百姓家もあります、其處へ行つて泊つて下さるのが貴下のお爲めばかりぢやない、私等親子のためにもなります」勘「マア可い、不思議なことが耳に這入らぬうちなら兎も角も、此の家へ這入つたが最後出たものがない、其の不思議の根本はお前達親子でなくして久さんと云ふ人にあると聞いては、金輪際此の家を出ることが出来ぬ、夫が拙者の氣性だ、構つて貰はなくても可いから此圍爐裏の縁に置いて呉れ」ドツサリ唇を落つけて逆も動く可き模様がありませぬ、老婆も我を折つたものと見えてし「それ程仰有るならば仕方がありませぬ、定めし御空腹でございませう、あがれる様な物ではありませぬが、今粟の飯を焚きました、是なと差上げませう」勘「ホウ粟の飯か夫は結構だ、早速頂戴しよう」此様子を見て居た娘は其瘦せかけた顔に微笑を見せて、其儘納戸へ引込んで了ふし「サア御飯」と粟飯を出しながらし「南無阿彌陀佛」勘「これは出来たてだけあつて粟の飯でも格別旨い、時に老婆その久さんと云ふのは全體何者だな」し「何だか性體が知れませぬ」勘「性體が知れぬ……ト云つて人間だらう何處のものだ」し「何處のものとも分らず、形は人間の様ですが……」勘「何處のものとも知れぬ筈はあるまい、現在娘とは雷ならぬ仲の様に思はれる

が」し「サア其娘との馴染が可怪いのでございませぬ、アノ娘も今でこそ那麼に瘦せ衰へて骨と皮ばかりに成つて了ひましたが、半年以前には人並優れて肥つてをり、顔質も十人並と世間の方々が云つて呉れました、最う十八の娘盛り、今年は何處へか嫁付るなり婿を貰ふなりしようと思つて居ましたところ、恰度三月の中旬の事でございませぬ、或夜フト眼が覺めて見ると傍に寝て居べき筈の娘が居りませぬ、人里遠き此の離れ家誰も人の来る筈もなく、豈夫に忍び男があるとも心得ませぬ、大方便所へでも行つたものと思ひ、其儘又一ト寝入りして眼を覺して見ると、彼是夜明け、まだ娘は戻りませぬ、驚いて方々尋ねて見ると裏の物置と云つたところで小さな小屋、あの中へ這入つて前後も知らず寝てをります、漸々起して連戻り段々仔細を尋ねますところが、何所のものとも知れぬ好い男で、久さんに連れられて遂に只ならぬ仲となつたと云ふ、何處の息子だと尋ねましたが是迄見たこともないお方、今度来たなら能く家を聞合せますとの答に、出来たものは仕方がない、好いた同士ならば一處にしてやらうと存じ、其後家を尋ねさせましたが更に夫を申しませぬ、其内に大びらに泊り込む様になり、様子を見ると其久さんは餘程變なもので、一ト晩枕の敷が重なるにつれて肥つて居た娘が瘦せてゆく、来る時も歸る時も其久さんの姿が消えて失なつて、歩いたところを見ることがありませぬ」老婆はブルツと身を顛はして四方を見廻す様子 勘「ハ、ア来る時も

歸る時も姿が消えるだけで歩いたところも見ぬ、其家を尋ねても明かさなない、又娘が其男と
 一つ寝をする様になつて以来日に／＼瘦せる、成程これはチト怪しいものだ、恐らく人間で
 はないかも知れぬな』し手前も何か妖魔ではないかと思つて、下手なことを云ひ出し却つて
 仇をされる様なことがあつては、女ばかりの此の世帯どうすることも出来ませぬ故、涕を吞
 んで凝と堪へて居るのであります』勘外に變つたことはないか、イヤ旅のものが此の家へ泊
 り込んだが最期、再び出て往つた姿を見ぬと里人の話し、是れは何う云ふ譯か』しそれも不
 思議でございます、斯様な野中の一つ家、途中で行暮れてお尋ねなさる旅のお方も月に一
 人、稀には二人位は必らずあります、久さんはお泊り客のあるのを前からチャンの知つて居
 るものと見えて、客さへあれば莞爾々々として娘を大層可愛がる様子、娘が久さんに惚れ腐
 つて居るのか、夫とも深く欺されて居るのか、久さんの御機嫌を取ることはばかり思つて居ま
 す、お客があるとき最前の様に嬉しがつて是非泊つて頂く様に申すのですが、泊つたお方は何
 處へ往くのか、其晩の内に失くなつて了ふので、全く手前共から朝になつて立つたお方はあ
 りませぬ、夜夜中に必らず往つて了ふ、行暮れてお泊りなすつたお方、夜の夜中に立つ筈は
 ありません、娘に夫れを話すと久さんが何處かへ連れて往くのでせうと平氣でをります、此
 頃は娘の氣もチト變になつた様に思はれてなりません』勘ハ、ア、夜中に旅人を連れ出すと

うも解せぬなア、シテ見ると今夜は拙者も連れ出されるのだらう』し「随分に今迄も二本差の
 お方がお泊りでございましたが其通りで、夫故お断りをしたのでした、貴下も尙且、南
 無阿彌陀佛〜」勘アツハ、ア、イヤ老婆拙者にな南無阿彌陀佛はいらぬよ、何しろ性
 體の知れぬものが娘に付き纏つて居たでは、後々どの様なことが出来るかも知れぬ、拙者が
 其久さんなる者を捉へてよく〜身元を糾してやらう、もし人間でなく妖魔の類ひであつた
 なら打殺して後の憂ひを断たなければならぬ、ドレ〜例も其旅人を寝かす場所へ案内して
 呉れ、最う四刻に間もあるまい』し「さうでございますか」其處で老婆は廣くもございませぬ
 此の草の屋、納戸の此方に疊三疊ばかり敷けます一ト室、元より貧乏な田舎者の住居で疊は
 敷いてありません、箆の子が張つてあるホンノ物置同様なところでございませぬ、是れへ勘助
 を案内致した、勘助こゝへ這入つて横になつたが最初より寝る積りはない、兩刀を褥の中に
 ひき入れ、勘不敵の妖怪サア来い來れ』と相待つてをります、其内に微かに響く遠寺の鐘は
 正しく四刻、此四刻がなると勘助の居る横合の納戸から話し聲が始まつた、娘「オヤ久さん、
 今夜も時刻違はずよく来て下さいました、私は嬉しうございませぬ」久「何でお前のところへ
 来るのに時刻を違へるものか、夫は爾と客人が來たらう、跛足で片眼な小さな男が」口の惡
 い野郎だと、勘助聞耳を引立つて居る、娘「あゝ來ましたよ、よく夫を御存知で」久「御存じと